

草迷宮

泉鏡花

青空文庫

向うの小沢に蛇じやが立つて、

八幡はちまん長者の、おと娘、

よくも立ったり、巧んだり。

手には二本の珠たまを持ち、

足には黄金こがねの靴はを穿き、

ああよべ、こうよべと云いながら、

山くれ野くれ行つたれば……………

三浦の大崩壊を、魔所だと云う。

葉山一帯の海岸を屏風で劃つた、桜山の裾が、見も馴れぬ獣のごとく、洋へ躍込んだ、一方は長者園の浜で、逗子から森戸、葉山をかけて、夏向き海水浴の時分、人死のあるのは、この辺ではここが多い。

一夏激い暑さに、雲の峰も焼いた霰のように小さく焦げて、ぱちぱちと音がして、火の粉になつて覆れそうな日盛に、これから湧いて出て人間になろうと思われる裸体の男女が、入交りに波に浮んでいると、赫とただ金銀銅鉄、真白に溶けた霄の、どこに亀裂が入ったか、破鐘のような声して、

「泳ぐもの、帰れ。」と叫んだ。

この呪詛のろいのために、浮べる輩やからはぶくりと沈んで、四辺あたりは白泡しらあわとなつたと聞く。

また十七ばかり少年の、肋膜炎ろくまくえんを病んだ拳句が、保養にとて来ていたが、可おそろし恐からだく身体を氣にして、自分で病理学まで研究して、0、などと調合する、朝ちようせき夕はか検温氣で度を料る、三度の食事はかりも度量衡で食べるのが、秋の暮方、誰も居ない浪打際を、生白い瘦脛やせずねの高端折たかはしより、跣足はだしでちよびちよび横歩ある行きで、日課のごとき運動をしながら、つくづく不平らしく、海に向つて、高慢な舌打して、

「ああ、退屈だ。」

と呟つぶやくと、頭上がけの崖の胴中どうなかから、異声を放つて、

「親孝行でもしろ——」と喚わめいた。

ために、その少年は太いたく煩わづい附ついたと云う。

そんなこんなで、そこが魔所だの風説は、近頃一層甚しくなつて、知らずおおくずれに大崩壊のぼへ上のぼるのを、土地の者が見着けると、百姓はくわ杖つえつ支つき、船頭みよしは舳しほに立たつて、下くだりろ、危あやい、と声を懸かける。

實際魔所でなくとも、大崩壊の絶頂やげんは薬研うつむを俯うつむ向けに伏ふせたよ
うで、跨またぐと鏡あぶみの無ないばかり。馬の背せに立たつ巖いわ、狭せまく鋭とく、踵くびすか
ら、爪つまさき先さきから、ずかり中なか窪くぼに削がつた断崖がけの、見下みくだろす麓ふもとの白
浪なみに、揺ゆり落おとさるる思おもいがある。

さて一方は長者園ながぎさの渚なぎさへは、浦の波なみが、静しずかに展ひらいて、忙せわしくし
かも長閑のどかに、鷄とりの羽はたたたく音がするののに、ただ切立きつたての巖いわ一枚、

一方は太平洋の大濤が、牛の吼ゆるがごとき声して、緩かにし
 かも凄じく、うう、おお、と呻つて、三崎街道の外浜に大畝りを
 打つのである。

右から左へ、わずかに瞳を動かすさえ、杜若咲く八ツ橋と、
 月の武蔵野ほどに趣が激変して、浦には白帆の鷗が舞い、沖を黒
 ろけむり煙の竜が奔る。

これだけでも眩くばかりなるに、踏む足許は、岩のその剣の
 刃を渡るよう。取継る松の枝の、海を分けて、種々の波の調
 べの懸るのも、人が継れば根が揺れて、攀上つた喘ぎも留まぬ
 に、汗を冷うする風が絶えぬ。

さればとて、これがためにその景勝を傷けてはならぬ。大崩

壊れの巖いの膚わは、春は紫に、夏は緑、秋くれ紅ないに、冬は黄に、藤を編
み、蔦つたを絡まい、鼓ひ子花るも咲き、竜胆りんどうも咲き、尾花なびが靡なげば月も
射さす。いで、紺こんじよう青の波を踏んで、水天の間に糸のごとき大島
山に飛ばんず姿。巨匠のが鑿のみを施した、青銅の獅子しの倂おもあり。その
美しき花の衣は、彼が威靈たを称たえたる牡丹花ぼたんかの飾かざりに似て、根に寄
る潮の玉を砕くは、日に黄金こがね、月に白銀、あるいは怒り、あるい
は殺す、鋭とき大自在の爪かと思ゆる。

二

修業中の小次郎法師が、諸国一見の途みち次すから、相州三崎まわり

をして、秋谷あきやの海岸を通つた時の事である。

件くだんの大崩壊おおくずれの海に突出でた、獅子王の腹を、太平洋の方から

一町ばかり前途ゆくてに見渡す、街道端ばたの——直ぐ崖の下へ白浪が打寄

せる——江の島と富士とを、簾すだれに透かして描いたような、ちよつ

とした葭簣張よしずばりの茶店に休むと、媪うばが口の長い鉄葉ブリキの湯沸ゆわかしから、

渋茶しぶちやを注いで、人皇にんのう何代の御時おんときかの箱根細工の木地盆もに、装

溢りこぼれるばかりなのを差出した。

床しょうぎ几ありかの在処ありかも狭いから、今注いだので、引ひっかたむ傾なびいた、湯沸

の口を吹出す湯気は、むらむらと、法師の胸に靡なびいたが、それさ

え颯さつと涼しい風で、冷い霧のかかるような、法衣ころもの袖は葭簣よしずを擦

つて、外の小松へ翻る。

さわやか

爽やかな心持に、道中の里程を書いた、名古屋扇も開くに及ばず、畳んだなり、肩をはずした振分けの小さな荷物の、白木綿の繋ぎつなめを、押遣おしやつて、

「千両、」とがぶりと呑み、

「ああ、旨うまい、これは結構。」と莞爾にっこりして、

「おいしいついでに、何と、それも甘うまそうだね、二ツ三ツ取つて下さい。」

「はいはい、この団子でござりますか。これは貴方あなた、田舎出来で、沢山たんと甘くはござりませぬが、そのかわり、皮も餡子あんこも、小米と小豆きの生一本でござります。」

と小さな丸鬚まげを、ほくほくもの、折敷おしきの上へ小綺麗に取つてく

れる。

扇子おうぎだけ床几とこざしに置いて、渋茶茶碗しぶちやちわんを持ったまま、一ツ撮つまもうと
した時であつた。

「ヒイ、ヒイヒイ！」と唐突だしぬげに奇声を放つた、濁声だみごえの蝸ひぐらし一匹。

法師が入つた口とは対向さしむかい、大崩壊おほなげの方の床几とこざしのはずれに、
竹柱たけむらに留とどまつて前刻さつきから——胸むねをはだけた、手織じま縞しまの汚よごれた単衣ひとえ
に、弛ゆるんだ帯おび、煮染にぞめたような手拭てぬぐいをわがねた首くびから、頸うなじへか
けて、耳みみを蔽おほうまで髪かみの伸のびた、色いろの黒くろい、巖がんじよう乗造のりぞうりの、身
の丈拔群たけはきなる和郎わろ一人。目の光ひかりの晃きら々きらと冴さえたに似にず、あんど
りと口くちを開ひらけて、厚あい下唇したぐちを垂たれたのが、別わかに見みるものもない茶
店の世帯せたいを、きよろきよろとみまわしていたのがあつて——お百姓ひやくしやうに、

船頭殿は稼ぎ時、土方人足も働き盛り、日脚の八ツさがりをその体は、いずれ界限かいわいの怠惰なまけものと見たばかり。小次郎法師は、別に心にも留めなかつたが、不意の笑声に一驚を吃きつして、和郎の顔と、折敷の団子を見較くらべた。

「串じょうだん戲ごではない、お婆ばあさん、お前は見懸みかけけに寄よらぬ 剽ひょう 軽きんものだね。」

「何でござりますえ。」

「いいえさ、この団子は、こりや泥ねか埴つち土こしらで製つくえたのじゃないのかい。」

「滅相めっしょうなことをおつしやりました。」

と年とし寄よりは真顔まへになり、見上げ皺しわを沢山たんと寄よせて、

「何を貴方、勿体もない。私もはいわし法然様ほうねんさま拝みますものでござります。吝しわんぼう齋坊の柿の種が、小判小粒になればと云うて、御出家に土の団子を差上げまして済むものでござりますかよ。」

まつしやうじき真正直に言訳されて、小次郎法師はちと氣の毒。

「何々、そう真に受けられては困ります。この涼しさに元氣づいて、半分は冗じやうだん戲ごだが、旅をすれば色々しやうの事がある。駿すんしゆう州

の阿部川餅もちは、そっくり正しやうのものに木で拵こしらえたのを、盆ぼんにのせて、看板に出してあると云います。今これを食べようとするのを見てその人が、

と其方そなたを見た、和郎はきよとんと仰向あおむいて、烏も居おらぬに何じややら、頻しきりに空を仰いでござる。

「唐突だしぬけに笑うから、ははあ、この団子も看板を取違えたのかと思つたんだよ。」

「ええ、ええ、いいえ、お前様、」

とこざつぱりした前かけの膝ひざを拍たたき、近寄つて声を密ひそめ、

「これは、もし気がいでござりますよ。はい、」

と云つて、独りで媪うばは頷うなずいた。問わせたまわば、その仔細しさいの儀は承知の趣。

三

小次郎法師は、掛茶屋かけぢやの庇ひさしから、天そらへ蝙蝠こうもりを吹出しそうに

仰向あおむいた、和郎わろの面つらを斜ななめに見遣やつて、

「そう、氣違あいかい。私はまた唾おとしでもあろうかと思つた、立派な若い人が氣の毒な。」

「お前様ね、一ツは心柄でござりますよ。」

媪うばは、罪むくしと報を、且つ悟り且つあきらめたようなものいい。

「何か憑つきもの物でもしたというのか、暮し向きの屈託くつたくとでもいう事か。」

と言い懸かけて、渋茶にまた舌打しながら、円い茶の子を口くちの端へ持つて行くと、さあらぬ方かたを見ていながら天眼通でもある事か、逸いちはや疾はやくぎろりと見附けて、

「やあ、石を嚙かじりやあがる。」

小次郎再び化転けてんして、

「あんな事を云うよ、お婆さん。」

「悪い餓鬼じや。嘉吉かきちや、主あぬし、もうあつちへ行ゆかつしやいよ。」

その本体はかえつて差措さしおき、砂地に這はつた、朦朧もうろうとした影に向つて、窘たしなめるように言つた。

潮は光るが、空は折から薄曇りである。

法師もこれあるがために暗いような、和郎の影法師を伏目に見
て、

「一ツ分けてやりましょうかね。団子が欲しいのかも知れん、それだと思いが可恐おそろしい。ほんとうに石にでもなると大変。」

「食気くいけの狂人きちがいではござりませんに、御無用になさりました。」

石じや、と申しましたのは、これでもいくらか、不断の事を、
 覚えていると見えまして、私わしがいつでもお客様に差上げますのを
 知つておりまして、今のように云うたのでござりましょ。

また埴ねぼつち土の団子じや、とおっしゃつてはなりません。このお
 前様。」

と、法師の脱いで立てかけた、檜ひのきがさ笠を両手に据えて、荷物
 の上へ直すついでに、目で教えたる葭よしず簀すいの外。

さつくと削つた荒あらづくり造の仁王尊が、引ひつく組くみむ状さまの巖いわ続つき、海を
 踏つんで突つ立つ間に、倒さかさに生なえかかつた竹たけ藪やぶを、一ひと叢むら隔へてて、同
 じ巖いわの六枚屏風びようぶ、月には蒼あおき梯おもかげだ立たとう——ちらほらと松も
 見えて、いろいろの浪を緘おどした、鎧よろいの袖そでを※に翳かざす。

「あれを貴下あなた、お通りがかりに、御覧ごらんじはなさりませんか。」

と背うしろむ向むきになつて小腰ここしを屈かがめ、姥うばは七輪しちりんの炭すすをがさがさと火ひ箸ばしで直ただすと、薬缶やかんの尻しりが合点あつちんで、ちやんと据たわる。

「どの道貴下あなたには御用ごようはござりますまいなれど、大崩壊おおくずれの突とつば端しと睨にらみ合いに、出張しゅちやうつておりますあの巖いわを、」

と立直たつて指さをさしたが、片手ひとては据たえ腰こしを、えいさ、と抱かきつ
つ、

「あれ、あれでござります。」

波なみが寄よせて、あたかも風鈴ふうりんが碎くだけた形かたちに、ばらばらとその巖いわ端なに打うちかかる。

「あの、岩いわ一枚まい、子産石こうみいしと申まをしまして、小こさなのは細螺きしやご、碁ご

石いしぐらい、頃おそなえあいの御供餅ほどのからのから、大きなのになりますと、一人では持切れませぬようなのまで、こつとり円い、ちつと、平ひ扁味らたみのあります石が、どこからとなくころころと産れますでございます。

その平扁味な処が、恰かつこう好よく乗りますから、二つかさねて、お持仏なり、神棚へなり、お祭りになりますと、子の無い方が、いや、もう、年子にお出来なさりますと、申しますので。

随分お望みなさる方が多うございますが、当節では、人がせせこましくなりました。お前様、蓆むしろど戸おきの圧えにも持って参れば、二人がかりで、沢庵石になに荷なつて帰りますのさえござりますに因つて、今が今と申して、早急には見当りませぬ。

随分と御遠方、わざわざ拾いにござらして、力を落す方がござりますので、こうやって近間に店を出しておりますから、朝晩しおどき時を見ては拾っておきまして、お客様には、お土産かたがた、毎度ば婆々ばが御愛嬌ごあいきように進こぜるものでござりますから、つい人様が御存じで、葉山あたりから遊びにござります、書生さんなどは、（婆さん、子は要らんが、女親を一つ寄越よこせ。）
なんて、おからかいなされます。

それを見い見い知しっていて、この嘉吉きちがいの狂人が、いかな事、私わしがあげましたものを召食めしあがろうとするのを見て、石じゃ、と云うのでござりますよ。」

四

「それではお婆さん楽隠居だ。孫子がさぞ大勢あんなさろうね。」
 と小次郎法師は、話を聞き聞き、子産石の方を覗きたれば、面白や浪の、云うことも上の空。

トお茶注しまししようと出しかけた、塗盆を膝に伏せて、ふと黙つて、姥は寂しそうに傾いたが、

「何のお前様、この年になりますまで、孫子の影も見はしませぬ。爺殿と二人きりで、雨のさみしさ、行燈の薄寒さに、心細う、果敢ないにつけてまして、小児衆を欲しがるお方の、お心を察しますで、のう、子産石も一つ一つ、信心して進じます。」

長い月日の事でござりますから、里の人達は私等わしらが事を、人に子だねを進ぜるで、二人が実を持たぬのじゃ、と云いますがの、今ではそれさえ本望で、せめてもの心ゆかしでござりますよ。」

とかごとがましい口ぶりだったが、柔和な顔ひそに響ひそみも見えず、温順にっこりに莞爾ごしんぞさまして、

「御新造様ごしんぞさまがおりなさりますれば、御坊様ごぼうさまにも一かさね、子産石を進ぜましょうに……」

「とんでもない。この団子でも石になれば、それで村方かんげ勸化かんげでもしようけれど、あいにく三界に家なしです。」

しかし今聞いたようでは、さぞお前さんがたは寂さみしかろうね。」

「はい、はい、いえ、御坊様の前で申しましては、お追ついで従しゅうの

ようでござりますが、仏様は御方便、難ありがた有いことでござります。こうやって愛想あいそつげ気もない婆ばば々とこが許とこでも、お休み下さりますお人たちに、お茶のお給仕をしておりますれば、何やかや賑にぎやかで、世間話で、ついうかうかと日を暮しますでござります。

ああ、もしもし、」

と街道へ、

「休まつしやりました。」と呼びかけた。

車輪お、おきのごとき大おききの、紅白段だんだら々の夏かわけこの蝶、河床かわどこは草かにかくれて、清水のあとの土に輝く、山際に翼を廻すは、白の脚絆きやはん、草鞋わらじ穿ばき、かすりの単衣ひとえのまくり手に、その看板の洋傘こうもりを、手て拭ぬぐい持つ手に差さしかざ翳ざした、三十みそぢばかりの女房で。

あんぺら帽子を阿弥陀かぶり、縞の襯衣の大膚脱、赤い団扇を帯にさして、手甲、甲掛、掛、厳重に、荷をかついで続くは亭主。店から呼んだ姥の声に、女房がちよつと会釈する時、束髪たばねがみの鬢が戦いで、前を急ぐか、そのまま通る。

前帯をしゃんとした細腰を、廂にぶらさがるようにして、綻びた脇の下から、狂人の嘉吉は、きよろりと一目。

ふらふらと葭簀を離れて、早や六七間行過ぎた、女房のあとを、すたすたと跣足の砂路。

ほこりを黄色に、ぼつと立てて、擦寄つて、附着いたが、女房のその洋傘から伸かかつて見越入道。

「イヒヒ、イヒヒヒ、」

「これ、悪戯いたずらをするでないよ。」

と姥つまだが爪立つまたつて窘たしなめたのと、笑声が、ほとんど一所に小次郎法

師の耳に入った。

あたかもその時、亭主驚いたか高調子に、

「傘こうもりや洋傘こうもりの繕かえい！——洋傘張こうもりがはりかえ替か繕かい直なし……」

蟬せみの鳴なく音ねを貫ぬいて、誰も通とらぬ四辺あたりに響ひびいた。

隙すかさず、この不気味な和郎を、女房から押隔おしへてて、荷まんなかを真中まんなか

へ振込ふりこむと、流眊しりめに一睨にらみ、直なぐ、急いそぎあし足あしになるあとから、和

郎は、のそのそ——大おおな影かげを引ひいて続つく。

「御覧ごらんじまし、あの通り困こつたものでござります。」

法師も言葉なく見送みおくるうち、沖おきから来るか、途絶とつたえては、ずし

りと崖を打つ音が、松風と行違いに、向うの山に三度ばかり浪の調べを通わすほどに、紅白段だんだら々の洋傘は、小さく鞠まりのようになつて、人の頭かしらが入交いれまぜに、空へ突きながら行くかと思えて、一ひと条道とすじみちのそこまでは一軒の苦屋とまやもない、彼方かなた大崩壊の腰を、点ぼつぽ々つ。

五

「あれ、あの**大崩壊**おおくずれの崖の前途むこうへ、皆が見えなくなりました。ちようど、あれを出しました、下の浜でござります。唯ただいま今の狂き人が、酒に酔つて打倒ぶつたおれておりましたのは……はい、あれは

嘉吉と申しまして、私等秋谷在の、いけずな野郎でござりましたの。

その飲んだくれます事、怠ける工合、まともな人間から見ますれば、真ほんに正氣せいぎの沙汰さたではござりませなんだが、それでもどうやら人並に、正月はめでたがり、盆は忙しがりまして、別に気が触れた奴やつではござりません。いつでも村の御祭礼おまつりのように、遊ぶが病氣やまいでござりましたが、この春頃に、何と発心をしましたか、自分が望みで、三浦三崎のさる酒問屋さかどいへ、奉公をしたでござります。

つい夏の取と着つきに、御主人のいいつけで、清すみ酒ざけをの、お前様、沢山たんでもござりませぬ。三樽みたるばかり船に積んで、船頭殿が一人、

嘉吉めが上乗り^{うわの}で、この葉山の小売店^{みせ}へ卸しに来たでござります。葉山森戸などへ三崎の方から帰ります、この辺のお百姓や、漁師たち、顔を知ったものが、途中から、乗^のけてくらつせえ、明いてる船じゃ、と渡場^{わたしば}でも船つきでもござりませぬ。海岸の岩の上や、磯^{いそ}の松の根方から、おおいおおい、と板東声^{ばんどうごえ}で呼ばり立つて、とうとう五人がとこ押込みましたは、以上七人になりました、よの。

どれもこれも、碌^{ろく}でなしが、得手に帆じゃ。船は走る、口は辻^{すべ}る、凧^{なぎ}はよし、大話しをし草臥^{くたぶ}れ、嘉吉めは胴^まの横木を枕に、踏^{ふんぞり}返^{かえ}つて、ぐうぐう高^{たかい} 軒^{びき}になつたげにござります。

路^{なだ}に灘^{なだ}はござりませぬが、樽の香が芬^{ぶん} 々^{ぶん}して、鮓^{たこ}も浮きそう

な風の好き。せめて船にでも酔いたい、と一人が串戯じょうだんに言い出しますと、何と一樽賭けかまいか、飲むことは銘々が勝手次第、勝負の上から代銭を払えば可いい、面白い、遣やるべいじや。

煙管きせるの吸口でも結構に樽へ穴を開ける徒てあが、大びらに呑口切つて、お前様、お船頭、弁当箱の空あきはなしか、といびつ形なりの切溜めを、大海でざぶりとゆすいで、その皮づつみに、せせり残しの、醤油かすを指のさきで嘗なめながら、まわしのみの煽あおつきり。天下晴れて、財布の紐ひもを外すやら、胴巻を解くやらして、賭なぐさ博みをはじめますと、お船頭が黙つてはおりませぬ。」

「叱言こごとを云つて留めましたか。さすがは船頭、字で書いても船の頭かしらだね。」

と真顔で法師の言うのを聞いて、姥うばは、いかさまな、その年としわ少かで、出家でもしそうな人、とさも憐あわれんだ趣で、

「まあ、お人の好いい。なるほど船頭を字に書けば、船の頭でござりましょ。そりやもう船の頭だけに、極きまり処はちやんと極つて、間違いのない事をいたしました。」

「どうしたかね。」

「五人徒であいさいが賽さいの目に並んでおります、真まん中なかへ割込んで、まず帆を下ろしたのでござります。」

と莞爾にっこりして顔を見る。

いささかもその意を得ないで、

「なぜだろうかね。」

「この追手じや、帆があつては、丁と云う間に葉山へ着く。ふわふわと海月泳ぎに、船を浮かせながらゆつくり遣るべい。

その事よ。四海波静かにて、波も動かぬ時津風、枝を鳴らさぬ御代なれや、と勿体ない、祝言の小謡を、聞囀りに謳う下から、勝負！とそれ、銭の取遣り。板子の下が地獄なら、上も修羅道でござります。」

「船頭も同類かい、何の事じや、」

と法師は新になみなみとある茶碗を大切そうに両手で持つて、苦笑いをするのであつた。

「それはお前様、あの徒と申しますものは、……まあ、海へ出て岸をばして御覧じまし。巖の窪みはどこもかしこも、賭博の壺

に、あわびの蓋ふた。蟹かにの穴でない処は、皆意あないち錢ちのあとでござります。珍めづしい事も、不思議な事もないけれど、その時のは、はい、嘉吉けいきちに取とつては、あやかしが着きましたじや。のう、便船びんせんしよう、便船びんせんしよう、と船ふねを渚なぎさへ引寄ひきよせては、巖いわ端ばなから、松まつの下したから、ひらりひらり翻ひら然り々々と乗のりましたのは、魔まがさしたのでござりましたよ。」

六

「魅ま入いられたようになりまして、ぐっすり寝ね込みました嘉吉けいきちの奴やつ。浪なみの音ねは耳みみ馴なれても、磯いそ近ぢかへ舳へさきが廻まつて、松まつの風かぜに揺ゆり起たされ、肌はだ寒さむうなつて目を覚さましますと、そのお前まへ様さま……体てい裁ざい。

山へ上あがつたというではなし、たかだか船の中の車座、そんな事は平気な野郎も、酒樽さんばそうの三番叟、とうとうたたりたりには肝つぶを潰つぶして、（やい、此奴等こいつら、）とはずみに引傾ひっかたがります船底へ、仁王立に踏ふみごたえて、喚わめいたそうにござります。

騒ぐな。

騒ぐまいてや、やい、嘉吉、こう見た処で、二歩ふと一両、貴様に貸かしのない顔はないけれど、主人のものじゃ。引負ひきおいをさせてまで、勘定を合あわしようなんど因業いんごうな事は言わぬ。場錢を集めて一樽買いつたら言分あるまい。代物さえ持つて帰れば、どこへ売うつても仔細しさいはない。

なるほど言われればその通り、言訳の出来ぬことはござりませ

ぬわ、のう。

錢さえ払えば可いとして、船頭やい、船はどうする、と嘉吉が云いますと、ばら錢を掴にぎつた拳こぶしを向むかうう願は卷ちまきの上さ突出して、半だ半だ、何、船だ。船だ船だ、と夢中でおります。

嘉吉が、そこで、はい、櫓ろを握とつて、ぎつちらこ。幽霊船の歩ぶに取られたような顔つきで、漕こぎ出したげでござりますが、酒においの匂においに我慢が出来ず……

ごほんじょう御繁昌だんなの旦那だんなから、一杯おみきを遣やわされ、と咽のど喉どをごくごくさして、口を開けるで、さあ、飲のまつせえ、と注つぎにかかると幾いく干くらか差引くか、と念を推したげで、のう、ここらは確たしかでござりました。

幡随院長兵衛じゃ、酒を振舞うて銭を取るか。しみつたれたことを云うな、と勝った奴がいきります。

お手渡てわたしで下される儀は、皆の衆も御面倒、これへ、と云うて、あか柄杓びしゃくを突出いて、どうどうと受けました。あの大面おおづらが、お前様、片手で櫓を、はい、押しながら、その馬柄杓まびしゃくのようなもので、片手で、ぐいぐいと煽あおつたげな。

酒は一樽打抜ぶちぬいたで、ちつとも惜気おしげはござりませぬ。海からでも湧出すように、大気になって、もう一つやらつせえ、丁だ、それ、心祝いに飲ますべい、代は要らぬ。

帰命頂礼きみやうちょうらい、賽さいころ明神の兀天窓はげあたま、光る光る、と追つ従し云うて、あか柄杓へまた一杯、煽るほどに飲むほどに、櫓拍子ろびょうし

が乱になつて、船はぐらぐら大揺れ小揺れじや、こりやならぬ、
賽すわが据すわらぬ。

ええ、気に入らずば代つて漕こげさ、と滅多押しに、それでも、
大崩壊おおくずれの鼻を廻つて、出島の中へ漕こぎ入れたでござります。

さあ、内海うちうみの青畳、座敷へ入つたも同じじや、と心が緩むと、

嘉吉奴めが、酒代を渡してくれ、勝負が済むまで内金を受取ろう、
と櫓を離した手に銭おあしを握ると、懐へでも入れることか、片手に、
あか柄杓びしやくを持ったなりで、チヨボ一の中へ飛込みました。

はて、河童野郎かっぱ、身投みなげするより始末の悪さ。こうなつては、お
前様、もう浮ぶ瀬はござりませぬ。

取られて取られて、とうとう、のう、御主人へ持つて行くゆ、一

樽のお代を無みなにしました。処ところで、自棄やけじや、賽さいの目が十とおに見えて、わいらの頭あたまが五十ある、浜はまがぐるぐる廻まわるわ廻まわるわ。さあ漕こがば漕こげ、殺ころさば殺ころせ、とまたふんぞつた時分ときばんには、ものの一斗ひとぐらい嘉吉かきち一人で飲のんだである。七人のあたまさえ四斗よっぴ樽づ、これがあらかた片かた附ついて、浜はまへ樽づを上げた時とき、重おもいつもりで両手りょうてをかけて、えい、と腰こしを切きつた拍子はし抜けに、向むかうへのめつて、樽づが、ばつちやん、嘉吉かきちがころり、どんどのめりましたきり、早はやや死しんだも同おな然じ。

船ふねはそれまで、ぐるりぐるりと長者園ちやうじんの浦うらを廻まわつて、ちようどあの、活動写真かつどうしやの難船なんふね見たよう、波風なかぜの音ねもせずせに漂たうてしましたげな。両りょう膚はだ脱だぬぎの胸毛むねげや、大胡坐おおあぐらの脛すねの毛げへ、夕風ゆふかぜが颯さつと

かかつて、悚然ぞつとして、皆みんなが少し正気まごころづくくと、一ツ星も見えま
 する。大巖おおいわの崖が薄黒く、目の前へ蔽被おつかぶさつて、物凄ものすごうもな
 りましたので、禪ふんとしを緊め直すやら、膝小僧ひざっこぞうを合わせるやら、お
 船頭ふねがしらが、ほういほうい、と鳥のような懸声けんせいで、浜へ船をつけまし
 て、正体まごころのない嘉吉たかきちを撲なぐる。と、むっくり起きたが、その酒樽さけづ
 の軽いのに、本性たが違ちがわず気落きおちがして、右の、倒れたものでござり
 ますよ。はい。」

七

「あおのけざま仰向あおむか様に、火のような息を吹いて、からだ身体からしみだ染出しみだします、酒

が砂へ露を打つ。晩方の涼しきにも、蚊や蠅が寄つて来る。

奴は、^{やつこ}打つても、叩いても、^{おき}起るものではござりませぬがの。

かかり合は^{あい}免れぬ、と小力^{こぢから}のある男が、力を貸して、船頭まじりに、この徒^{てあい}とて確^{たしか}ではござりませなんだ。ひよろひよろしながら、あとのまず二樽^{たる}は、荷^{にな}つて小売店^{みせ}へ届けました。

嘉吉の始末でござります。それなり船の荷物にして、積んで帰れば片附きますが、死骸^{しがい}ではない、酔つたもの、醒^さめた時の挨拶が厄介^{にげ}じゃ、とお船頭は遁^{にげ}を打つて、帆を掛けて、海の靄^{もや}へと隠れました。

どの道訳を立ていでは、主人方へ帰られる身体ではござりませぬで、一まず、秋谷の親^{おやもと}許へ届ける相談にかかりましたが、ま

たこのお荷物が、御覧の通りの大男。それに、はい、のめったきり、捏てこでも動かぬに困こうじ果はてて、すっぱすっぱ煙草たばこを吹かすやら、お前様くしゃみ、嚏くしゃみをするやら、向脛むかはぎへ集たかる蚊かかとを踵もみころで揉殺もみころすやら、泥おおよめに酔おおよめった大鮫おおよめのような嘉吉を、浪打際に押取おつとり巻まいて、小田原ひょうじょう評定ひょうじょう。持ひて余ひしておりました処へ、ちようど荷車を曳ひきまし

て、藤沢から一日路みち、この街道つづきの長者園の土手へ通りかか

りましたのが……」

茜あかねいろ色の顛はちまき巻まきを、白髪しらが天窓あたまにちよきり結むすび。結むすび目の押立おつた

つて、威勢いせいの可いいのが、弁慶蟹かにかにの、濡色はきみあかき鋏はさみに似たのに、ま

たその左の腕片かたかた々々、へし曲まつて脇腹わきばらへ、ぱツと開あけ、ぐいと握にぎ

る、指てのひらと掌てのひらは動うごくけれども、肱ひじは附くっ着ついてちつとも伸のびず。銅あかがねで

鑄たような。……その仔細しさいを尋ねれば、心がらとは言いながら、
 去る年さんぬ、一膳飯屋ぜんでぐでんになり、冥途めいどの宵を照らしますじや、
 と碌ろくでもない秀句を吐いて、井桁いげたの中に横木瓜もっこう、田舎の暗夜やみに
 は通りものの提灯ちようちんを借りたので、蠟燭道かきがらみちを照らしながら、
 安政の地震に出来た、古い処を、鼻唄で、地つちが崩れそうなのひよ
 ろひよろ歩行あゐるき。好いい心持に眠気がさすと、邪魔あかりな灯を肱ひじにかけて、
 腕かぎなりを鍵形かぎなりに両手を組み、ハテ怪しやな、汝おのれ、人魂ひとだまか、金精かねだま
 か、正体を顕あらわせろ！ とトロンコの据眼すえまなこで、提灯を下目に睨にら
 む、とぐたりとなつた、並木の下。地虫のような軒いびきを立てつつ、
 大崩壊に差懸さしかかると、海が變つて、太平洋を煽あおる風かぜに、提灯ろうとうの蠟ろう
 が倒れて、めらめらと燃えついた。沖の漁火いさりびを袖そでに呼んで、胸

毛がじりじりに仰天し、やあ、コン畜生、火の車め、まだ疾え、
 と鬼と組んだ横倒れ、ころがりまわ 転廻もみけつて揉消して、生命いのちに別条はなかつた。が、その時の大火傷おおやけど、享年六十有七歳にして、生まれもつかぬ不具かたわもの——渾名あだなを、てんぼう蟹かにの宰さい八はちと云う、秋谷在の名物親仁おやし。

「……私が爺殿わしじじいでござります。」

と姥うばは云つて、微笑ほほえんだ。

小次郎法師は、寿ことぶくごとく、一揖いちゆうして、

「成程じやう、尉殿じやうだね。」と祝儀する。

「いえ、もう気ままものの碌でなしでござりますが、お庇かげさまで、至つて元気がようござりますので、御懇意な近所へは、進退かけひきが

厭いやじゃ、とう、葉山を越して、日影から、田越たごえ逗子ずしの方へ、遠くまで、てんぼうの肩かたに背負しよ籠かごして、榮螺さざえや、とこぶし、もろ鱈あじの開き、うるめ鰯いわしの目刺めしなど持ちましては、飲代のみしろにいたしますが、その時はお前様、村のもとの庄屋様、代々長者の鶴谷つるや喜十郎様、」

と丁寧ていねいに名のりを上げて、

「これが私わしども、お主筋しゆに当りましたの。そのお邸やしきの御用ごようで、東海道の藤沢まで、買物かひものに行つたのでござりました。

一月に一度ぐらいは、種々いろいろ入用のものを、塩やら醤油やら、小さなものは洋燈ランプの心まで、一車ひとくるまずつ調えさつしやります。

横浜は西洋臭し、三崎は品が落着かず、界隈かいわいは間に合わせの

俄仕入れ、しけものが多うござりまするので、どうしても目量のあ
 る、ずツしりしたお堅いものは、昔からの藤沢に限りますので、
 おねだんも安し、徳用向きゆえ、御大家の買物はまた別で、」
 と姥は糸を操るような話しぶり。心のどかに口をまわして、自
 分もまたお茶参った。

しばらく往来もなかつたのである。

八

「……おう、宰八か。お爺、在所へ帰るだら、これさ一個、産
 神様へ届けてくんな。ちようどはい、その荷車は幸だ、と言わ
 なさま

つしやる。

見ると、お前様、嘉吉めが、今申したその体でござりましよ。

おんな

同じ産神様うじこな氏子な夥間じや。承知なれど、私はこれ、手がこの通

り、思うように荷が着けられぬ。御身おみたちあんばいよう直さつし

やい、荷の上へ載のせべい、と爺じいどのが云いますとの。

あに

何あにお爺じい、そのまま上へ積まつしやい、と早や二人して、嘉吉

めが天窓あたまと足を、引立てるではござりませぬか。

爺どのが、待たつしやい、鶴谷様のお使いで、綿を大いかいこと買

うて来たが、醤油樽や石油缶の下積になつては悪かんべいと、上

荷に積んであるもんだ。喜十郎旦那とこしが許とこで、ふつくりと入れさつ

しやる綿の初穂へ、その酒浸しの怪物ばけものさ、押おっころばしては相成

んねえ、柔々積方も直さつしやい、と利かぬ手の拳を握つて、
 一力味力みましけ。

七面倒な、こうすべい、と荒稼ぎの気短徒じゃ。お前様、
 上かがりの縄の先を、嘉吉が胴中へ結へ附けて、車の輪に障ら
 ぬまでに、横づけに縛りました。

賃銭の外じゃ、落しても大事な。さらば急いで帰らつしやれ。
 しやんしやんと手を拍いて、賭博に勝つたものも、負けたものも、
 飲んだ酒と差引いて、誰も損はござりませぬ。可い機嫌のそそり
 節、尻まで捲つた脛の向く方へ、そろそろと散つたげにござりま
 す。

爺どのは、どっこいしよ、と横木に肩を入れ直いて、てんぼう

の片手押しは、胸が力でござります。人通りが少いで、露にひろがりました浜昼顔の、ちらちらと咲いた上を、ぐいと曳出ひきして、それから、がたがた。

おおくずれ

大崩 まで葉山からは、だらだらの爪先つまさき上り。後はなぞえに下り道。車がはずんで、ごろごろと、私わしがこの茶店の前まで参った時じゃ、と……申します。

やい、枕をくれ、枕をくれ、と嘉吉わめめが喚わめくげな。

何吐ぬかすぞい、この野郎、贅ぜいたく沢たくべいこくなてえ、狐きつね店みせの白

ツ首と間違えてけつかるそうな、とぶつぶつ口叱くちごごと言を申しましての、爺どのが振向きもせず、ぐんぐん曳ひいたと思わつしやりまし。」

「何か、夢でも見たらうかね。」

「夢どころではござりますか、お前様、直ぐに縊殺しめされそうな声を出して、苦しい、苦しい、鼻血が出るわ、目がまうわ、天窓あたまを上へ上げてくれ。やい、どうするだ、さあ、殺さば殺せ、漕こがば漕こげ、とまだ夢中で、嘉吉めは船に居る気でおります、よの。

胴中の縄が弛ゆるんで、天窓が地つちへ擦れ擦れに、倒さかさまになつております。すそうな。こりやもつともじや、のう、たつての苦くるしみ惱なやみ。

酒が上のぼつて、醒さめずにいたりや本望だんべい、俺わしら手が利かねえだに、もうちつとだ辛抱せろ、とぐらぐらと揺り出しますと、死ぬる、死ぬる、助け船引と火を吹きそうに喚わめいた、とのう。

この中ではござりませぬ、」

と姥は葭簀よしすの外を見て、

「廂ひさしの蔭じやつたげにござります。浪が届きませぬばかり。低い三日月様を、漆うるし見たような高い鬚まげからはずさつせえまして、真まっし白しろなのを顔に当てて、団扇うちわが衣服きものを掛けたげな、影の涼しい、姿の長い、裾すその薄蒼あおい、悚然ぞっとするほど美しらしいお人が一方。すらすら道端へ出さつせての、

(……………)

爺おやどのを呼留めて、これは罪人か——と問わしつけえよ。

食くいもの物ものも代しろもの物ものも、新しい買物じゃ。縁起でもない事の。罪人を上積みにしてどうしべい、これこれでござる。と云うと、可哀相に苦しきろう、と団扇を取って、薄い羽のように、一文字に、

横に口へ啣くわえさしつた。

その時は、爺せなどのの方なかへ背を向けて、顔をこう斜はつかいに、「
と法師から打うち背そむく、と佛おものその薄月かげの、婦人おんなの風情ふうせいを思遣おもい
ればか、葦簣よしずをはずれた日のかげりに、姥うなの頸なが白しろかつた。

荷物の方へ、するすると膝を寄せて、

「そこで？」

「はい、両手を下げて、白いその両方てのひらの掌てのひらを合わせて、がつくり
となった嘉吉の首を、四五本目の輻やほの辺あたりで、上へ支させて持たつせ
えた。おもみが掛かつたか、姿を絞しぼつて、肩ほが細ほりしましたげなよ
。」

九

「介抱しよう、お下ろしな、と言わっしやる。」

その位な荒療治で、寝汗一つ取れる奴か。打棄うっちゃっておかつせえ。面倒臭い、と顛はちまき巻しめた頭を掉ふつて云うたれば、どこまで行く、と聞かしつけえ。

途中さまさまの隙ひまぎえで、爺じいどのもむかつぱらじや、秋谷鎮座の明神様、俺等わしらが産神うぶすなへ届け物だ、とずツきり饒舌しゃべると、

(受取りましょう、ここで可いいから。)

(お前様は?)

(ああ、明神様の侍女こしもとよ。)と言わっしやつた。

月に浪が懸りますように、さらさらと、風が吹きますと、揺れながらこの葦簣の蔭が、格子縞のように御袖へ映つて、雪の膚まで透通つて、四辺には影もない。中空を見ますれば、白鷺の飛ぶような雲が見えて、ざつと一浪打ちました。

爺どのは悚然として、はい、はい、と柔順になつて、繩を解くと、ずりこけての、嘉吉のあの図体が、どたりと荷車から。貴女は擡げた手を下へ、地の上へ着けるように、嘉吉の頭を下ろさつせえた。

足をばたばたの、手によいよい、輻も蹴はずしそうに悶きますわの。

(ああ、お前はもう可いから。) 邪魔もののおつしやつた

で、爺どのは心外じゃ……

何の、心外がらずとももの、いけずな親仁でござりますがの、ほほ、ほほ。」

「いや、いや、私が聞いたただけでも、何か、こうわざと邪慳に取扱ったようで、対手がその酔漢を労るといふだけに、黙つてはおられません。何だか寢覚が悪いようだね。」

「ええ、串戯にも、氏神様の知己じゃと言わつしやりましたけに、嘉吉を荷車に縛りましたのは、明神様の同一孫児を、

継子扱いにしましたようで、貴女へも聞えが悪うござりまするので。

綿の上積一件から荷に奴を縛つたは、爺どのが自分したことではない事を、言訳がましく饒舌りますと、（可いから、お前は

あつちへ、）と、こうじやとの。

（可かあねえだ。もの、理合を言わねえ事にや、ハイ気が済みましねえ。お前様も明神様お知己なら聞かつしやい。老耆の手ぼう爺に、若いものの酔漢の介抱が何、出来べい。神様も分らねえ、こんな、くだま野郎を勞つてやらつしやる御慈悲い深いおぼしめし
思 召で、何でこれ、私等婆様の中に、小児一人授けちやくれさつしやらぬ。それも可い、無い子だねなら断念めべいが、提
ちん 灯で火傷をするのを、何で、黙つて見てござつた。私が手ぼうでせえなくば、おなじ車に結えるちゆうて、こう、けんどんに、倒にや縛らねえだ。初対面のお前様見さつしやる目に、えら俺が
さかしま 非道なようで、寢覚が悪い、）と 願巻を掉立てますと、のう。

（早く、お帰り、）と、継穂がないわの。

（いんにや、理を言わねえじゃ、）とまだ早や一概に捏ねようとし
 しましたら……

（おいでよ、）と、お前様ね。

団扇うちわで顔を隠さしつたなり。背後うしろへ雪のような手を伸のばして、荷
 車くるまごと爺じいどのを、推遣おしやるようにさつせえた。お手の指が白々と、
 こう輻やぼねの上で、糸車いとくるまに、はい、綿屑わたがしがかかつたげに、月の光で動
 いたらばの、ぐるぐるぐると輪わが廻まわつて、爺じいどのの背せなかへ、荷車くるまが、
 乗被のつかぶさるではござりませぬか。」

「おおお、」

と、法師は目を睜みはつて固唾かたずを呑む。

「吃驚びっくり亀の子、空へ何と、爺どのは手を泳がせて、自分の曳ひいた荷車に、がらがら背後うしろから押出されて、わい、というたぎり、一呼吸ひといきに村の取着とつき、あれから、この街道が鍋なべづる形なりに曲ります、明神様、森の石段まで、ひとりでに駆出しましたげな。

もつとも見さつしやります通り、道はなぞえに、向むこうへ低くはなりますが、下り坂と云う程ではなし、その疾はやいこと。一なだれにすべ込こったようで、やつと石段の下で、うむ、とこたえて踏留ふしどまりますと、はずみのついた車めは、がたがたと石ころの上を空廻りして、躍はねつたげにござります。

見上げる空の森は暗し、爺どのは、身震みぶいをしたと申しますがの。

十

「利かぬ氣の親仁おやじじゃ、お前様、月夜の遠見に、纏まとつたものの形は、葦簣張よしずばりの柱の根をおさえて置きます、お前様の背後うしろの、その石いしころ碗わしか、私が立掛けて置いて帰ります、この床しょうぎ几ぎの影ばかり。大崩壊おおくずれまで見通しになつて、貴女あなたの姿は、蜘蛛巢くものすほども見えませぬ。それをの、透かし透かし、山際に附くっ着いて、薄墨引いた草の上を、登あしおと音を盗んで引返ひっかえしましたげな。

嘉吉をどう始末さつしやるか、それを見届けよう、という、爺じじいどの了りようけん簡かんでござります。

荷車はの、明神様石段の前を行けば、御存じの三崎街道、横へ切れる畦道あぜみちが在所の入口でござりますで、そこへ引込んだものでござります。人気も穏おだやかなり、積んだものを見たばかりで、鶴谷様御用、と札の建つたも同一おなじじやで、誰も手の障さえ人はてござりませぬで。

爺どのは、這はうようにして、身体からだを隠して引返したと言いましけ。よう姿が隠さりよう、光つた天窓あたまと、顛はちまき巻あかねいろの茜あかねいろ色が月夜に消えるか。主ぬしやそこで早や、貴女あなたの術で、活いきながら缺はさみの紅あかい月影の蟹かにになった、とあとで村の衆にひやかされて、ええ、措おけやい、気味の悪い、と目をぱちくり、泡を吹いたでござりますよ。

笑うてやらつしやりませ。いけ年を仕つかまつつて、貴女が、去いね、とおつしやつたを止よせば可よいことでござります。」「

法師はかくと聞いて眉を擡ひそめ、

「笑い事ではない。何かお爺じいさん様に異状でもありましたか。」「

「お目こぼしでござります、」

と姥は謹かおつきんだ、顔色して、

「爺どのはお庇かけと何事もござりませんで、今日も鶴谷様の野良へ手伝いに参っております。」「

「じゃ、その嘉吉と云うのばかりが、変な目に逢つたんだね。」「

「それも心からでござります。はじめはお前あなた様、貴女が御親切に、勿体ない……お手ずから薫かおりの高い、水晶を嚙かみますような、涼し

いお薬を下さつて、水ごと残しておきました、……この手桶おけから、
「……」

と姥は見返る。捧げた心か、葦よしず簣すに挟んで、常夏とこなつの花のある
が下もとに、日影涼しい手桶が一個、輪ひとつの上に、——大方その時以来
であろう——注連しめを張つたが、まだ新しい。

「水も汲くんで、くくめておやり遊あそばした。嘉吉の我に返つた処で、
心得違ちがいをしたために、主人の許とこへ帰かえれずば、これを代しろに言い訳わけ
して、と結構な御宝を。……」

それがお前様、真まみどり緑りの、光のある、美しい、珠じやつたげに
ございます。

爺おやどのが、潜り込んだ草の中から、その蟹の目を密そつと出して、

見た時じやつたと申します。

こう、貴女がお持ちなさりました指の尖へ、ほんのりと蒼く映つて、白いお手の透いた処は、大な螢をお撮みなさりましたようじやげな。

貴女のお身体からだに附属ついてこそじやが、やがて、はい、その光は、嘉吉が賽さいころを振る掌てのひらの中へ、消えましたとの。

それから、抜かつしやりましたものらしい、少し俯うつむ向いて、え、やつぱり、顔へは団扇を当てたまんまで、お髪ぐしの黒い、前方へ、軽く簪かんざしをお挿さしなされて、お草履せつたか、雪駄せつたかの、それなりに、はい、すらすらと、月と一所ぞっに女浪めなみのように歩ある行るかつしやる。

これでまた爺どのは悚然ぞっとしたげな。のう、いかな事でも、明

神様の知己ちかづきじや言わしつたは串戯じょうだんで、大方は、葉山あたりの誰方どなたのか御別荘から、お忍びの方と思わしつけがの。

今行ゆかつしやるのは反対あべこべに秋谷の方じや。……はてな、と思
うと、変つた事は、そればかりではござりませぬよ。

嘉吉の奴やつがの、あろう事か、慈悲を垂れりや、何とやら。珠は
掴つかむ、酒の上じや、はじめはただ、御恩返しじやの、お名前を聞
きたいの、ただ一目お顔の、とこだわりました。柳に受けて歩行ある
かつしやるで、機織場はたおりばの姉ねえやが許ところへ、夜さり、畦道あぜみちを通う時
の高声の唄のような、真似もならぬ大口利いて、果はては増長この上
なし、袖を引いて、手を廻うしろして、背後から抱きつきおる。

爺どのは冷汗搔かいたげな。や、それでも召ものの裾すそに、草鞋わらじが

引かかりましたように、するすると嘉吉に抱かれて、前ざまに行ゆかつしやったそうながの、お前様、飛んでもない、」

「怪けしからん事を——またしたもんです。」
と小次郎法師は苦り切る。

十一

姥うばは分別あり顔に、

「一目見たら、その御容ようす子だけでなりと、分りそうなものでござります。」

貴女あなたが神にせよ、また人間にしました処で、嘉吉づれが口を利

かれます御方ではござりませぬ。そうでなくとも、そんな御恩を被つたでござりますもの。拜むにも、後姿でのうては罰の当ります処、悪党なら、お前様、発心のしどころを。

根が悪徒ではござりませぬ、取締りのない、ただぼうと、一夜酒が沸いたような奴殿じゃ。薄も、蘆も、女郎花も、見境はござりませぬ。

髪が長けりや女じゃ、と合点して、さかりのついた犬同然、珠を頂いた御恩なぞも、新屋の姉えに、藪の前で、牡丹餅半分分けでもろうた了簡じゃで、のう、食物も下されば、お情も下さりようぐらいに思うて、こびりついたでござります。

弁天様の御姿にも、蠅がたかれば、お鬱陶しい。

通りがかりにただ見ては、草がくれの路と云うても、早ひでりに枯れた、岩の裂目とより見えませぬが、」

姥は腰を掛けたまま。さて、乗出すほどの距離でもなかつた――

「直じきその、向う手を分け上りますのが、山一ツ秋谷在へ近道でござりまして、馬うま車くるまこそ通いませぬけれども、私わしなどは夜さり店を了しまいますると、お菓子、水菓子、商あきないもの物だけを風呂敷包、ト背負しよいいまして、片手に薬缶やかんを提げたなりで、夕焼にお前様、影をのびのび長々と、曲つた腰も、楽々小屋へ帰りますかの。

貴女はそこへ。……お裾なびが靡いた。

これは不思議、と爺どのが、肩を半分乗出す時じゃ、お姿が波

を離れて、山の腹へすらりと高うなつたと思うと、はて、何を嘉吉がしくさりましたか。

屹きつと振向かつしやりました様子じやつけ、お顔の団扇ひらりが翻ひらつて、斜ななめに浴びせて、嘉吉の横顔へびしりと来たげな。

きやつ！と云うと匆返はねつて、道ならものの小半町、膝かかとと踵かかとで、抜いた腰ひきずを引摺ひきずるように、その癖けしと、怪飛けしとんで遁にげて来る。

爺おやどのは爺おやどので、息を詰めた汗の処へ、今のきやあ！で転てんど倒うして、わっ、と云うて山の根から飛出す処へ、胸むねを頭突ずつきに来るように、ドンと嘉吉が打附ぶつかつたので、両方へ間を置いて、この街道まんなかの真中へ、何と、お前様、見られた図ではござりますか。

二人とも尻餅しりもちじや。

(ど、どうした野郎、)と小腹も立つ、爺どのが恐怖おっかなまぎ紛れに、
 がならつしやると、早や、変でござりましたげな、きよろん、と
 した眼がんの見据えて、私わしが爺の宰八の顔をじろり。

(ば、ば、ば、)

(ええ！)

(怪物ばけもの！)と云うかと思うと、ひよいと立って、またばたばた
 と十足とあしばかり、駆戻つて、うつむけに突んのめつたげにござりま
 して、のう。

爺どのは二度吃驚びっくり、起ちかけた膝がまたがつくりと地面じべたへ崩
 れて、ほっと太い呼吸いきさついた。かつとなつて浪の音も聞えませ
 ぬ。それでいて——寂然しんとして、海ばかり動きます耳に響いて、

秋谷へ近路のその山づたい。鈴虫が音を立てると、露が溢れます
 ような、佳い声で、そして物凄う、
ものすご

(ここはどここの細道じゃ、

細道じゃ。

天神さんの細道じゃ、

細道じゃ。

少し通して下さいませ、下さんせ。)

とあわれに寂しく、貴女の声で聞えました。

その声が遠くなります、山の上を、薄綿で包みますように、雲
 が白くかかりますと、音が先へ、颯あ——とたよらない雨が、海
 の方へ降って来て、お声は山のうらかけて、遠くなっ行ってきます

げな。

前刻さつき見た兔うの毛の雲じや、一雨来ようと思うた癖に、こりや心ない、荷が濡れよう、と爺どのは駆けて戻つて、ガツたり車を曳ひ出きだしながら、村はずれの小店からまず声をかけて、嘉吉めを見せにやります。

何か、その唄のお声が、のう、十年五十年も昔聞いたようにもあれば、こう云う耳にも、響くと云います。

遠慮すると見えまして、余り委くわしい事は申しませぬが、嘉吉はそれから、あの通り気が変になりました。

さあ、界隈かいわいは評判で、小児こどもどもが誰云うとなく、いつの間やら、その唄を……」

十二

(ここはどこの細道じゃ、

細道じゃ。

秋谷邸やしきの細道じゃ、

細道じゃ。

少し通して下さんせ、

下さんせ。

誰方どなたが見えても通しません、

通しません。)

「あの、こう唄うのではござりませんか。

当節は、もう学校で、かあかあ鴉からすが鳴く事の、池の鯉こいが麩ふを食う事の、と間違いのないお前様、ちやんと理の詰んだ歌を教えさつしやるに、それを皆が唄わいで、今申した——

(ここはどここの細道じゃ、

秋谷邸の細道じゃ。)

とあわれな、寂しい、細い声で、口々に、小兒こども同士、顔さえ見れば唄い連れるでござりますが、近頃は久しい間、打絶えて聞いたこともござりませぬ——この唄を爺おやどのがその晩聞かした、という話このかた以来、——誰云うとなく流行はやりますので。

それも、もう元唄は、

(天神様の細道じや、

少し通して下さんせ、

御用のない人通しません、)

確か、こうでござりましょう。それを、

(秋谷邸の細道じや、

誰方が見えても通しません、

通しません。)

とひとりでに唄います、の。まだそればかりではござりません。
小児^{こども}たちが日の暮方、そこらを遊びますのに、厭^{いや}な真似を、まあ、
どうでござりましょう。

てんでんが芋^{ずいぎ}※の葉を振^もぎりまして、目の玉二つ、口一つ、穴

を三つ開けたのを、ぬっぺりと、こう顔へ被かぶつたものでござりま
 す。おおき大いの中から小さいのから、その蒼白あおしろい筋のある、細ら長い、
 狐とも狸とも、姑獲鳥うぶめ、とも異体の知れぬ、中にも虫喰のござり
 ます葉の汚点しみは、癩かったいか、痘痕あぼたの幽霊。面つらを並べて、ひよろひよろ
 と蔭日向かげひなた、藪やぶの前だの、谷戸口やとぐちだの、山の根なんぞを練りなが
 ら今の唄を唄いますのが、三人と、五人ずつ、一組や二組ではご
 ざりませんで。

悪戯いたずらが蒿こうじて、この節では、唐とう黍もろこしの毛の尻尾しっぽを下げたり、
 あけびを口に啣くわえたり、茄子提灯なすびちようちんで闇路やみじを辿たどつて、日が暮れ
 るまでうろつきますわの。

気になるのは小石を合せて、手ん手に四ツ竹を鳴らすように、

カイカイカチカチと拍子を取って、唄が段々身に染みますに、みんな皆が家へ散うち際ちりぎわには、一人がカチカチ石を鳴らして、

(今打つ鐘は、)

と申しますと、

(四ツの鐘じや、)

と一人がカチカチ、五ツ、六ツ、九ツ、八ツと数えまして……

(今打つ鐘は、)

七ツの鐘じや。)

と云うのを合図に、

(そりや魔が魅さすぞ！)

と哄どっとはや囉して、消えるように、残らず居なくなるのでござりま

すが。

何とも厭いやな心持で、うそ寂しい、ちようど盆のお精しよ霊うり様ようさまが絶えずそこらを歩行あるかつしやりますようで、気の滅入めいりますことと云うては、穴倉へ引入られそうでござります。

活潑な唱歌を唄え。あれは何だ、と学校でも先生様が叱らしやりますそうなが、それで留やめますほどならばの、学校へ行く生徒ゆに、蜻蛉とんぼう釣るものも居おりませねば、木登りをする小僧もない筈はず——一向に留みませぬよ。

内は内で親たちが、厳しく叱言こごとも申します。気の強いのは、おのれ、凸助でこすけ……いや、鼻はなぴつしやり、芋※ずいきの葉はの凹ぼこ吉きちめ、細道ひつつかで引ひ捉つかまえて、張はり撲なくって懲こらそう、と通りものを待構えて、

こう透かして見ますがの、背の高いのから順よく並んで、同一よ
 うな芋※の葉を被かぶつてゐるけに、衣きものの縞しま柄がらも氣のせいか、
 逢魔おうまが時に茫ぼうとして、庄屋様の白壁に映して見ても、どれが孫や
 ら、悴せがれやら、小女童こめろやら分りませぬ。

おなじように、憑つきもの物がして、魔に使われているようで、手も
 つけられず、親たちがうろろしますの。村方一同寄ると障さわると、
 立膝に腕組するやら、平胡坐ひらあくらで頬杖ほおづえつくやら、変じゃ、希有けう
 じゃ、何でもただ事であるまい、と薄氣味を悪がります。

中でも、ほつと溜息ためいきついて、氣に掛けさっしやつたのが、鶴
 谷喜十郎様。」

と丁寧なごに、また名告なつて、姥うばは四辺あたりを見たのである。

十三

さて十年の馴染なじみのように、擦寄ひそつて声を密ひそめ、

「童わらべ唄うたを聞きかつしやりまし——（秋谷あきや邸ぢの細道やしきじゃ、誰方たれがが

見みえても通としません）——と、の、それ、」

小次郎せうじろう法師ほうしの領うくなずずのを、合点あてさせたり、と熟じつと見みて、姥うばばはやが
て打うち領うきなずず、

「……でござりましょう。まず、この秋谷あきやで、邸ぢと申ましますれば

——そりや土蔵つちぐら、白壁しろかべ造づくり、瓦屋根かわらは、御方ご一軒いっけんではござりま

せぬが、太閤たいこう様さまは秀吉ひでよし公こう、黄門わうもん様さまは水戸みづの様さまでのう、邸ぢは鶴谷つるやに

歸したもの。

ところで、一軒は御本宅、こりや村の草分でござりますが、もう一軒——喜十郎様が隠居所にお建てなされた、御別荘がござりましての。

お金は十分、通い廊下に藤の花を咲さかしよう、西洋窓に鸚鵡おうむを飼おうと、見本は直じき近い処じこにござりまして、思おぼ召しめ通りじやけれど、昔かたぎ氣質かたぎの堅かたい御仁ごじん、我等われら式しき百姓ひやくしやうに、別荘べつしやうづくりは相あ応おわしからぬ、とついこのさきの立たて石いし在あり、昔からの大庄屋が土台ごと売物に出しました、瓦わばかりも小千両、大黒柱が二抱え。平家ながら天井が、高い処じこに照きり々らして間ま数かず十じゆばかりもござりますのを、牛うし車くるまに積たんで来て、背うしろ後おに大お森おきをひかえて、黒くろ塗ぬり

の門も立木の奥深う、巨寺おおでらのようにお建てなされて、東京の御修業さきから、御子息の喜太郎様が帰らつしやりましたのに世を譲つて、御夫婦一まず御隠居が済みましけ。

去年の夏でござりますがの、喜太郎様が東京で御鼻ひいきにならした、さる御大家の嬢様じゃが、夏休みに、ぶらぶら病やまいの保養がしたい、と言わつしやる。

海辺は賑にぎやかでも、馬車が通つて埃ほこりが立つ。閑静な処をお望み、間数は多し誂あつらえ向き、隠居所を三間ばかり、腰元も二人ぐらい附はずく筈と、御子息から相談を打ぶたつしやると、隠居と言えは世を避けたも同様、また本宅へ居直るも億劫おっこうなり、年寄としよりと一所では若い御婦人の気が詰つまろう。若いものは若い同士、本家の方へお連

れ申して、土用正月、歌留多うたがるたでも取つて遊ぶが可い、嫁もさぞ喜ぼう、と難有ありがたいは、親でのう。

そこで、そのお嬢様に御本家の部屋を、幾つか分けて、貸すことになりました。ある晩、腕車くるまでお乗込み、天上ぬけうつくしに美しい、と評判ばかりで、私等わしらついぞお姿も見ませなんだが、下男下女どもにも口留めして、秘かくさしたも道理じやよ。

その嬢様は落つこちそうなお腹じやげな。」

「むむ、孕はらんでいたかい。そりや怪けしからん、その息子というのが馴染なじみではないのかね。」

「御推量でございます、そこじや、お前様。見えて半月とも経たちませぬに、豪えらい騒動が起つたのは、喜太郎様の嫁御がまた臨月じ

や。

御本家に飼殺しの親爺おやじ仁右衛門、渾名あだなも苦虫にがむし、むずかしい顔をして、御隠居殿へ出向いて、まじりまじり、煙草たばこを捻ひねつて言うことには、（ハイ、これ、昔から言うことだ。二人いっとき一齊いっときに産を
しては、後か、前か、さきいずれ一人、相あい孕ばらみの怪我けががござるで、
分別ぶんべつのうてはなりません、）との。

喜十郎様、凶年にもない腕組をさつせえて、（善よし悪あしはともか
く、内の嫁が可愛いにつけ、余所よその娘の臨月を、出て行けとは無
慈悲ひさしで言われぬ。ただし廂ひさしを貸したものに、母屋おもやを明渡して嫁を
隠居所へ引取る段は、先祖の位牌いはいへ申訳がない。私等わしらが本宅へ立
帰って、その嬢様にはこの隠居所を貸すでしょう）——御夫婦、

黒門を出さしつたのが、また世に立たつしやる前表かの。

鶴谷は再度、御隠居の代になりました。」

「息子さんは不埒ふらちが分つて勘当かい。」

「聞かっせえまし、喜太郎様は亡くなりましたよ。前後あとさきへ黒門から葬おとむらい礼らいが五つ出ました。」

「五つ！」

「ええ、ええ、お前様。」

「誰と誰と、ね？」

「はじめがその出養生でようじようの嬢様じゃ。これが産後でおいとしゆうならしつた。大騒ぎのすぐあと、七日目に嫁御がお産じゃ。」

汐時しおどきが二つはずれて、朝六つから夜の四つ時まで、苦しみ通

しの難産でう。

村中は火事場の騒ぎ、御本宅は寂しんとして、御経の声やら、咳しわぶきやら……」

十四

「占者が卦けを立てて、こりや死しり霊ようの祟たたりがある。この鬼に負けてはならぬぞ。この方から逆寄さかよせして、別宅のその産屋うぶやへ、守まもり刀たなを真まつ先さきに露た払いで乗込まめさ、と古ふる袴ばかまの股立ももだちを取つて、突立つ上つりあががますのいにき勢おづいいて、お産婦しとねを褥しとねのまま、四隅と両方、六人の手で密そつと昇かいて、釣台へ。

お先立ちがその易者殿、御幣を、ト襟へさしたものでござりま
す。笠竹の長袋を前半じや、小刀のように挟んで、馬乗提
灯の古びたのに算木を躪しましたので、黒雲の蔽かぶさった、
蒸暑い畦を照し、大手を掉つて参ります。

嫁入道具に附いて来た、藍貝柄の長刀を、柄払いして、

仁右衛門親仁が担ぎました。真中へ、お産婦の釣台を。そのわ
きへ、喜太郎様が、帽子かぶりで、蒼くなつて附添った、背後
へ持明院の坊様が緋の衣じや。あとから下男下女どもがぞろぞろ
と従きました。取揚婆さんは前へ早や駆抜けて、黒門のお部屋
へ産所の用意。

途中、何とも希有な通りものでござりまして、あの螢がまたむ

らむらと、蠅がなぶるように御病人の寝姿に集りたかますと、おなじ煩うても、美しい人の心かして、夢中で、こう小児こどものように、手で取つちや見さしつけ。

上へ手を上げさつしやるのも、御容体を聞くにつけ、空をつかんで悶もだえさつしやるようで、目も当てられぬ。

それでも崇りに負けるなど、言うて、一生懸命、仰向あおむかした枕をこぼれて、さまで瘡やせも見えぬ白い頬へかかる髪まゆの先を、しつかり白歯で噛かましたが、お馴染なじみじや、私わしが藪やぶの下で待つまちけて、御新造ごしんぞさま様しつかりなさりまし、と釣台つりだいに縋すがつたれば、アイと、細い声で云うて莞爾にっこりと笑わした。橋を渡つて向うへ通る、暗やみの晩ばんの、榛はんの木の木の下あたり、螢の数の宙へいかいことちらちらして、

常夏とこなつの花のおもかげ梯立つのが、あなた貴方の顔のあたりじや、と目をつぶ瞑つて、
おめでたを祈りましたに……」

声も寂しゆう、

「お寺の鐘が聞えました。」

「南無阿弥陀仏、」

「お可哀相に、ういざん初産で、その晩、のう。

いや厭な事でござります。黒門へ着かして、産所へ据えよう、と

しますとの、それ、出養生の嬢様の、お産の床と同一おんなじじや。（あ

あ、青いはちまき顱巻をした方が、寝てでござんす、ちつとわき傍へ）と……

……まあ、難産の嫁御がそう言わしつけ。

そいつ其奴に、負けるな、おツつぶ押潰せ、と構わずしとね褥を据えましたが、夜

露を受けたが悪かつたか、もうお医者でも間に合わず。

(あなたも。……口惜い、)と恍惚して、枕にひしと喰つかし
つて、うむと云うが最期で、の、身二ツになりはならしつたが、
産声も聞えず、両方ともそれなりけり。

余りの事に、取逆上せさしつたものと見えまして、喜太郎様は
その明方、裏の井戸へ身を投げてしまわしつた。

井戸替もしたなれど、不気味じやで、誰も、はい、その水を飲
みたがりませぬ処から、井桁も早や、青芒あおすすきにかくれましたよ。

七日に一度、十日に一度、仁右衛門親仁や、私がとこの宰八—
—少いものは初わかから恐ろしがって寄よつつきませぬで——年役に出か
けては、雨戸を明けたり、引窓を繰ったり、日も入れ、風も通し

たなれど、この間のその、のう、嘉吉が気が違いました一件の時から、いい年をしたものまで、黒門を向うの奥へ、木下このしたやみ闇のぞを覗きますと、足が縮すくんで、一寸も前へ出はいたしませぬ。

簪かんざしの蒼い光った珠たまも、大方螢であろう、などと、ひそひそ風説うわさをします処へ、芋ずいぎ※の葉に目口のある、小さいのがふらふら歩行あるいて、そのお前様、

(秋谷邸の細道じゃ、

誰方が見えても……)

でござりましょう。ひとあし人足が絶えるとなれば、草が生えるばかりじゃ。ハテ黒門の別宅は是非に及ばぬ。秋谷邸の本家だけは、人足が絶やしないものを、どうした時節か知らぬけれど、鶴

谷の寿命が来たのか、と喜十郎様は、かさねがさねおつむりが真ま白しろで。おふくろ様も好いいお方、おいとしい事でござります。

おお、おお、つい長話になりました、そちこち刻限、ああ、可い厭やな芋※の葉が、唄あうて歩あ行く時分になりました。」

と姥あは四辺あをみまわした。浪の色が蒼あくなつた。

寂然しんとして、果はは目つを瞑むつて聞入きつた旅僧りょそうは、夢ならぬ顔を上

げて、葭よ簣しずから街道まちみちの前あ後とを視みめたが、日脚ひあしを仰あぐまでもない。

「身に染む話はなしに聞惚ききとれて、人通ひととりがもう影法師かげぼうしじゃ。世よの中には種いろ々な事ことがある。お婆おばさん、お庇かで沢山たん学問がくもんをした、難ありがと、

どれ……」

十五

「そして、御坊様は、これからどこまで行ゆかつしやりますよ。」
包を引寄せる旅僧に連れて、姥うばも腰を上げて尋ねると、

「鎌倉は通越して、藤沢まで今日の内に出ようという考えだったが、もう、これじゃ葉山あかりで灯つが点こう。

「おお、そう言や、森戸の松の中に、ちらちらと灯ひが見える。」
「よう御存じでござりますの。」

「まだ俗うちの中に知っています。そこで鎌倉を見物にも及ばず、東海道の本筋へ出ようという考えじゃったが、早や遅い。」

「修業が足りんで、樹下、石上、野宿も辛し、」

と打微笑うちほほえみ、

「鎌倉まで行きましようよ。」

「それはそれは、御不都合な、つい話に実が入りまして、まあ、とんだ御足おみあしを留めましてござります。」

「いや、どういたして、忝かたじけない。私は尊いお説教を聴問したような心持じゃ。」

何、嘘ではありません。

見なさる通り、行脚あんぎやとは言いながら、気散じの旅の面白さ。

蝶々蜻蛉とんぼの道連みちづれには墨染の法衣ころもの袖の、発心の涙が乾いて、おのずから果敢はかない浮世の露も忘れる。

いつとなく、仏の御名みなを唱えるのにも遠ざかって、前刻さつきも、お

前ね。

実はここに来しなであつた。秋谷明神と云う、その森の中の石段の下を通つて、日向ひなたの麦畠ばたけへ差懸さしかかると、この辺には余り見懸けぬ、十八九の色白な娘が一人、めりんす友染ゆうぜんの襷懸たすきがけ、手拭ぬぐいを冠かぶつて畑に出ている。

ある歩行あるきながら振返つて、何か、ここらにおもしろい事もないか、と徒むだぐち口半分、檜ひのきがさ笠かさの下から頤おとがいを出して尋ねるとね。

はい、浪打際に子産石こうみいしと云うのがござんす。これこれでこの名所ところ、と土地自慢も、優しく教えて、石段から真直まっすぐに、畑はたな中かを切つて出て見なさんせ、と指さしをしてくれました。

いかに石が名所でも、男ばかりで児こが出来るか。何と、姉あねや、

と麦にかくれる島田を覗いて、天狗わらいに冴えて来ました、面目もない不了簡。

嘉吉とかを聞くにつけても、よく気が違わずに済んだ事、とお話中に悚気としたよ。

黒門の別荘とやらの、話を聞くと引入れられて、気が沈んで、しんみりと真心から念仏の声が出ました。

途中すがらもその若い人たちの的^的に仏名を唱えましょう。木賃の枕に目を瞑つたら、なお歴然、とその人たちの、姿も見えるような気がするから、いつそよく念仏が申されようと考える。

聞かしておくれの、お婆さん、お前は善智識、と云うても可い、私は夜通しても構わんが。

あんまり身を入れて話をする——聞く——していたので、邪魔になつては、という遠慮か、四五人こつちを覗いては、素通をしたのがあります。

近在の人と見える。風呂敷包を腰につけて、草履穿きで裾をか
らげた、杖を突張つた、白髪の婆さんの、お前さんとは知己と
見えるのが、向うから声をかけたつけ。お前さんが話に夢中で、
気が着かなんだものだから、そのままほくほく去つてしまった。
私も聞惚れていた処、話の腰を折られては、と知らぬ顔で居た
つけよ。

大層お店の邪魔をしました、実に済まぬ。」
と扇を膝に、両手で横に支きながら、丁寧^{つつ}に会釈する。

姥うばはあらためて右瞻左瞻とみこうみだが、

「お上人様、御殊勝にござります、御殊勝にござります。

難有ありがた

や、」

と浅からず渴かつごう仰して、

「本家が村一番の大長者じやと云えば、申憎い事ながら、どこを宿ともお定めない、御見懸け申した御坊様じや。推しても行つてえこう回向をしよう。ああもしよう、こうもしてやろう、と齋布施ときふせをお目当で……」

とずつきり云つた。

「こりや仰おっしや有りそうな処、御自分の越度おちどをお明かしなさりまして、路々念仏申してやろう、と前途さきをお急ぎなさります飾りの無

いお前様。

道中、お髪ぐしの伸びたのさえ、かえつて貴う拝まれます。どうぞ、その御回向を黒門の別宅で、近々として進ませて下さりませぬか。……

もし、鶴谷でもどのくらい喜びますか分りませぬ。」

十六

鶴谷が下男、苦虫の仁にえもん右衛門親仁おやし。角のある人ひと魂たまめかして、ぶらりと風呂敷包を提げながら、小川べりの草の上。

「なあよ、宰八、」

「やあ、」

と続いた、手^{てん}ぼう蟹は、夥^{なかま}間の穴の上を冷飯^{ひやめしぞうり}草履、両足をしやちこぼらせて、舞鶴の紋の白い、萌黄^{もえぎ}の、これも大^{おお}包^{おつ}。夜具を入れたのを引背負^{ひつしよ}つたは、民が塗炭^{とたん}に苦^{くる}んだ、戦国時代の駆^か落^けめく。

「何か、お前^{まへ}が出^で会^{くわ}した——黒門に逗^{とうり}留^{りゆう}してござらしやる少^わえ人^いが、手鞆^{てまり}を拾^{ひろ}つたちゆうはどこらだっけえ。」

「直^じきだ、そうれ、お前^{まへ}が行^ゆく先に、猫柳^{ねりゅう}がこんもりあんべい。」

「おお、」

「その根際^{ねぎ}だあ。帽子^{ぼうし}のふちも、ぐったり、と草臥^{くたぶ}れた形での、そこに、」

と云つた人声に、葉裏から螢が飛んだ。が、三ツ五ツ星に紛れて、山際薄く、流ながれが白い。

この川は音もなく、霞のように、どんよりと青田の村を這はうのである。

「ここだよ。ちようど、」

と宰八はちよつと立留まる。前途ゆくてに黒門の森を見てあれば、秋谷の夜はここよりぞ暗くなる、と前途に近く、人の足許あしもとが朦もうろ朧うと、早やその影が押寄せて、土手の低い草の上へ、襲いかかる風情だから、一人が留まれば皆留まつた。

宰八の背後あとから、もう一人ステッキ。杖を突いて続いた紳士は、村の学校の訓導である。

「見馴れねえ旅の書生さんじや、下ろした荷物に、寝そべりかか
つて、腕を曲げての、足をお前、草の上へ横投げに投出して、ソ
レそこいら、白鷺の鷄冠のように、川面へほんのり白く、す
いすいと出て咲いていら、昼間見ると桃色の優しい花だ、はて、
蓬でなしよ。」

「石竹だつぺい。」

「撫子の一種です、常夏の花と言うんだ。」

と訓導は姿勢を正して、杖を一つ、くるりと廻わすと、ドブン。

「ええ！驚かなくても宜しい。今のは蛙だ。」

「その蛙……いんねさ、常夏け。その花を摘んでどうするだか、

一束手ぶしに持ったがね。別にハイそれを視めるでもねえだ。美

しい目水晶びんぱちくりと、川上の空あおさ碧く光つとる星ほしい向いて、相
談だん打つような形だね。

草鞋わらじがけじやで、近辺の人ではねえ。道さ迷ったら教えて進まぜ
べい、と私わしもう内へ帰って、婆様と、お客に売った洪茶こうの出だし殻がら
で、茶漬ちまえ掻食かうばかりだもんで、のっそりその人の背中へ立っ
て見ていると、しばらく経たつてよ。

むっくりと起返った、と思うとの。……（爺じい様さん、あれあれ、

）
その時、宰八川面へ乗出して、母衣ほろを倒さかに水に映した。

「（手毬てまりが、手毬が流れる、流れてくる、拾ひろつてくれ、礼をする

）。

見ると、成程、泡も立てずに、夕焼が残ったような尾を曳いて、

その常夏を束にした、真丸まんまるいのが浮いて来るだ。

(銭ぜにかね金はさて措おかつせえ、だが、足を濡らすは、厭こんな事だ。)

と云う間も無ねえ。

突いきなり然いきなりざぶりと、少わけえ人は衣服きものの裾すそを掴つかんだなりで、川の中へ

飛込んだっけ。

押問答に、小半時かかればとつて、直ぐに突ん流れるような疾はやえ水脚では、コレ、無えものを、そこは他国の衆で分らねえ。稲妻つかまを掴つかえそうな慌あわて方で、ざぶざぶ真まん中なかで追おっかける、人の煽あおりおで、水が動いて、手毬は一つくるりと廻った。岸の方へ寄るでね

えかね。

（えら！気の疾え先生だ。さまで欲しけりや算段のうして、柳の枝を折おつべつしよつても引寄せて取つてやるだ、見さつせえ、旅の空で、召ものがびしよ濡れだ。）と叱言こごとを言いながら、岸へ来たのを拾おう、と私わし、えいやつと蹲しゃがんだが。

こんな川でも、動揺どよみにや浪を打つわ、濡れずば榮螺さざえも取れねえ道理よ。私わしが手を伸のばすとの、また水に持つて行ゆかれて、手毬はやつぱり、川の中で、その人が取らしつげがな。……ここだあ仁右衛門、先生様も聞かつせえ。」

と夜具風呂敷の黄母衣きほろごし越こし、茜あかねいろ色のその顱はちまき卷ねじむを捻ね向むけて、厭いやな事は、……手毬を拾うと、その下に、猫が一匹居たではね

えかね。」

十七

訓導は苦笑いして、

「可いい加減な事を云う、狂きちがい気の嘉吉以来だ。お前は悪く変なものに知ちかづき己おれのように話をするが、水みずくぐ潜りをするなんて、猫化けの怪談にも、ついに聞いた事はないじゃないか。」

「お前様もね、当あたりまえ前まへだあこれ、空を飛ぼうが、泳ごうが、活いきた猫なら秋谷中私わしら知ちかづき己おれだ。何も厭いやな事はねえけんど、水ひたしの毛がよれよれ、前足のつけ根なぞは、あか膚はだよ。げっそり

骨の出た死骸しがいでねえかね。」

訓導は打棄うつちやるように、

「何だい、死骸か。」

「何だ死骸か、言わつしやるが、死骸だけに厭いやなこんだ。金壺かなつぼ

眼まなこを塞ふさがねえ。その人が毬まりを取ると、三毛の斑ぶちが、ぶよ、ぶよ、

一度、ぷくりと腹を出いで、目がぎよろりと光ツたけ。そこから鼠ねずみ

色の汚きたえ泡たねだらけになつて、どんみりと流れたわ、水とハイ摺すれ

々れでの——その方は岸へ上つて、腰までずぶ濡れの衣きものを絞ると

つて、帽子を脱いで仰向あおむけにして、その中さ、入れさしつた、傍そば

で見ると、紫もありや黄色い糸もかがつてある、五色しきの——手毬

は、さまで濡れてはいねえだつてよ。」

「なあよ、宰八、」

「何あんだえ。」

仁右衛門は沈んだ声で、

「その手毬はどうしたよ。」

「今でもその学生が持つてるかね。」

背後うしろから、訓導がまた聞き挟む。

「忽こっねん然として消え失うせた。夢に拾った金子かねのようだね。へ、

へ、へ、」

とおかしな笑い方。

「ふん、」

と苦虫は苦ったなりで、てくてくと歩ある行き出す。

「嘘を吐け、またはじめた。大方、お前が目の前で、しゃぼん球だまのように、ぱつと消えてでもなくなつたらう、不思議さな。」

「違えます、違えますとも！」

仁右衛門の後を打ちながら、

「その人が、

(爺じいさん様、この里では、今時分手毬をつくか。)

(何あんなでね?)

(小児こどもたちが、優しい声、懐なつかしい節で唄うている。

ここはどここの細道じゃ、

秋谷邸の細道じゃ……)

一件ものをの、優しい声、懐しい声じゃ云うて、手毬を突くか、

と問わつしやるだ。

とんでもねえ、あれはお前様、芋※の葉が、と言おうとしたが、待ちろ、芸もねえ、村方の内証を饒舌しやべつて、恥搔かくは知慧ちえでねえと、

(何あにお前めえさま様、学校で体操するだ。おたま杓じゃくし子で球をすくつて、ひるてんの飛とびつこをすればちゆツて、手毬なんか突きつこねえ、)と、先生様の前だけんど、私わし一ツ威張いぢつたよ。」

「何だ、見みともない、ひるてんの飛とびつことは。テニスだよ、テニスと言いえば可いい。」

「かね……私わしまた西洋すずめおどりの雀すずめおどり躍おどりか、と思おもつたけ、まあ、可ええ。」

「ちつとも可よかあない、」

と訓導は唾つばをする。

「それにしても、奥床しい、誰が突いた毬だろう、と若え方問わつしやるだが。

のつけから見当はつかねえ、けんど、主ぬしたもとが袂たもとから滝たきのように水が出るのを見るにつけても、何とかハイ勘考せねばなんねえで、

その手毬てんぼうを持って見た、」

と黄母衣きほろを一つ揺ゆすり上げて、

「濡れちやいねえが、ヒヤリとしたでね、いい塩梅あんばいよ、引込ひっこんだのは手棒てんぼうの方、」

へへ、とまた独りで可笑おかしがり、

「こつちの手で、ハイ海へ落ちさつしやるお日様と、黒門の森に

掛かかつたお月様の真まんなか中へ、高たつかくこう透かして見つけ。

しやぼん球だまではねえよ。真まんまる円な手毬の、影も、草に映つたでね。」

「それがまたどうして消えた、馬鹿な！」

と勢いきおい込こむ、つき反ステツらした杖キの尖さきが、ストンと蟹はさまの穴へ狭はさまつ

たので、厭な顔をした訓導は、抜きざまに一足飛ぶ。

「まあ、聞かつせえ。

玉味噌の鑑定とは、ちくと物が違うでな、幾わしら私ひねが捻ひねくつても、どこのものだか当りは着かねえ。

(霞のような小川の波に、常とこなつ夏の影がさして、遠くに……)(細道)が聞える処へ、手毬が浮いて……三年五年、旅から旅を歩ある行

いたが、またこんな嬉しい里は見ない、)

と、ずぶ濡ぬれの衣きものを垂しれる雫しずくさえ、身体からだから玉がこぼれでもするほどに若え方は喜ばつしやる。」

十八

「——(この上誰か、この手毬の持主に逢えとなれば、爺さん、私は本望だ、野山に起おき臥ふしして旅をするのもそのためだ。)

と、話さつしやるでの。村を賞ほめられたが憎くねえだし、またそれまでに思わつしやるものを、ただわかりましねえで放ほ擲かしては、何か私わし、気が済まねえ。

そこで、草原へ蹲み込んで、信にはなさりますめえけんど、と嘉吉に蒼い珠授けさしつた……」

しばらく黙って、

「の、事を話したらばの。先生様の前だけんど、嘘を吐け、と天窓からけなさつしやりそうな少え方が、

（おお、その珠と見えたのも、大方星ほどの手毬だろう。）と、あのまた碧い星を視めて云うだ。けちりんも疑わねえ。

（なら、まだ話します事がござります、）とついでに黒門の空あきや邸しきの話をするとの。

（川はその邸の、庭か背戸を通って流れはしないか。）

と乗出しけよ。……（流れは見さつしやる通りだ）……」

今もおなじような風情である。——薄^{うつつ}りと廂^{ひさし}を包^こむ小^こ家^{いえ}の、紫^{むら}の煙^{けぶり}の中も繞^{めぐ}れば、低^ひく裏^{うら}山の根^ねにかかつた、一^{ひと}刷^{はけ}灰^{はい}色^{いろ}の靄^{もや}の間も通^{とほ}る。青^{あお}田^たの高^{たか}低^{ひく}、麓^{たかひく}の凸^{ふもと}凹^{でいり}に従^{したが}うて、柔^{やわら}かにのんどりした、この一^{ひと}巻^{まき}の布^{ぬい}は、朝^あ霞^かには白^{しろ}地^ぢの手^て拭^{ぬぐ}い、夕^{ゆふ}焼^やには茜^{あか}の襟^{えり}襷^{たすき}になり帯^{おび}になり、果^はは薄^{すすき}の裳^{もすそ}になつて、今もある通^{とほ}り、村^{むら}はずれの谷^{やと}戸^{ぐち}口^{くち}を、明^あ神^{かみ}の下^{した}あたりから次第^{しだい}に子^こ産^{うみ}石^{いし}の浜^{はま}に消^きえて、どこへ灌^{そそ}ぐといふこともない。口^{くち}につけると塩^{しほ}気^おがあるから、海^{うみ}潮^{しほ}がさすのであろう。その川^{かわ}裾^{すそ}のたよりなく草^{くさ}に隠^{かく}れるにつけて、明^あ神^{かみ}の手^て水^{みづ}洗^{らし}にかけた献^{けん}燈^{とう}の発^{はつ}句^ぐには、これ^こを霞^か川^{がわ}、と書^かいてあるが、俗^{ぞく}に呼^よんで湯^ゆ川^{がわ}と云^いう。

霞に紛れ、靄に交つて、ほのぼのと白く、いつも水気の立つ処から、言い習わしたものらしい。

あの、薄煙うすけぶり

あの、靄の、一際夕暮を染めたかなたこなた

は、遠方おちかた

の松の梢も、近間なる柳の根も、

いずれもこの水の淀よど

んだ処で。

畑一つ前途ゆくてを仕切つて、

縦に幅広く水気が立つて、小

高い礎いしづえを朦朧もうろう

と上に浮かしたのは、森の下した闇やみで、靄が余所よそよ

りも判然はつきりと濃くかかつたせいで、

鶴谷が別宅のその黒門の一ひとつか

構まへ。

三人は、彼処かしこをさして迎たどるのである。

ここに渠等かれらが伝う岸は、一間ばかりの川幅であるが、鶴谷の本

宅あたりの辺では、およそ三間に拡がって、川裾は早やその辺からびし

よびしよと草に隠れる。

ここへは、流ながれをさかのぼつて来るので、間には橋一つ渡らねばならぬ。

橋は明神の前へ、三崎街道に一つ、村の中に一つ。今しがた渠等が渡つて、ここから見えるその村の橋も、鶴谷の手で欄干はついているが、細流せせらぎの水静かなれば、偏ひとえに風情を添えたよう。青い山から靄の麓へ架かけ渡したようにも見え、低い堤防どての、茅屋かややから茅屋の軒へ、階子はしごを横よこえたようにも見え、とある大家の、物ものず好きに、長く渡した廻廊めぐりかとも視ながめられる。

灯とももやや、ちらちらと青田あかに透みく。川下の其方そなたは、藁屋わらや続きに、海が映あつて空も明あい。——水みな上の奥おくになるほど、樹の枝に、茅か

やぶき
 葺の屋根が掛つて、みのもし 蓑虫が蟻したような小家がちの、それも
 三つが二つ、やがて一つ、窓の明も射さず、水を離れた夕炊ゆうかしぎ
 の煙ばかり、細く沖で救を呼ぶ白旗のように、風のまにまに打うちな
 靡く。海の方は、暮が遅くて灯が疾く、山の裾は、暮が早くて、
ともしび 燈が遅いそうな。

まだそれも、鳴子引けば遠近おちこち たよりに便があるう。家と家とが間を
 隔て、岸を措いても相望むのに、黒門の別邸は、かけ離れた森の
 中に、ただ孤家ひとつやの、四方へ大なる蜘蛛おおき くものごとく脚を拡げて、ど
 こまでもその暗い影を畝うねらせる。

月は、その上にかかっているのに。……

せんだつ 先達の仁右衛門は、早やその樹立こだちの、余波なごりの夜に肩を入れた。

が、見た目のさしわたしに似ない、帯がたるんだ、ゆるやかな川添そいの道は、本宅から約八丁というのである。

宰八が言い続いいで、

「……（外廻りを流れて来るし、何もハイ空家から手毬を落すはずはねえ。それでも猫の死骸なら、あすこへ持つて行つて打棄うちちやつた奴があるかも知んねえ、草ぼうぼうだでのう、）と私わし、話をしただがね。」

十九

「それからその少わえ方は、（どうだろう、その黒門の空家という

のを、一室ひとま借りるわけには行くまいか、自炊を遣やつて、しばらく旅くたびれの草臥たびれを休めたい、と相談打ぶつたが。

ねえ、先生様。

お前めえさま様、今の住居すまいは、隣の噂かかあ々々が小児がきい産んで、ぎやあぎやあ煩うるせえ、どこか貸す処があるめえか、言いわるるで、そんな時黒門さどうだちゆつたら、あれは、と二の足を踏ふましつけな。」

と横あびざまに浴あびせかけると、訓導は不意打ながら、さしつたりで、杖ステッキを小脇ひんだに引抱ひき、

「学校へ通うのに足場が悪くつて、道が遠くつて仕様がないから留やめたんだ。」

「朝寝さつしやるせいだっぺい。」

仁右衛門が重い口で。

訓導は教うるごとく、

「第一水が悪い。あの、また真ま蒼さおな、草の汁のようなものが飲めるものかい。」

「そうかね——はあ、まず何にしろだ。こつちから頼めばとつて、昼間掃除に行くのさえ、厭いやがります空屋敷じや。そこが望み、と仰おっしゃ有るに、お住居すまい下さればその部屋一ツだけでも、屋根の草が無うなつて、立腐れが保つこんだで、こつちは願かなつたり、叶かなつたり、本家の旦那だんなもさぞ喜びましょうが、尋常なみ体ていの家うちでねえ。あの黒門を潜くぐらつしやるなら、覚悟して行かつせえ、可ようがすか、と念を入れると、

(いやその位の覚悟はいつでもしている。)

と落着いたもんだてえば。

はてな、この度胸だら盗賊どろぼうでも大将株だ、と私わし、油断はねえ、

一分別したただがね、仁右衛門よ、」

「おおよ。」

「前刻さつき、着たつきりで、手毬を拾いに川ん中さ飛込んだ時だ。旅空かけて衣服きものをどうするだ、と私頼まれ効がいもなかつたけえ、気の毒さもあり、急がずば何とかで濡れめえものを夕立だ、と我鳴がなつつた時よ。

(着物は一枚ありますから……)

と見得でねえわ、見得でねえね。極きまりの悪そうに、人の心を無

にしねえで言訳をするように言わしつけが、こいつを睨にらんで、はあ、そこへ私わしが押惚おっほれただ。

殊勝な、優しい、最愛いとしい人だ。これなら世話をしても仔細しさいあんな

めえ。第一、あの色白しんていな仁体じんていじゃ……化ば……仁右衛門よ。」

「何なにい、」

「暗くくなったの、」

「彼かれこれ、酉むつ刻くつじゃ。」

「は、南無阿弥陀仏なむあみだぶつ、黒門前は真暗まつくらだんべい。」

「大丈夫、月が射さすよ。」

と訓導は空を見て、

「お前、その手毬の行方はどうしたんだい。」

「そこだてね、まあ聞かつせえ、客人が、その最愛らしい容子じ
 や……化、」

とまた言い掛けたが、青芒あおすすきが川のへりに、雑木一叢ひとむら、畑
 の前を背屈みかが通る真中まんなかあたり、野末の靄もやを一呼吸いきに吸込んだか
 と、宰八唐突だしぬけに、

「はつくしよ！」

胴震いで、立縮みたちすく、

「風がねえで、えら太い蜘蛛ひどの巣だ。仁右衛門、お前めえ、はあ、先
 へ立って、よく何ともねえ。」

「巢、巣どころか、己おらあ樹の枝から這はいかかった、土蜘蛛を引ひッつ
 掴かんだ。」

「ひやあ、」

「七日風が吹かねえと、世界中の人を吸殺すものだちゆっけ、半日蒸すと、早やこれだ。」

と握にぎりし占めた掌てのひらを、自分で捻開こじあけるようにして開いたが、恐るすか恐る透して見ると、

「何ぢや、蟹か。」

水へ、ザブン。

背後うしろで水車みずぐるまのごとく杖ステッキを振廻まわしていた訓導が、

「長蛇ちようだを逸よこすか、」

と元氣づいて、高らかに、

「たちまち見る大蛇の路に当よこたつて横よこたわるを、剣を抜きいて斬きらんと

欲すればろうしよう老松の影！」

「ええ、しずか静しずかにしてくらつせえ、……もう近えだ。」

と仁右衛門は真面目まじめに留める。

「おい、手毬はどうして消えたんだな、焦じれつたい。」

「それだがね、疾はええ話が、御仁体じや。化物が、の、それ、たとい顔を嘗なめればとつて、天窓あたまから塩しおとは言うめえ、と考えたで、

そこで、はい、黒門へ案内しただ。仁右衛門も知つての通り——今日はまた——内の婆々殿が肝きもいり入で、坊様を泊とめたでの、……御本家からこうやって夜具を背負しよつて、私わしが出向くのは二度目だ
がな。」

二十

「その書生さんの時も、本宅の旦那様、大喜びで、御酒は食らぬか。晩の物だけ重詰じゆうづめにして、夜さりまた搔餅かきもちでも焼いてお茶受けに、お茶も土瓶で持つて行け。

言わつしやつたで、一風呂敷と夜具包みを引背負ひつしよつて出向いたがよ。

へい、お客様前刻せんこくは。……本宅でも宜よろしく申してでござりました。お手廻りのものや、何やかや、いずれ明日お届け申します。

一ひとかたけ 餉かきもち ほんのお弁当がわり。お茶と、それから臥ふせらつしやるものばかり。どうぞハイ緩ゆつくり休まつしやりましたと、口上言うたが、

着物は既に浴衣に着換えて、燭台の傍へ……こりやな、仁右衛門や私が時々見廻りに行く時、皆閉切つてあつて、昼でも暗えから要害に置いてあつた。……先に案内をした時に、彼これ日が暮れたで、取り敢ず点して置いたもんだね。そのお前様、蠟燭火の傍に、首い傾げて、腕組みして坐つてござるで、気になるだ。

(どうかさつせえましたか。)と尋ねるとの。

「ここだ！」

と唐突に屹と云う。

「ええ何か、」と訓導は一足退く。

宰八は委細構わず。

「手毬の消えたちゆうがよ。（ここに確たしかに置いたのが見えなくなつた、）と若え方が言わつしやるけ。

そうら、始まつたぞ、と私わし一ツ腰をがつくりとやつたが、縁側へつかまつたあ——どんな風に、失なくなつたか、はあ、聞いたらばの。

三ツばかり、どうん、どうん、と屋根へ打附ぶつかつたものがあつた……大おおきな石でも落ちたようで、吃驚びっくりして天井を見上げると、あすこから、と言わしつけ。仁右衛門、それ、の、西の鉢前の十畳敷の隅ツこ。あの大掃除の検査の時さ、お巡査まわり様さまが階子はしごさして、天井裏へ瓦斯がすを点つけて這込はいこまつしやる拍子はしりに、洋刀サアベルの鎧こじりが上あがつて倒さかさまになつた刀みが抜けたで、下に居た饅頭屋うどんの大面おおづらをちよん切

つて、鼻柱怪我アした、一枚外れている処だ。

どんと倒さかおと落しに飛んで下りたは三毛猫だあ。川の死骸と同じ

毛色じゃ、（これは、と思うと縁へ出て）……と客人の若え方が
言わっしやったで、私わしは思わず傍わきへ退のいたが。

庭へ下りて、草茫ほうぼう々の中へ隠れたのを、急いで障子の外へ出
て見ている内に、床の間に据えて置いた、その手毬がさ。はい、
忽こっねん然と消えちゆうは、……ここの事だね。」

「消えたか、落したか分るもんか。」

「はあ、分らねえから、変でがしよ、」

「何もちつとも変じゃない。いやしくも学校のある土地に不思議
と云う事は無いのだから。」

「でも、お前様めえさま、その猫がね、」

「それも猫だか、鼬いたちだか、それとも鼠だが、知れたもんじやない。

森の中だもの、兎うさぎだつて居るかも知れんさ。」

「そのお前様、知れねえについてでがさ。」

「だから、今夜行つて、僕が正体を見届けてやろうと云うんだ。」

「はい、どうぞ、願えますだ。今までにも村方で、はあ、そんな

事を言つて出向いたものがの、なあ、仁右衛門。」

無言なり。

「前方さきへ行つて目をまわしつけ、」

「馬鹿、」

と憤然むっとした調子でつぶや呟く。

きかぬ氣の宰八、くれなはさみ紅の鋏おつたを押立て、

「お前様もまた、馬鹿だの、仁右衛門だの、坊様だの、人大勢の時に、よく今夜来さした。今まではハイついぞ行つて見ようとも言わねえだっけが。」

「あたりまえ当 前 です、学校の用を欠いて、そんな他愛たわいもない事にかかり合つていられるもんかい。休暇になつたから運動かたがた来て見たんだ。」

「へ、お前様なんざ、疊はが匆はねるばかりでも、投飛ばされる御連中だ。」

「何を、」

「わし私なんざ おくびよう臆病でも、その位の事にや馴なれたでの、船へ乗つ

た気で押おっこらえるだ。どうしてどうして、まだ、お前……」

「宰八よ、」

と陰気な声する。

「おお、」

「ぬしやまた何も向う面づらになつて、おかしなもののお味方をするにや当るめえでねえか。それでのうてせえ、おりや重いもので押お伏つぶせられそうな心持だ。」

と溜息ためいきをして云つた。浮世を鎖とぎしたような黒門いしずえの礎もとを、霏もやがさそうて、向うから押し拵しがった、下した闇やみの草に踏みしげりかかり、茂しげりの中へ吸い込まれるや、否いなや、仁右衛門が、

「わつ、」

と叫んだ。

二十一

「はじめの夜は、ただその手毬てまりが失せましただけで、別に変つた事件ことも無かつたでございますか。」

と、小次郎法師の旅僧たびそうは法衣ころもの袖を搔かき合あわせる。

障子を開けて縁の端はしぢか近くに差向いに坐つたのは、少わかい人、すなわち黒門の客である。

障子も普通なみよりは幅が広く、見上げるような天井に、血の足あしあ痕ともさして着いてはおらぬが、雨垂あまだれが伝つたわわ墨汁インキが降りそう

な古びよう。巨寺の壁に見るような、雨漏の痕の画像は、
 煤色の壁に吹きさらされた、袖のひだが、浮出たごとく、浸附
 て、どうやら饅頭の形した笠を被っているらしい。顔ぞと見
 る目鼻はないが、その笠は鴨居の上になって、空から畳を瞰下ろ
 すような、惟うに漏る雨の余り侘しさに、笠欲ししと念じた、壁
 の心が露れたものであろう——抜群にこの魍魎が偉大いから、
 それがこの広座敷の主人のようで、月影がぱらぱらと鱗のごとく
 樹の間を落ちた、広縁の敷居際に相對した旅僧の姿などは、硝子
 障子に嵌込んだ、歌留多の絵かと疑わるる。

「ええ、」

と黒門の年若な逗留客は、火のない煙草盆の、遙に上の方

で、燧灯マッチを摺すつて、静しずかに吸すいつけた煙草の火が、その色の白い頬に映うつつて、長い眉を黒く見せるほど室まの内は薄暗い。——差置さしかれたのは行燈あんどうである。

「まだその以前でした。話すと大勢が気にしますから、実は宰八と云う、爺おやさん……」

「ああ、手てぼうの……でございますな。」

「そうです。あの親仁おやじにも謂いわないでいたんですが、猫と一所に手毬の亡なくなりますちつと、前です。」

この古館ふるやかたのまずここへ坐まりましたが、爺おやさんは本家へ、と云いつて参まりました。黄昏たそがれにただ私一人わたしで、これから女中が来て、湯を案内する、上あつて来きます、膳ぜんが出る。床を取る、寝る、と段

取の極きまりました旅籠屋はたごやでも、旅は住すみ心ごころの落着かない、全く仮の宿です……のに、本家でもここを貸しますのを、承知する事か、しない事か。便りに思う爺さんだつて、旅他国で畔あぜ道みちの一面識。自分が望んでではありませんが、家と云えば、この畳を敷いた——
八幡不知。
やわたしらず

第一要害がまるで解わかりません。真中まんなかへ立つてあつちこつち瞻みまわしただけで、今入つて来た出口さえ分らなくなりましたほどです。
おおげさ
大袈裟に言えば、それこそ、さあ、と云う時、遁路にげみちの無い位
で。夏だけに、物の色はまだ分りましたが、日は暮れるし、貴僧あなた、
黒門までは可いい天気だったものを、急に大粒な雨！と吃驚びっくりしま
すように、屋根へ掛かりますのが、この蔽おっかぶさつた、櫨けやきの葉の落

ちますのです。それと知りつつ幾たびも気になつては、縁側から顔を出して植込の空を透かしては見い見いしました。」

と肩を落して、仰ぎ様に、さま、ひさし、のぞ、

「やっぱり晴れた空なんです……今夜のように。」

「しますると……」

旅僧は先祖が富士を見た状に、さま、首あげて天井の高きを仰ぎ、

「この、時々ぱらぱらと来ますのは、木の葉でこございますかな。」

「御覧なさい、星が降りそうですから、」

「成程。その癖音のしますたびに、ひやひやと身うちへこた応えますで、道理こそ、一雨かかったと思いましたが。」

「お冷えなさるようなら、あなた、貴僧、閉めましょう。」

「いいえ、蚊を疵きずにして五百両、夏の夜はこれが千金にも代えられませんが、かえって陽氣の方がお宜よろしい。」

と顔を見て、

「しかし、いかにもその時はお寂さみしかったでございましたよ。」

「実際、貴僧あなた、遙々はるばると国を隔てた事を思い染みました。この果はて

に故郷がある、と昼間三崎街道を通りつつ、考えなかつたでもありませんが、場所と時刻だけに、また格別、古里が遠かつたんです。」

「失礼ながら、御生国ごしようこくは、」

「豊前ぶぜんの小倉こくらで、……葉越はこしと言います。」

葉越は姓で、渠かれが名は明である。

「ああ、御遠方じや、」

と更あらためて顔を見る目も、法師は我ながら遙々と海を視ながめる思いがした。旅の寡やつれが何となく、袖を圧して、その单衣ひとえの縞柄しまがらにも顯あらわれていたものであつた。

「そして貴僧あなたは、」

「これは 申もうしお後おくれました、私わたくしは信州松本の在、至つて山家ものでございます。」

「それじや、二人で、海山のお物語が出来ますね。」
と、明は優しく、人懐なつこい。

「不思議な御縁で、何とも心嬉しく存じますが、なかなかお話相手にはなりません。ただ

承りまするだけで、それがしかし何より私には結構でございます
。」

と僧は慇懃である。

明は少し俯向いた。瘡せた顚に襟狭く、

「そのお話と云いますのが、実に取留めのない事で、貴僧の前では申すのもお恥かしい。」

「決して、さような事はございません。茶店の婆さんはこの邸に憑物の——ええ、ただ聞きましたばかりでも、成程、浮ばれそ

うもない、少いわか仏たちの回向えこうも頼む。ついては貴下あなたのお話も出ま
してな。何か御覚悟ごかくがおりなさるそうで、熟じゅつと辛抱しんぱうをしてはご
ざるが、怪しい事が重なるかして、お顔の色も、日ごとに悪い。
と申せば、庭先の柿の広葉ひろはが映るせいで、それで蒼あお白しろく見え
るんだから、氣にするな、とおっしやるが、お身体からだも弱よわそうゆえ
に、老としより寄よ夫婦ふうふで一層いっそうのこと氣にかかると。

昼の内は宰八さいはちなり、誰か、時々お伺いはいたしますが、この頃
は氣怯きおわくれがして、それさえ不沙汰ぶさたがちじやに困こまつて、私によくお
見舞い申してくれ、と云う、くれぐれもその託ことづけでございました。
が何か、最初の内、貴方あなたが御逗留ごとうりゆうというのに元氣づいて、血氣
な村の若い者が、三人五人、夜食の惣菜そうさいものの持寄り、一升徳利

なんぞ提げて、お話^{あいて}相手、夜伽^{よとぎ}はまだ穩^{おだやか}な内、やがて、刃物切物、鉄砲持参、手覚えのあるのは、係^{かけ}羅^{わな}に鼠^{ねずみ}の天麩羅^{てんぷら}を仕掛けて、ぐびぐび飲みながら、夜更けに植込みを狙うなんという事がありますそうで？——

婆さんが話しました。」

「私は酒はいけず、相手は出来ませんから、皆さんの車座を、よく蚊帳の中から見ては寝ました。一時は随分賑^{にぎやか}でした。」

まあ、入^{いり}かわり立^{たち}かわり、十日ばかり続いて、三人四人ずつ参りましたが、この頃は、ぼったり来なくなりましてんです。」

「と申す事でございますな。ええ、時にその入り交^{かわ}り立ち交りにつけて、何か怪しい。」

と言いかけて偶と見返った、次の室と隔ての襖は、二枚だけ山のように、行燈あんどうの左右に峰を分けて、隣となりぐに国までは灯が届かぬ。

心も置かれ、後髪も引かれた状さまに、僧は首に気を入れて、ぐつと硬くなつて、向直つて、

「その怪しいものの方でも、手をかえ、品をかえ、怯おびやかす。――

何かその……畳がひとりでに持上りますそうではありますが、まったくでございますかな。」

熟じつと視みて聞くと、また俯うつむ向いて、

「ですから、お話しも極きまりが悪い、取留めのない事だと申すんです。」

「ははあ、」

と胸を引いて、僧は寛いだ状くつろに打笑い、

「あるいはそうであろうかにも思いましたよ。では、ただ村のものが可いい加減な百物語。その実、嘘うそ説なのでございますので？」

「いいえ、それは事実です。畳は上あがりますとも。貴僧あなた、今にも動くかも分りません。」

「ええ！や、それは、」

と思わず、膝を迂すべらした手で、はたはたと圧おさえると、爪も立ちそうにない上じょうどこ床の固い事。

「これが、動くでございますか。」

「ですから、取留めのない事ではありませんか。」

と静しずかに云うと、黙もくつて、ややあつて瞬またたきして、

「さよう、余り取留めなくもないようでございます。すると、坐まつているものはいかがな儀ぎに相成あひなりましようか。」

「騒さわがないで、熟じつとしていさえすれば、何事なにこともありません。動くうごくと申まをして、別べつに倒さかに立たつて、裏返うらかへしになるといふんじやないのですから、」

「いかにも、まともにそれじや、人間にんげんが縁えんの下したへ投な込まれる事ことになりますものな。」

「そうですね。そうなった日には、足の裏うらを膠にかわで附く着つけておかねばなりません。」

何なにともないから、お騒さわぎなさるなと云いつても、村むらの人が肯きかな

いで、畳のこの合せ目が、」

と手を支ついて、ずつと掌てのひらをすべにらしながら、

「はじめに、長い三角だの、小さな四角に、縁ふちを開けて、きしきしと合つたり、がらがらと離れたり、しかし、その疾はやい事は、稲妻のように見えます。

そうするともう、わつと言つて、飛ぶやら匆はねるやら、やあ！と踏張ふんばつて両方の握にぎりこぶし拳こぶしで押えつける者もあれば、いきなり三宝火箸ひぼしでも火吹竹でも宙で振廻す人もある——まあ一人や二人は、きつとそれだけで縁から飛出して遁にげて行ゆきます。」

「どたん、ばたん、豪い騒ぎえら。その立騒ぐのに連れて、むくむくむくむく、と畳を、貴僧あなた、四隅から持上げますが、二隅ずつ、どん、どん、順に十畳敷を一時いつときに十ウ、下から握拳を突出すようです。それ毛だらけだ、わあ女の腕だなんて言いますが、何、その畳の隅が裏返るように目まぐるしくかえ翻るんです。

もうそうになると、気の上あがつた各自てんでが、自分の手足で、茶碗を蹴け飛ばす、徳利とっくりを踏倒す、海嘯つなみだ、と喚わめきましよう。

その立廻りで、何かの拍子にや怪我もします、踏切ったくらいでも、ものがものですから、片足切られたほどに思っ、それがために寝ついたのもあるんだそうで。漁師だとか言いましたつけ。

一人、わざわざ山越えて浜の方から来たんだつて、怪物に負けないまじない禁厭だ、とえいの針を顱鉄はちがねがわりに、手拭てぬぐいに畳込んで、うしろ顱はちまき巻まきなんぞして、非常な勢いきおいだったんですが、猪口ちよこの欠かけの踏抜きふみぬきで、痛いたみが甚ひどい、お崇たたりだ、と人に負おぶさつて帰りました。

その立廻りですもの。灯あかりが危あやいから傍わきへ退のいて、私はそのたびランプに洋燈おきを圧おさえ圧おさえしたんですがね。

坐まつてる人が、ほんひつくりかえとにねだ転覆ひっくりかえるほど、根太ねだから揺れるのでない証拠しやうこには、私が氣きを着きけています洋燈ランプは、躍はりはためくその畳じつの上うでも、静しづとして、ちつとも動きはせんのです。

しかしまた洋燈ばかりが、笠かさから始はめて、ぐるぐると廻まつた事ことがありました。やがて貴僧あなた、風車かざぐるまのように舞まう、その癖くせ、場ば

所は変わらないので、あれあれと云う内に火が真丸まんまるになる、と見ている内、白くなつて、それに蒼味あおみがさして、茫ぼうとして、熟じつと据すわる、その厭いやな光つたら。

映る手なんざ、水へ突つっこ込んでるのように、畝うねつたこの筋までが蒼白く透通つて、各自てんでの顔は、皆みんなその熟した真桑瓜まくわうりに目鼻がついたように黄色くなつたのを、見合せて、呼吸いきを詰める、とふわふわと浮いて出て、その晩の座がしらという、一番強がった男の膝へ、ふつと乗つたことがあるんですね。

わつと云うから、騒さわいじや怪我をしますよ、と私が暗い中で声を掛けたのに、猫化ねこばけだ遣やっつけろ、と誰だか一人、庭へ飛出して遁にげながら喚わめいた者がある。畜生、と怒鳴つて、貴僧、危いの何

のじやない！

※と明ぼつあかるくなつて旧もとの通洋燈とつやうとうが見えると、その膝ひざに乗られた男が

——こりや何なにです、可いい加減かへんな年配ねんぱいでした——かつて水兵みずへいをした事ことがあるとか云いつて、かねて用意よういをしたものらしい、ドギドギする小刀ナイフを、火屋ほやの中から縦たてに突刺つきしてるじやありませんか。」

「大變だいへんで、はあ、はあ、」

「ト思いうと一呼い吸きに、油壺あぶらかをかけて突つ壊こわしたもんだから、流ながれるような石油せつ油で、どうも、後二日あとふたひばかり弱よわりました。」

その時は幸さいに、当人あたひ、手に疵きずをつけただけ、勢いきおいで壊こわしたから、火はそれなり、ばつたり消けえて、何なにの事こともありませんでした、もしやの時ときと、皆みんなが心掛こころかけておきました、蠟燭ろうそくを点つけて、跡始あと

末に掛^{かか}ると、さあ、可訝^{おかし}いのは、今の、怪我で取落した小刀^{ナイフ}が影も見えないではありませんか。

驚きました。これにや、皆^{みんな}が貴僧^{あなた}、茶釜^{ちやがま}の中へ紛れ込んで祟^{たた}るとか俗に言う、あの蜥蜴^{とかげ}の尻尾^{しっぽ}の切れたのが、行方知れずになつたより余程^{よつほど}厭な紛失もの。襟へ入つていはしないか、むずむずするの、禪^{ふんどし}へささつちやおらんか、ひやりとするの、袂^{たもと}か、裾^{すそ}か、と立つ、坐る、帯を解きます。

前にも一度、大掃除の検査に、階子^{はしご}をさして天井へ上つた、警^おまわり^{サアベル}の洋剣^{サアベル}が、何かの拍子^{さかさま}に倒になつて、錨^{つばもと}元が緩んでいたか、すつと拔出^{ぬけた}したために、下に居たものが一人、切られた事がある座敷だそうで。

外のものとは違う。切物きれものは危い、よく探さつしやい、針を使つてさえ始める時と了しまう時には、ちゃんと数を合わせるものだ。それでもよく紛失するが、暈の目にこぼれた針は、奈落へ落ちて地獄の山の草に生える。で、餓鬼が突刺される。その供養のために、毎年六月の一日は、氷室ひむろの朔日ついたちと云つて、少い娘わかが娘同士、自分で小鍋こなべ立ての飯まごとをして、客にも呼ばれ、呼びもしたものだに、あのギラギラした小刀ナイフが、縁の下か、天井か、承塵なげしの途中か、在ありどころ所が知れぬ、とあつては済まぬ。これだけは夜一夜よっぴてさがせ、と中に居た、酒のみの年寄が苦り切つたので、総立ちになりました。

これは、私だつて気味が悪かつたんです。」

僧はただ目で応え、目で頷く。

二十四

「洋燈ランペの火でさえ、大概度胆ドギモを抜かれたのが、頼みに思つた豪傑は負傷するし、今の話でまた変な気になる時分が、夜も深々と更けたでしよう。

どんな事で、どこから抛ほうり投げまいものでもない。何か、対手あいての方も斟しん酌しゃくをするか、それとも誰も殺すほどの罪もないか、命に別条はまず無かろうが、怪我は今までも随分ある。

さあ、捜す、となると、五人の天窓あたまへ燭しよく台だいが一つです。蠟ろう

の継ぎ足しはあるにして、一時いっときに燃すと翌方あけがたまでの便たよりがないので、手分けをするわけには行きませぬ。

もうそうなりますとね、一人じゃ先へ立つのも厭いやがりますから、そこで私が案内する、と背後あとからぞろぞろ。その晩は、鶴谷の檀だんなでら那寺なつしよの納所なつしよだ、という悟った禅坊さんが一人。変化へんげ出でよ、いっかつ一喝いっかつで、という宵の内の意気組で居たんです。ちつとお差合いですね、」

「いえ、宗旨違いでございます、」
と吃驚びっくりしたように莞爾にっこりする。

「坊さんまじりその人数にんずで。これが向うの曲角から、突当りのはばかりへ、廻まわりえん縁えんになつています。ぐるりとその両側、雨戸を

開けて、沓脱くつぬぎのまわり、縁の下を覗のぞいて、念のため引返して、また便所はばかりの中まで探したが、光るものは火屋ほやの欠かけらも落ちてはいません。

じゃあ次の室まを……」

と振返つて、その大なる襖おおきを指ふすました。

「と皆みんなが云うから、私は留めました。

ここを借りて、一室ひとつまだけでも広過ぎるから、来てからまだ一度も次の室まは覗のぞいて見ない。こういう時開けては不可いけません。廊下から、厠かわやまでは、宵から通つた人もある。転倒てんどうしている最中、どんな拍子で我知らず持つて立つて、落して来ないとも限らんから、念のため捜したものの、誰も開けない次の室まへ行つてよう

では、何か^{かく}が秘したんだらうから、よし有つたにした処で、先方^{さき}にもしその気があれば、怪我もさせよう、傷もつけよう。さて無い、となると、やっぱり気が済まんのは同一道理^{おんなじ}。押入も覗^{のぞ}け、棚も見ろ、天井も捜せ、根太板をはがせ、となつては、何十人でもかかつた処で、とてもこの構えうち隅々まで隈^{くま}なく見尽される訳のものではない。人足の通つた、ありそうな処だけで切上げたが可^いいでしよう——

それもそうか、いよいよ魔隠しに隠したものなら、山だか川だか、知れたものではない。

まあ、人間業^{わざ}で叶^{かな}わん事に、断念^{あきら}めは着きました^らが、危険^{けん}な事には変わりはないので。いつ切^{きつ}尖^{さき}が降つて来ようも知れませ

ん。ちつとでも楯たてになるものと、皆みんなが同一心おなじです。言合あわせたように順じゆん々に……前さきへ御免ごうむを被かりますつもりで、私が釣かつておいた蚊帳かへ、総勢そうせい六人で、小さくなつて屈かみました。

変へにおしおきでも待つてるようになお不気味ふきみでした。そうか、と云いつて、夜夜よるよる中なか、外ぐわいへ遁出にげだすことは思いも寄よらず、で、がたがた震ふるえる、突伏つっぷす、一人ひとりで寝ねてしまつたのがあります、これが一番いちばん可よいのです。坊ぼう様さんは口くちの裏うらで、頻しきりにぶつぶつと念ねんじています。その舌したの纏もつれたような、便たよりのない声を、蚊あの唸うなる中に聞ききながら、私わたしがうとうとしかけました時ときでした。密そつと一人ひとりが揺ゆぶり起おちて、

(聞きえますか、)

と言います。

(ココだ、ココだ、と云う声が、)と、耳へ口をつけて囁くささやんで
す。それから、それへ段々、また耳移しに。

(失物うせものはココにある、というお知らせだろう、)

(どうか、)と言う、ひそひそ相談ばなし。

耳を澄ますと、蚊帳越の障子のようでもあり、廊下の雨戸のよ
うでもあり、次の間と隔ての襖ふすまぎわ際……また柱の根かとも思わ
れて、カタカタ、カタカタと響く——あの茶立虫ちやたてむしとも聞えれば、
壁の中で蝙蝠こうもりが鳴くようでもあるし、縁の下で、蟄ひきがえるが、コトコ
トと云うとも考えられる。それが貴僧あなた、気の持ちようで、ココ、
ココ、ココヨとも、ココト、とも云うようなんです。

自分のだけに、手を繻帯ほうたいした水兵の方が、一番に蚊帳を出ました。

返す気で、在所ありかをおつしやるからは仔細しさいはない、と坊さんがまた這出して、畳に擦附けるように、耳を澄ます。と水兵の方は、真まんなか中で耳を傾けて、腕組をして立つてなすつたつけ。見当がついたと見えて、目で知らせ合つて、上下うへしたで頷うなずいて、その、貴僧あなたの背後うしろになつてます、」

「え！」

と肩越かちに淵ふちを差覗さしのぞくがごとく、座をずらして見返りながら、

「成程。」

「北へ四枚目の隅の障子を開けますとね。溝へ柄を、その柱へ、

切きつ尖さきを立掛けてあつたらうではありませんか。」

二十五

「それツきり、危うございますから、刃物は一切いっせつ嚴禁にしたんです。

遊あそびに来て下さるも可よし、夜伽よとぎとおつしやるも難あり有がし、ついでに狐こ狸りの類たぐいなら、退治しようも至極ごくごもつともだけでも、刀ナイフ、小刀、出刃庖丁、刃物と言わず、槍やり、鉄砲、——およそそういうものは断りました。

私も長い旅行です。随分どんな処でも歩ある行き廻ります考えで。

いぎ、と言や、投出して手を支くまでも、短刀を一ひとふり口持つています——母の記念で、峠を越えます日かたみの暮なんぞ、随分それがために気丈夫なんですが、謹つつしみのために桐油とうゆに包んで、風呂敷の結び目へ、しつかり封をつけておくのですが、

「やはり、おのずから、その、拔出すでございますか。」

「いいえ、これには別条ありません。盗ぬす人でも封印のついたものは切らんと言います。もつとも、怪物ばけもの退治に持つて見えます

刃物だつて、自分で抜かなければ別条はないように思われますね。それに貴僧あなた、騒動さわぎの起居たちいに、一番気がかりなのは洋燈ランプですから、宰八爺さんにそう云つて、こうやつて行燈あんどうに取替えました。」

「で、行燈は何事も、」

「これだつて上ります。^{あが}」

「あの上りますか。宙へ？」

時に、明の、行燈のその皿あたりへ、仕切つて、うつむけに伏せた手が白かつた。

「すう、とこう、畳を離れて、」

「ははあ、」

とばかり、僧は明の手のかげで、^{ともしび}燈が暗くなりはしないか、と危^{あやぶ}んだ目色^{めつき}である。

「それも手をかけて、^{おさ}圧えたり、据えようとしますと、そのはずみに、油をこぼしたり、台ごとひっくりかえしたりします。障^{さわ}らないで、^{じっ}熟と柔順^{おとなし}くしてさえいれば、元の通りに^{すわりなお}据直^{すわりなお}つて、

夜が明けます。一度なんざ行燈が天井へ附着くつつきました。」

「天……井へ、」

「下に蚊帳が釣つてありますから、私も存じながら、寝ていたのを慌てて起上つて、蚊帳越にふらふら釣り下つた、行燈の台を押えようと、うっかり手をかけると、誰か取つて引上げるように鴨か居もいを越して天井裏へするりと入ると、裏へちやんと乗つかりました。もう堆うずたかい、鼠の塚か、と思う煤すすのかたまりも見えれば、遙はるかに屋根裏へ組上げた、柱の形も見える。

可訝おかしいな、屋根裏が見えるくらいじや、天井の板がどこか外れた筈はずだが、とふと気がつくつと、棧ゆるが弛ゆるんでさえおりますまい。

板を抜けたものか知らん、余り変だ、と貴僧あなた。

ここで心が定まりますと、何の事もない。行燈あんどうは蚊帳の外の、宵から置いた処にちやんとあつて、薄ぼんやり紙が白けたのは、もう雨戸の外が明方であつたんです。」

「その晩は、お一人で、」

「一人です、しかも一昨晚。」

「一昨晚？」

と、思わずまたぎよつとする。

「で、何でございますか、その夜よとぎれん伽連は、もうそれ以来懲りて来なくなつたんでございますかな。」

「お待ち下さい、トあの、西瓜すいかで騒いだ夜は、たしかその後でし
たつけ。」

何、こりや詰つまらない事ですけれども、弱よつたには弱よりましたよ。
 ……

確か三人づれで、若い衆しゆが見えました。やつぱり酒を御持参で。
 大分お支度があつたと見えて、するめの足を嚙かじりながら、冷酒ひやざけ
 を茶碗で煽あおるようなんじやありません。

竹の皮包みから、この陽氣じや魚うおの宵越しは出来ん、と云つて、
 焼蒲鉾やきかまぼこなんか出して。

旨うまうございましたよ、私もお相伴しましたつけ、
 と悠々と迫らぬ調子で、

「宵には何事もありませんでした。可いい塩梅あんばいな酔心よいごこち地で、四よ
も方山もやまの話をしなから、蠡いなご一ツ飛んじや来ない。そう言や一体蚊も

居おらんが、大方その怪物ばけものが餌食えじきにするだろう。それにしちや吝けちな食物くいものだ——何々、海の中でも親方となるとかえつて小さい物を餌えさにする。鯨くじらを見ろ、しこ鰯いわしだ、なぞと大口を利いて元気でしたが、やがて酒はお積つもりになる、夜が更けたんです。

ここでお茶と云う処ところだけれど、茶じや理に落ちて魔物が憑つけ込む。酔醒よいざめにいいもの、と縁側から転がし出したのは西瓜です。聞くと、途中で畑盗人どろぼうをして来たんだそうで——それじゃかえつて、憑込つもうではありませんか。」

「手並を見る、狐でも狸でも、この通りだ、と刃物の禁断は承知
 ですから、小刀ナイフを持つちやおりません、拳固こずもうで、貴僧あなた。

小相撲こずもうぐらい恰幅かつぶくのある、節くれだった若い衆でしたが……」
 場所がまた悪かった。――

「前夜、ココココ、と云つて小刀ナイフを出してくれたと同一おなじ処、敷居
 から掛けて柱へその西瓜すいかを極きめて置いて、大上段おおじょうだんです。

ポカリ遣やつた。途端すきに何とも、凄まじい、石油缶すきが二三十打ぶつ
 かったような音が台所の方で聞えたんです。

唐突だしぬけですから、宵に手ぐすねを引いた連中も、はあ、と引呼ひき
 吸いきに魂たまを引攫ひきさらわれた拍子はねあがに――飛びました。その貴僧あなた、西瓜すいかが、
 ストンと若い衆の胸へ刎はねあが上あがつたでしょう。

仰向あおもむけに引くりかえると、また騒動ひっ。

それ、肩を越した、ええ、足へ乗つかる。わああ！裾まつへ纏まつわる、火の玉じや。座頭の天窓あたまよ、入道首よ、いや女の生首だつて、可いい加減な事ばかり。夕顔の花なら知らず、西瓜が何、女の首に見えるもんです。

追掛おっかけるのか、逃廻るのか、どたばた跳飛ぶ内、ドンドンドンと天井を下から上へ打抜くと、がらがらと棟木むなぎが外れる、戸障子が鳴響く、地震だ、と突伏つっぷしたが、それなり寂しんとして、静しずかになつて、風の音もしなくなりました。

ト屋根に生えた草の、葉と葉が入いりまじ交まじつて見え透くばかりに、月が一ツ出ています。——今の西瓜が光るのでした。

森は押被おつかぶさつておりますし、行燈あんどうはもとよりその立廻りたてまわりで打倒ぶったおれた。何か私どもは深い狭い谷底いすくに居窘いすくまつて、千仞せんじんの崖がきの上に月が落ちたのを視ながめるようです。そう言えば、櫂けの枝やきに這はいかかつて、こう、月の上へ蛇へびのように垂たれかかったのが、鳶つたの葉はか、と思うと、屋根一面に瓜畑うりばたになって、鳴子繩なりじまが引いてあるような気きもします。

したたかな、天狗てんぐめ、とのぼせ上あがつて、宵よに蚊あぶいぶしに遣やつた、杉すぎツ葉はの燃残もみりを取とつて、一人、その月へ投げつけたものがありました。

もろいの、何なにの、ぼろぼろと朽木くちのようにその満月まんげつが崩くずれれると、葉末はつの露つゆと一つひとつになって、棟むねの勾配こうばいを迂すべり落ちて、消くえたは可い

いが、ぼたりぼたりしづく雫がし出した。頸えりと言わず、肩と言わず、降りかかつて来ましたが、手を当てる、とべとりとして粘る。嗅かいでみると、いや、貴僧あなた、悪甘い匂と言ったら。

夜深しに汗ばんで、蒸むしむし々々して、咽喉のどの乾いた処へ、その匂い。
ちなまぐさ血ち腥ないより堪たまりかねて、縁側を開けて、私が一番に庭へ出ると、皆みんなも跣はだし足で飛下りた。

驚いたのは、もう夜が明けていたことです。山の巔いただきの方は蒼あおく
 なつて、麓ふもとへ靄もやが白んでいました。

不思議な処へ、思いがけない景色を見て、和蘭陀オランダへ流された、と云うのがあるし、堪らない、まず行燈あんどうをつけ直せ、と怒鳴つたのが居る。

屋根のその辺だ、と思う、西瓜のあとには、烏が居て、コトコトと嘴はしを鳴らし、短夜みじかよの明けた広縁には、そろそろ夥おびただしい、褐かば色の黒いのと、松虫鈴虫のようなのが、うようよして、ざつと障子へ駆かけ上あがって消えましたが、西瓜の核たねが化なったんですって。

連中は、ふらふらと二日酔いのような工合ぐあいで、ぼんやり黒門を出て、川べりに帰りました。

橋の処で、杭くいにかかつて、ぶかぶか浮いた真蒼まっさおな西瓜を見て、それから夢中で、遁にげたそうです。

昼過ぎに、宰八が来て、その話。

私はその時分までぐっすり寝ました。

この時おかしかったのは、爺さんが、目覚しに茶を一つ入れて

やるべいつて、小まめに世話をして、佳いい色に煮花が出来ました
 が、あいにく西瓜も盗んで来ない。何かないか、と考えて、有る
 ——台所に糖味噌が、こりや私に、と云つて一々運ぶも面倒だか
 ら、と手の着いたのじやあるが、桶おけごと持つて来て、時々爺さん
 が何かを突つ込んでおいてくれるのでした。

一人だから食べ切れないで、直じきつき過ぎる、と云つて、世話
 もなし、茄子なすを蒂へたごと生しょうのもので漬けてありました。可いい漬つかり加
 減だろう、とそれに気が着いて、台所へ出ましたつけ。

(お客様あ、)

(何だい。)

(昨夜ゆうや凄せつじい音がしたと言わしつけね、何にも落おちたものはね

えね。)

って言いながら、やがて小鉢へ、丸ごと五つばかり出して来ました。

薄お納戸の好い色で。」

二十七

「青葉の影の射す^さ処、白瀬戸の小鉢も結構な青磁の菓子器に装^もつたよう^はで、志の美しさ。

箸^{はし}を取ると、その重^{かさ}な^なつた茄子^{なす}が、あの、薄皮の腹のあたりで、グツ、グツ。

一ツ音を出すと、また一つグツ、もう一つのもググ、ググと声を立てるんですものね。

変な顔をして、宰八が、

（お客様、聞えるかね。）

（ああ鳴くとも。）

（ちんじちようようだ、此奴、）

と爺じいさん様が鉈なたまめ豆まめのような指さきの尖さきで、ちよいと押すと、その圧おされたのがグググ、手をかえるとまた他ほかのがググ。

心あつて鳴くようで、何だか上へたになった、あの帯おびの取手てまで、小さな角つのらしく押立おったつたんです。

また飛出とさない内に、と思つて、私は一ツ嚙かじつたですよ。」

「召食めしあがったか。」

と、僧は怪訝けげんが顔で、

「それは、お豪えらい。」

「何聞く方の耳が鳴るんでしようから、何事ありません、茄子なすびの鳴くわけは無いのですから。」

それでも爺さんは苦切にがりきつて、少わかい時にや、随分悪物食あくものぐいをし

たもので、葬なすい料で酒エ買つて、犬の死骸しがいなら今でも食うが、茄子なすの鳴くのは厭だ、と言います。

もつとも変なことは変ですが、同じ気味の悪い中でも、対手あいてが茄子なすびだけに、こりやおかしくつて可よかつたですよ。」

「茄子なすびならば、でございしますが、ものは茄子なすでも、対手あいては別にござい

ございましたよう。」

明は俯向うつむいて莞爾にっこりした、別に意味のない笑わらいだった。

「で、そりや昼間の事でございますな。」

「昨日の午後ひるすぎでした。」

「昼間からは容易でない。」

と半ばつふや呟つぶやくがごとくに云って、

「では、昨夜あたりはさぞ……」

と聞く方が眉ひそを顰ひそめる。

「ええ、酷ひどうございました、どうせ、夜が寝られはしないんです

から、」

「それでお寢やつれなさるのじゃ、貴下あなた、お顔の色がとんだ悪い……

：

茶店の婆さんが申したも、その事でございます。

ただいま

唯今お話を伺いました。そんなこんなで村の者も行かなくなり、爺様も夜は恐がって参りませんから、貴下の御容子が分らないに因つて、家つきの仏を回向えこうかたがた、お見舞申してはくれまいか、と云うに就いて、推参したのでございますが、いや、何とも驚きました。

いずれ御厄介に相成らねばなりませんわたくしが、私もどうか唯今のその茄子の鳴くぐらいな処で、御容赦が願いたい。

どこと云つて三さん界宿がいなし、一泊御報謝に預る気で参つたわけたたりで。なかなか家つきの幽霊、崇ものけ、物怪を濟度しようなどという

道德思いも寄らず。実は入道名なさえ持ちません。手前勝手、申訳のないお詫びに刺つたような坊主。念仏さえ碌ろくに真心からは唱えられんでございまして、御祈禱ごきとうそつ僧などと思われましては、第一、貴下の前へもお恥かしゆうございしますが、いかがでございましょう。お宿を願ひましても差支えはないでございましょうか。いくらか覚悟はして参りましたが、目まのあたりお話を伺ひましては、ちと二の足でございしますが。」

「一人でも客がありますと、それだけ鶴谷では喜びますそうです。持主の本宅が喜びますものを、誰に御遠慮いが入りますものですか。私もお連つれがあつて、どんなに嬉しいか知れません。」

「そりや、鶴谷殿はじめ、貴下の思召しはさように難有ありがとうござい

ましても、別にその……ええ、まず、持主が鶴谷としますと、この空屋敷の御支配でございますな、——その何とも異様な、あの、その、」

「それは私も御同然です。人の住むのが気に入らないので荒れるのだろうと思いますが。

そこなんです、あなた貴僧。さから逆いさえしませんければ、あんど暈も行燈も

何事もないのですもの。戸障子に不意に火が附いてそこいらめらめら燃えあがる事がありましたも、慌てて消す処は破れ、水を掛けた処は濡れますが、それなりの処は、後で見ますと濡れた様子もないのですから。

座敷だつていくらもあります、貴僧、」

とふと心づいたように、

「御一所でお煩うるさければ、隣のお座敷へいらつしやい。何か正体を見届けようなぞと云つては不可いませんが、鶴谷が許したお客僧が、何も御遠慮には及びません。」

ただすらりと開かないで、何かがおお圧おさえてでもいるようでしたら、お見合せなさいまし。逆さうと悪さいんですから。」

二十八

「なかなか、逆さらいますどころではございませぬ、座敷好みなんぞして可いいものでございますか。」

あの襖ふすまを振向むかいて熟じつと視みろ、とおつしやったつて、容易やすにやそ
 ちらも向けません次第しだいで、御覽ごらんの通り、早はやや固かたくなつております。
 お話わにつけて申ましますが、実じつは手前てまへもこの黒門くろくを潜くぐりました時
 は、草くさに支つかえて、しばらく足あしが出でませんでございました。

それと申ますが、ままず庭口にわぐちと思おもう処ところで、キリキリトーンと、余程よほど
 その大轆轤おおろくろの、勿釣瓶はねつるべを汲くみ上げますよような音ねがいたす。

ももつとも曰いわくづきの邸やしきながら、貴下あなたお一方いっぺんはままずともかくもい
 ららつしやる。人ひとが住すめば水みづも要いららうで、何なにも釣瓶つるべの音ねが不思議ふしぎと
 云いうでは、道理上だうりじやう、ここりや無ないのでありありまするが、婆ばあさんさんに聞きき
 ました心積こころづもり、学生がくせいの方が自炊じちをしてお在いと云いえば、土瓶つづみか
 徳利とくに汲くみんで事ことは足たりる、と何なにとなく思おもつてでもおおりましたせ

いか、そのどうも水を汲む音が、馴なれた女中衆おなごしゆでありそうに思われしました。

ト台所の方を、どうやら嫺娜すらりとした、脊の高い御婦人が、黄たそが昏れに忙しい裾捌すそさばきで通られたような、ものの氣勢けはいもございませす。

何となく賑にぎやかな様子が、七輪に、晩のお菜かずでもふつつ煮えていようという、豆腐屋さ——ん、と町方ならば呼ぶ声のしそうな様子で。

さては婆さんに試されたか、と一いっ旦たんは存じましたが、こう笠を傾けて遠くから覗のぞ込みました、勝手口の戸からかけて、棟へ、高くからすうり鳥からすうり瓜の一杯にからんだ工合ぐあいが、何様、何ヶ月も閑切しめきり切ら

しい。

ござつたかな、と思ひながら、くすぐ擦つたいような御門内の草を、
そつ密とふ蹈んで入りますと、春さきはさぞきれい綺麗でございましょう。一
 面にげんげ紫雲英が生えた、その葉の中へ伝わつて、きれぎれ断々ながら、一
とすじ条、あお蒼ずんだ明るい色のものが、は這つたように浮いたように落
 ちています。上へさした森の枝を、月が漏る影に相違は無さそう
 なが、何となく婦人の黒髪、その、丈長く、あしもと足許に光るようで。
 変にまた跨ぎ心地が悪うございますから、よ避けて通ろうといたしま
 すと、右の薄光りの影の先を、ころころと何か転げる、たちまち
 顔があらわ露れたようでもございましたつけ、よ熟く見ると、うさぎ兎なんです。

ところでその蛇のような光る影も、むき向かわつて、わたくしまた私の出途

へ映りましたが、兎はくるくると寝転びながら、草の上を見附けの式台の方へ参る。

これが反対だと、旧の潜門へ押出されます処でございまして。強いて入りますほどの度胸はないので。

式台前で、私はまず挨拶をいたしたでございませぬ。

主もおわさば聞き召せ、かくの通りの青道心。何を頼みに得脱成仏の回向いたそう。何を力に、退散の呪詛を申そう。御姿を見せたまわば偏に礼拝を仕る。世にかくれます神ならば、

念仏の外他言はいたさぬ。平に一夜、御住居の筵一枚を貸したまわれ……」

——旅僧はその時、南無仏と唱えながら、漣のごとき杉の木目

の式台に立向い、かく誓つて合掌して、やがて笠を脱いで一揖いちゆうしたのであつた。――

「それから、婆さんに聞きました通り、壊れ壊れの竹垣について手探りに木戸を押しますと、直ぐに開きましたから、頻しきりに前刻さつきの、あの、えへん！えへん！せきばらい咳せきをしながら――酷ひどくなつておりますな――芝生を伝わつて、夥おびただしい白粉おしろいの花の中を、これへ。お縁側からお邪魔をしましたました。

あの白粉の花は見事です。ちらちら紅色べにのが交つて、咲いていますが、それにさえ、貴方あなた、法衣ころもの袖さわの障さわるのは、と身体からだをすぼめて来ましたが、今も移うつり香ががして、憚はばかり多い。

もと花畑であつたのが荒れましたらうか。中に一本、見上げる

ような丈のびた山百合の白いのが、うつむいて咲いていました。
いや、それにもまた慄然ぞっとしたほどでございますから。

何事がございますでしょうか、自力を頼んで、どうのこうのと申すようなことは夢にも考えておりません。

しかし貴下あなたは、唯今うけたまわりましたような可怖おそろしい只中ただなかに、よく御辛抱なさいます、実に大胆でおいでなさる。」

「私くらい臆おくびよう病なものはありません。……臆病で仕方がないから、なるがまかせに、抵抗しないで、自由になっているのです。」

「さあ、そこでございます。それを伺いたいのが何より目的めあてで参りました。何か、その御研究でもなさりたい思おぼしめし召めしで。」

「どういたしまして、私の方が研究をされていても、こちらで研究なんぞ思いも寄らんのです。」

「それでは、外に、」

「ええ、望み——と申しますと、まだ我ががあります。実は願事があつて、ここにこうして、参籠さんろう、通夜をしておりますようなものです。」

二十九

「それが貴僧あなた、前刻さつきお話をしかけました、あの手毬てまりの事なんです

。」

「ああ、その手毬が、もう一度御覧なさりたいので。」

「いいえ、手毬の歌が聞きたいのです。」

と、うつとりと云った目の涼しさ。月の夢を見るようなれば、
変った望み、と疑いの、胸に起る雲消えて、僧は一ひとひざ膝進めたの
である。

「大空の雲を当てにいざことなく、海があれば渡り、山があれば
越し、里には宿つて、国々を歩ある行きますのも、詮せんずる処、ある意
味の手毬唄を……」

「手毬唄を。……いかな次第でございます。」

「夢とも、現うつつとも、幻とも……目に見えるようで、口には謂いえぬ
——そして、優しい、懐なつかしい、あわれな、情のある、愛の籠こもつた、

ふつくりした、しかも、清く、涼しく、悚然とする、胸を搔撈
 るような、あの、恍惚となるような、まあ例えて言えば、芳し
 い清らかな乳を含みながら、生れない前に腹の中で、美しい母の
 胸を見るような心持の——唄なんです、その文句を忘れたので、
 命にかけて、憧憬あこがれて、それを聞きたいと思えます。」「
 この数分時の言の中に、小次郎法師は、生れて以来、聞いただ
 けの、風と水と、鐘の音、楽、あらゆる人の声、虫の音ね、木の葉
 の囁きささやまで、稲妻のごとく胸の裡うちに繰返し、なおかつ覚えただけ
 の経文を、颯さつと金字紺泥こんじこんでいに瞳に描いて試みたが、それかと思
 うのは更に分らぬ。

「して、その唄は、貴下あなたお聞きになったことがございませうか

。「小児こどもの時に、亡くなった母親が唄うたいましたことを、物心覚えた最後の記憶に留めただけで、どういふのか、その文句を忘れたんです。

年を取るに従うて、まるで貴僧あなた、物語で見る切ない恋のように、その声、その唄が聞きたくツてなりません。

東京のある学校を卒業でますのを待まちかねて、故郷へ帰つて、心当りの人に尋ねましたが、誰のを聞いても、どんなに尋ねても、それと思うのが分らんのです。

第一、母親の姉ですが、私の学資の世話をしてくれず、叔母がそれを知りません。

の娘です。
 ト夢のように心着いたのは、同一町おなじに三人あつた、同一年おなじごろ

(産んだその子が男の児こなら、

京へ上のぼせて狂言させて、

寺へ上てぼせて手て習ならさせて、

寺の和尚が、

道楽和尚で、

高い縁から突落されて、

箒こうがい落し

小こまくら枕落し、)

と、よく私を遊ばせながら、母も少わかかつた、その娘たちと、毬

も突き、追羽子おいはごもした事を現うつつのように思出しましたから、それを捜せば、きっと誰か知っているだろう、と気の着いた夜半よなかには、むつくりと起きて、嬉しさに雀躍こおどりをしたんですが、貴僧あなた、その中うちの一人は、まだ母の存命の内に、雛祭ひなの夜なくなりました。それは私も知っている――

一人は行方が知れない、と言います……

やっと一人、これは、県の学校の校長さんの処へ縁づいているという。まず可よし、と早速訪ねて参りましたが、町はずれの侍町、小流こながれがあつて板塀続きの、邸ごとに、むかし植えた紅梅が沢山あります。まだその古樹ふるきがちらほら残つて、真盛まっさかりの、朧月おぼろづ夜きよの事でした。

今貴僧あなたがここへいらつしやる玄関前で、紫雲英げんげの草を潜くぐる兔を見たとおつしやいました、」

「いや、肝心のお話の中うちへ、お交ぜ下すつては困ります。そうは見えましたものの、まさかかような処へ。あるいはその……猫であつたかも知れません。」

「背後うしろが直ぐ山ですから、ちよいちよ見えますそうです、兎でしょう。」

が、似た事のありますものです——その時は小狗こいぬでした。鈴がついておりましたつけ。白垢むくの真白まっしろなのが、ころころと仰向あおむけに手をじやれながら足許あしもとを転がって行きゆます。夢のようにそのあとへついて、やがて門札を見ると指した家で。

まさか奥様おくさんに、とも言えませんかから、主人に逢つて、——意中を話しますと——

(夜中何事やちゆうです。人を馬鹿にした。奥は病気だからお目には懸かれませんか。)

と云つて厭いやな顔をしました。夫人が評判の美人だけに、校長さんは大した嫉妬深いという事で。」

三十

「叔母がつくづく意見をしました。(はじめから彼家あそこへ行くゆと聞いたら遣やるのじゃなかつた——黙つておいでだから何にも知らず

に悪い事をしたよ。さきじやおさななじみ幼馴染だと思ひます、手毬唄を聞くなぞ、となおよくない、そんな事が世間へ通るかい、）とこうです。

母親の友達を尋ねるに、色氣の嫌疑はおかしい、と聞いて見ると、何なかに、女の児こはませています、それに紅あかい手絡てがらで、美しい髪なぞ結つて、容かたちづくつてゐるから可いい姉さんだ、と幼おさなごころ心に思つたのが、二つ違い、一つ上、亡くなつたのが二つ上で、その奥さんは一ツ上のだそうで、行方の知れないのは、分らないそうでした。

事が面倒になりましたね、その夫人の親里から、叔母の家へ使つかいが来て、娘御は何も唄なんか御存じないそうで、ええ、世間体が

ございますから以来は、と苦り切つて帰りました。

勿論病気でも何でもなかつたそうです。

一月ばかり経たつて、細かに、いろいろと手毬唄、子守唄、童唄わらべ、なんぞ、百幾つというもの、綺麗に美しく、細こまこま々とかいた、文が来しました。

しまいへ、紅べにで、

——嫁入りの果敢はかなさを唄いしが唄の中にも沢山におわしま

し候——

と、だけ記してありました。……

唯ただいま今も大切にして持つてはいますが、勿論、その中に、私の望みの、母の声のありません。

さあ、もう一人……行方の知れない方ですが……

またこれが貴僧あなた、家を越したとか、遠国へ行つたとかいうのなら、いくらか手懸りもあるし、何の不思議もないのですが、俗に申します、神がくしに逢つたんで、叔母はじめ固くそう信じております。

名は菖蒲あやめと言いました。

一体その娘の家は、母娘おやこ二人、どっちの乳母か、媪ばあさんが一人と母子おやこだけのしもた屋で、しかし立派な住居すまいでした。その母親おふくろというのは、私は小兒心こどもに、ただ齒を染めていたのと、鼻筋の通つた、こう面長な、そして帯の結むすびめ目を長く、下した襲がさねか、蹴出けだしか、褌つまをぞろりと着崩して、日の暮方には、時々薄暗い門かどに立

つて、町から見えます、山の方を視めては悄然しよんぼりたたず、なゝんでいたのだけ幽かすかに覚えているんですが、人の妾めかけだとも云うし、本妻だとも云う、どこかの藩候の落胤おとしだねだとも云つて、ちつとも素性が分りません。

娘は、別に異かわつたことありませんが、容色きりようは三人の中うちで一番佳よかつた———そう思うと、今でも目前めさきに見えますが。

その娘です、余所よそへは遊びに來ましたけれど、誰も友達を、自分の内へ連れて行つた事はありませんでした。

寄合あそびごとつて、遊あそびごと事を。これからおもしろくなるうという時、不意おっかに母さんがお呼びだ、とその媪おばさんが出て來て引張ひっぱつて歸ることが度々で、急に居なくなる、跡の寂しさと云つたらありませ

ん。——先せんの内は、自分でいいいや引立ひったてられるようにして帰り帰かへりしたものです、一ツは人の許とこへ自分は来て、我が家うちへ誰も呼よばない、という遠慮か、妙な時ふと立たつちや、独ひとりで帰かへつてしままうことがいくらもあつたんです。

ですから何だかその娘ばかりは、思うように遊あそべない、勝手に誘よわれない、自由にはならない処ところから、遠とほいが花の香かほとか云いいます。余計あまに私わたしなんざ懐なつかくつて、（菖あやちゃんお遊あそびな）が言いえないから、合あ図ずの石いしをかちかち叩たたいては、その家の前まへを通とほつたもんでした。

それが一あ晩るばん、真夜中まよなかに、十畳じゅうじやうの座敷ざしきを閉しめ切きつたままで、どこかへ姿すがたをかくしたそうで。

「^{うし}丑年の事だから、と私が唄を聞きたさに、尋ねた時分……今から何年前だろう、と叔母が指を折りました……^{しばらく}多年になりませんが。」

三十一

「故郷では、未婚の女が、丑年の丑の日に、^{きもの}衣を清め、身を清め

……」

^{つば}唾をのんで聞いた客僧が、

「成程、」

と腕組みして、

「精進潔斎。」

「そんな大した、」

と言消したが、また打うちうなず領うき

「どうせ娘の子のする事です。そうまでも行きゆますまいが、髪を洗って、湯に入つて、そしてその洗あらいがみ髪くしまを櫛くし巻まきに結くんで、笄こうがいなしに、紅べにばかり薄うすくつけるのだそうです。

それから、十畳敷じゆじゆを閉しめこ込んで、床の間をうしろに、どこか、壁へ向いて、そこへ婦おんなの魂たまを据たえる、鏡です。

丑うしどうじ童子まだら、斑おんかみの御おん神かみ、と、一心に念じて、傍わきめ目めも触ふらないで、

瞻みつめていると、その丑うしの年とし丑しの月つき丑しの日ひの……丑うし時ときになると、

その鏡に、……前世から定さだまつた縁ゆかりの人の姿すがたが見える、という伝

説があります。

娘は、誰も勝手を知らない、その家で、その丑待うしまちを独ひとりでして、何かに誘われてふらふらと出たんですって。……それつきりになつてゐるんですもの。

手のつけようがありませんまい。

いよいよとなると、なお聞きたい、それさえ聞いたら、亡くなつた母親の顔も見えよう、とあせり出して、山寺にありました、母の墓を揺ゆすぶつて、記しるしの松に耳をあてて聞きました、松風の声ばかり。

その山寺の森をくぐつて、里に落ちます清水の、麓ふもとに玉散る石を噛かんで、この齒音せよ、この舌歌へ、と念じても、戦おのくばかり

扮装みなりなどは気がつかず、洋傘かさは持っていたようでしたつけ、それを翳さしていたか、畳んだのを支ついていたか、判然はつきりしないが、ああ似たような、と思つたのは、その行方が分らんという一人。

トむこうでも莞爾にっこりしました……

そこへ笠を深くかぶつた、草鞋わらじ穿はきの、猫かり人ゆう体どていの大漢おおおとこが、鉄砲てっぽうの銃つっさき先あさぎへ浅葱あさぎの小旗こはたけを結むすえつけたのを肩かたにして、鉄の鎖くさりをずらりと曳ひいたのに、大熊おおくまを一頭ひと、のさのさと曳ひいて出でました。

山やまを上のぼり見て、正ま的とに町まちと町まちが附くついた三辻みつじの、その附根つけねの処ところを、横よこに切きつて、左角ひだりかくの土蔵どくらの前まへから、右角みぎかくが、菓子屋かしやの、その葦簣よしずの張はり出だしまで、わずか二間ふたまばかりの間あいを通とつたんですか

ら、のさりと行くのも、ほんのしばらく。

熊せなかの背たたずが、イんだ婦人おんなの乳ちのあたりへ、黒雲のようにかかると、それにつれて、一所に横向きになつて歩ある行き出しました。あとへぞろぞろ大勢小児こどもが……国では珍らしい獣けものだからでしょう。

右の方へかくれたから、角へ出て見ようと、急いそぎあし足あしに出よう、とすると、馴なれない跛びっこですから、腕へ台についた杖を忘れて、躓つまずいて、のめつたので、生爪なまづめをはがしたのです。

しばらく立てませんでした。

かれこれして、出て見ると、もうどこへ行つたか影も形もない。

その後、旅行をして諸国を歩ある行くのに、越前この木の芽峠ふもとの麓ふもとで見かけた、炭を背負しよつた女だの、碓氷うすいを越す時汽車の窓からちら

云う貴下は、あなた身体が弱いのです。からだ当分外へは出てはなりません、と外出禁制。きんせい

以前は、その形で、正真正銘の熊の胆い、と海を渡って売りに来たものがあるそうだけれど、今時はついで見懸けぬ、と後での話……」

三十二

「日が経たってから、叔母が私の枕まくらもと許もとで、さまでに思詰めたものなら、保養かたがた、思う処へ旅行して、その唄を誰かに聞け。
(妹の声は私も聞きたい。)

と、手函てぼこの金子かねを授けました。今もって叔母が貢いでくれるんです。

国を出て、足かけ五年！

津々浦々、都、村、里、どこを聞いても、あこがれる唄はない。似たのはあつても、その後か、その前せきか、中途か、あるいはその空間か、どこかに望みの声がありそうだな……と思うばかり。また小児こどもたちも、手毬が下手になつたので、終しままで突き得ないから、自然長いのは半分ほどで消えています。

とても尋常ではいかん、と思つて、もうただ、その一人行方おさなの知れない、稚おさなともだちばかり、矢も楯たても堪たまらず逢いたくなつて来

たんですが、魔にとられたと言うんですもの。高峰へかかる雲を見ては、鳶つたをたよりに縋すがりたし、湖うみを渡る霧を見ては、落葉に乗つても、追いつきたい。巖いわ穴あなの底も極めたければ、滝の裏も覗のぞきたし、何か前世の因縁で、めぐり逢う事もあるうか、と奥山の庚申塚こうしんづかに一人立つて、二十六夜の月の出を待った事さえあるんです。

トこの間——名も嬉しい常夏とこなつの咲いた霞川と云う秋谷の小川で、綺麗な手毬を拾いました。

幸八つきあかりに聞いた、あの、嘉吉とか云う男に、緑色の珠を与えて、
月つきあかり明の村雨の中を山路へかかつて、

(ここはどこの細道じゃ、

細道じや。

天神様の細道じや、

細道じや。）

と童謡を口くちずさ吟んで通つたと云うだけで、早やその声が聞こえるように、

僧は魅入られたごとくに見えたが、溜ためいき息を吻ほっと吐つき、

「まずおめでたい、ではその唄が知れましたか。」

「どうして唄は知れませんが、声だけは、どうやらその人……いえ、……そのものであるらしい。この手毬もてあそを弄たしかぶのは、確たしかにその婦人おんなであろう。その婦人は何となく、この空あき邸やしきに姿が見えるように思われます。……むしろ私はそう信じています。」

爺さんに強請ねだつて、ここを一室ま借りましたが、借りた日にはもう其の手毬を取返され——私は取返されたと思うんですね——美しく気高い、その婦人おんなの心では、私のようなものに拾わせるのではなかつたでしよう。

あるいはこれを、小川の裾すその秋谷明神へ届けるのであつたかも知らない。そうすると、名所だ、と云う、浦の、あの、子産石をこぼれる石は、以来手毬の糸が染まつて、五彩燦爛さんらんとして迸ほとばしる。この色が、紫に、緑に、紺こんじょう 青に、藍らんぺき 碧に波を射て、太平洋へ月夜の虹にじを敷いたのであるうも計られません、」

とまた恍惚うつつとりとなつたが、頸うなじを垂れて、

「その祟たたり、その罪です。このすべての怪異は。——自分の慾よくのた

めに、自分の恋のために、途中でその手毬を拾った罰だろう、と
思う、思うんです。

崇らば崇れ！飽くまでも初一念を貫いて、その唄を聞かねば置
かない。

心の迷まよが知れませんが。目まのあたり見ます、怪しさも、凄すこさも、
もしや、それが望みの唄を、何人なんびとかが暗示するのであろうも知
れん、と思つて、こうその口ずさんで見ると——行燈あんどうが宙
へ浮きましよう。

(美しき君の姿は、

萌黄もえぎの蚊帳を、

蚊帳のまわりを、姿はなしに、

通る行燈あんどの倂おもや。かげ）……

勿論、こんなものではありません。または、

（美しき君いおりの庵いおりは、

前の畑に影さして、

棟の草も露に濡れつつ、

月の桂かつらが茅屋かややにかかる。）……

ちつとも似てはおらんです。屋根で鵝がちょう鳥うが鳴く時は、波なみに
攫さらわれるのであろうと思ひ、板戸いたどに馬の影がさせば、修羅道しゆらだうに墮お
ちるか、と驚きながらも、

（屋根で鵝鳥がちょうの鳴き叫ぶ、

板戸いたどに駒こまの影がさす。）

と、うつつ現にも、絶えず耳に聞きますけれど、それだと心はうなず領きません。

いかなる事も堪忍んで、どうぞその唄を聞きたい、とこうして参籠をしているんですが、たたり崇ならばよし罪はいと厭わん、」
と激しく言いつつ、心づいて、しよぜん悄然として僧を見た。

「ただその、手毬を取返したのは、唄は教えない、という宣告じやあなかりうか、とそう思うとなさけ情ない。

ああ、お話がやちまた八岐になつて、手毬は……そうです。天井から猫が落ちます以前、私が縁側へ一人で坐つています処へ、あの白しろい粉の花の蔭から、芋ずいぎ※の葉を顔に当てた小児こどもが三人、ちよろちよると出て来て、不思議そうに私を見ながら、犬ころがなつくよ

うに傍^{そば}へ寄ると、縁側から覗^{のぞ}込んで、手毬を見つけて、三人でうなずき合つて、

（それをおくれ。）と言います。

（お前たちのか。）

と聞くと、頭^{かぶり}を掉^ふるから、

（じゃ、小父^{おじ}さんのだ。）と言うと、男が毬を、という調子に、

（わはは）と笑つて、それなりに、ちらちらとどこかへ取つて行つたんです。」——

「何、私わしがうわさしていきつせえた処だつて……はあ、お前めえさま様二人でかね。」

どツこいしよ、と立つたまま、広縁が高いから、背負しよつて来た風呂敷包は、腰こしぎりにちようど乗る。

「だら、可いいけんども、」

と結むすびめ目を解ときお下ろして、

「天井裏てんじやうらでうわさべいされちや堪たまんねえだ。」

と声こゑを密ひそめたが、宰八は直ぐ高調子、

「いんね、私わし一人じやござりましねえ。喜十郎とこ様が許とこの仁右衛門

の苦にがむし虫と、学校の先生ちゆが、同士どうしにはい、門もんまゑ前まゑまで来こつ

えがの。

あの、樹の下の、暗え中へ頭突つっこ込んだと思わっせえまし、お前様、苦虫の親仁おやしが年とし効がいもねえ、新造しんぞう子こが抱か着かれたように、キヤアと云うだ。」

「どうしたんです。」

「何かまた、」

と、僧も夜具包の上から伸上のつて顔を出した。

宰八あかはちまき紅あかはちまき願あかはちまき巻あかはちまきをかなぐつて、

「こりや、はい、御坊様御免なせえまし。御本家からも宜よろしくでござりやす。いづれ喜十郎様お目に懸かかりますかすが、まずゆつく緩ゆつくりと休やすまつしやりましとよ。」

私わしこういうぞんざいもんだで、お辞儀の仕様もねえ。婆様おばがよ

ツクハイ御挨拶しろと云うてね、お前様旨うまがらしつけえ、団子をことづけて寄越よこしやした。茶受ちやうけにさっしやりやし。あとで私が蚊いぶしを才覚しながら、ぶつぶつ渋茶を煮立てますべい。

それよりか、お前様、腹アすかつしやったらうと思うで、御本家からまた重詰めにして寄越さした、そいつをぶら下げながら苦虫が、右のお前様、キヤアでけつかる。

門外の草原を、まるで川の瀬さ渡るように、三人がふらふらよちよち、モノ小半時かかったが、芸もねえ、えら遅くなって済まんしねえ。」

「何とも御苦勞、」

と僧は慇懃いんぎんに頭つむりをさげる。

「その人たちは、どうしたのかね。」

と明が尋ねた。

「はい、それさ、そのキャアだから、お前様、どうした仁右衛門と、云うと、苦虫が、面さ渋くして、（ああ、厭なものを見た。おらが鼻の尖を、ひいらひいら、あの生白けた芋の葉の長面が、ニタニタ笑えながら横に飛んだ。精霊棚の瓢箪が、ひとりでにぼたりと落ちて、御先祖の戒とは思わねえで、酒も留めねえ己だけんど、それにや蔓が枯れたちゆう道理がある。風もねえに芋の葉が宙を歩行くわけはねえ。ああ、厭だ、総毛立つ、内へ帰って夜具を被つて、ずツしり汗でも取らねえでは、煩いそうに頭も重い。）

と縮むすくだね。

例いつもの小児こどもが駆出したろう、とそう言うのと、なお悪い。あの声を聞くと堪たまらねえ。あれ、あれ、石を鳴らすのが、谷戸やとに響く。時刻も七ツじや、と蒼あおくなつて、風呂敷包打ぶちお置いて、ひよろひよろ帰るだ。

先生様、ではお前様、その重箱を提げてくれさつせえ、と私わしが頼むとね。

(厭だ、)と云つけい。

(はてね、なぜでがす。)

ここさ、お客様の前めえだけんど、気にかけて下せえますなよ。

(軍歌でもやるならまだの事、子守や手毬唄なんかひねくる様な

奴の、弁当持つて堪るものか。(

と吐くでねえか。

奴は朋友ともだちに聞いた、と云うだが、いずれ怪物退治ばけものに来た連中からだんべい。

お客様何でがすか、お前様、子守唄拵こぎえさつしやるかね。袋戸棚の障子へ、書いたもの貼はつとかつしやるのは、もの、それかね。
」

明は恥じたる色があつた。

「こしらえるのじやない、聞いたのを書き留めて置くんです。数があつて忘れるから、」

「はあ、私わたしはまた、こんな恐怖おっかねえ処ところに落着いていさつしやるお

前様だ。

怨敵退散の貼御符かと思つたが。

何か、ハイ、わけは分ねえがね、悪く言つたのがグツと癩しやくに

障さわつたで、

(なら可ようがす、客人のものは持つてもれえますめえ、が、お前様、学校の先生様だ。可よし、私あハイ、何も教えちやもらわねえだで、師匠じゃねえ、同士に歩ある行くだら朋とも達だつぺい。蟹の宰八が手てンぼうの助力さつせえ。)

と極きめつけたさ。

帽子の下で目を据えたよ。

(貴様のような友達は持たん、失敬な。)と云つて引返したわ。

何か託かこつけ、根は臆病で遁にげただよ。見させえ、韋駄天いだてんのように木の下を駆出し、川べりの遠くへ行く仁右衛門親仁を、

(おおい、おおい、)

と茶番の定九郎さだくろうを極きめやあがる。「

三十四

その夜に限って何事もなく、静かに。……寝ようという時、初夜過ぎた。

宰八が手燭てしよくに送られて、広縁を折曲つて、遥はるかに廻廊を通つた僧は、雨戸の並木を越えたようで、故郷ふるさとには蚊帳を釣つて、

一人寂しく友が待つ思がある。

「ここかい。」

「それを左へ開けさつせえまし、入口の板敷から二ツ目のが、男が立って遣るのでがす。行抜けに北の縁側へも出られますで、お前様帰りがけに取違えてはなんねえだよ。」

二三年この方、向うへは誰も通抜けた事がねえで、当節柄じや、迷込んでどこへ行くか、ハイ方角が着きましたねえ。」

「もう分りましたよ。」

「可かあねえ、私、ここに待つとるで、燈をたよりに出て来させえ。」

私も、この障子の多いこと続いたのに、めらめら破れのある工

合あひが、ハイ一ツ一ツ白髑しやれかうべのようで、一人で立つてる気はしねえけんど、お前様が坊様だけに氣丈夫だ。えら茶話がもてて、何度も土瓶をかかわしたで、入いれかわつて私もやらかしますべいに、待つてるだよ。」

僧は戸を開けながら、と、声をかけて、

「御免下さい。」

と、ぴたりと閉めた。

「あ、あ、氣味の悪い。誰に挨あいさつ拶さつさせるだ。南無阿弥陀仏なむあみだぶつ、

南無阿弥陀仏。はて、急に變なことを考えたぞ。そこさ一面の障子の破れ覗のぞいたら何が見えべい——南無阿弥陀仏なむあみだ、ああ、南無阿弥陀仏、……やあ、蠟燭ろうそくがひらひらする、どこから風が吹いて

来るだ。これえ消したが最後、立たちどころ 処ところ に六道の辻に迷うだて。

南無阿弥陀なんまいだ 仏、御坊様、まだかね。」

「ちよいと、」

「ひやあ、」

僧は半ば開いて、中に鼠ねずみの法衣ころもで立ちつつ、

「ちよいと燭あかりを見せておくれ。」

「ええ、お前様、前さきへ戸を開けておいてから何か言わつしやれば

いい。板戸おんじようが音おんじよう 声を発したか、と吃驚びっくりしたただ、はあ、何だ

ね。」

「入口の、この出窓の下に、手水鉢ちようずがあつたのを、入りしなに

見ておいたが、広いので暗くて分らなくなりました。」

「ああ、手、洗わつしやるのかね、」

と手燭ばかりを、ずいと出して、

「鉢前にや、夜よが明けたら見さつせえまし、大した唐銅からかねの手水鉢の、この邸ひさ曳ひいて来る時分に牛一頭かかった、見事なのがあるけれど、今開ける気はしましねえ。……」

ええ、そよら、そよらと風だ。

そ、その鉢にや水があればいがね、無くば座敷まで我慢さつせえまし、土瓶のこりの残かを注かけて進かぜる。」

「あります、あります。」

ざつと音をさして、

「冷い美しい水が、満なみなみ々とありますよ。」

「嘘を吐くもんでエねえ。なに美しい水があんべい。井戸の水は真

蒼で、小川の水は白濁りだ。」

「じゃあ燭で見るとせいでろうか、」

「そして、はあ、何なみなみとあるもんだ。」

「いいえ、縁切こぼれるようだよ。ああ、葉越さんは綺麗好き

だと見える。真白な手拭が、」

と言いかけてしばらく黙った。

今年より卯月八日は吉日よ

尾長蛆虫成敗ぞする

「ここに倒にはってあるのは、これは誰方がお書きなすった、」

「……南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏……」

「ああ、佳いおてだ。」

と大和尚のように落着いて、大く言つたが、やがてちと慌しげに小さな坊さまになつて急いで出た。

「ええ、疾く出さつせえ、私もう押堪えて、座敷から庭へ出て用たすべい。」

「ほんとに誰が書いたんだね、女の手だが、」

と掛手拭を賞めた癖に、薄汚れた畳んだのを自分の袂から出してゐる。

「南無阿弥陀仏、ソ、それは、それ、この次の、次の、小座敷で亡くならしつけえ、どつかの嬢様が書いて貼つただとよ、直きそこだ、今ソんな事あどうでも可え。頭から、慄然とするだに、」

「そうかい、ああ私も今、手を拭ふこうとすると、真新しい切立きりたての掛手拭かてぬいが、冷く濡ぬれていたののでヒヤリとした。」

「や、」と横飛びにどたりと踏んだが、その登あし音を忍おとびたそうに、腰を浮かせて、同一おなじ処じを蹠うろ蹠うろする。

三十五

「そうふらふらさしちや燈あかりが消えます。貸しなさい、私がその手て燭しよくを持とうで。」

「頼たのみます、はい、どうぞお前めえ様持さまたつせえて、ついでにその法衣ころも着きさせえ姿すがたから、光明くわうみやく赫かく燿やくと願ねがえてえだ。」

僧は燭を取つて一足出たが、

「お爺さん、」

と呼んだのが、驚破事すわやありげに聞えたので、手んぼうならぬ手ひっこを引込め、不具かたわの方と同一処おなじで、掌てのひらをあけながら、据腰すえごしで顔を見上げる、と皺しわづら面ばかりが燭の影に真赤まっかになった。——この赤親仁と、青坊主が、廊下はずれに物言う状さまは、鬼きが囁ささやくに異ならず。

「ええ、」

「どこか呻吟うめくような声がするよ。」

「芸もねえ、威おどかしてどうさつせる。」

「聞きなさい、それ……」

「う、う、う、」

と厭いやな声。

「爺さん、お前が呻吟くのかい。」

「いんね、」

と変な顔色で、鼻をしかめ、

「ふん、難産の呻吟うめきごえ声だ。はあ、御新姐ごしんぞが唸うならしつけえ、姑獲うぶ

鳥めになつて鳴くだあよ。もの、奥の小座敷の方で聞えべいがね。」

「奥も小座敷も私は知らんが、障子の方ではないようだ、便所かな、」

「ひええ、今、お前様が入いらつしたばかりでねえかね、」

「されば、」

と斜めに聞澄まして、

「おお、庭だ、庭だ、雨戸の外だ。」

「はあ、」

と宰八も、聞定めて、吻ほっと息して、

「まず構かめえそと外だ、この雨戸がハイ鉄壁だぞ。」と、ぐいとおさ圧え

てまた踏張ふんばり、

「野郎、入へえつてみやがれ、野郎、活いき仏ほとけさまが附ついてござるだ

。」

「仏ではなお打棄うつちやつては措おかれぬ、人の声じゃ、お爺さん、

明けて見よう、誰くるしか苦くるしんでいるようだよ。」

「これ、静かにさっせえ、術てだ、術だてね。ものその術で、背負しよ

引びき出して、お前様あたま天窓から塩よ。私わしは手足ひんもい引ひ搦もいで、月夜蟹つきやかにで肉みがねえ、と遣やろうとするだ。ほつてもない、開ひけさつしやるな。早く座敷へ行いきますべい。」

「あれ、聞きなさい、助けてくれ……と云うではないか。」

「へ、疾はやいもんだ。人の氣を引ひきくさる、坊はや様と知しつて慈悲じで釣つるだね、開ひけまいぞ。」

と云う時……判はつきり然ぜん聞きえたが、しわがれた声であつた。

「助けてくれ……」

「……………」

「……………」

「宰八さいはちよう、」——

と、むぐら葎がくれに虫の声。

手てんぼう蟹かにふるえ上つて、

「ひやあ、苦虫が呼ぶ。」

「何、虫が呼ぶ？」

「ええ、仁に右衛門えむの声だ。南無阿弥陀仏なんまいだ、ソ、ソレ見さつせえ。

宵もんまえに門もんまえ前から遁にげ帰かえった親仁おのれめが、今時分何しにここへ来るも

んだ。見ろ、畜生、さ、さすが畜生の浅間しさに、そこまでは心

着かねえ。へい、人間様だぞ。おのれ、荒神様がついてござる、

猿智慧さるぢえだね、打うつ棄ちやつておかつせえまし。」

と雨戸を離れて、肩を一つ揺ゆつて行ゆこうとする。広縁のはずれ

と覚かなたしき彼方へ、板敷を離るること二尺ばかり、消え残とうろった燈

籠うのような白紙しらかみがふらりと出て、真四角まっしかくに、燈ともが歩し行き出あるした。

「はッあ、」

と退すきつて、僧せなに背すりよを摺すりよ寄せながら、

「経文を唱えて下せえ、入つて来たわ、南無なんまいだ、なんまいだ。」

僧つまだも爪立つまだつて、浮腰うきごしに透かして見たが、

「行燈あんどうだよ、余り手間が取れるから、座敷から葉越さんが見においでだ。さあ、三人となると私も大きに心強あい——ここは開あかい。」

「ええ、これ、開けてはなんねえちゆうに、」

「だって、あれ、あれ、助けてくれ、と云うものを。鬼神に横道なし、と云う、情なさけに抵抗てむかう刃やいばはない筈はず、」

くるる

柩くるるをかたかた、ぐつと、さるを上げて、ずずん、かたりと開ける、袖を絞おつて蔽おい果さず、燈あかりは颯さつと夜風に消えた。が、吉野紙を蔽おえるごとき、薄曇りの月の影を、隈くまある暗むぐらき葎らの中、底そこを分け出いでて、打傾ういて、その光を宿すしている、目の前の飛石の上を、四よつに這はい廻まわるは、そもいかなるものぞ。

三十六

声を聞いたより形を見れば、なお確たしか実に、飛石を這うつて呻うめいて

いたのは、苦虫の仁右衛門であつた。

つきあかり
月明に、

まさしくそれと認めが着くと、

おなじたがいうち

同一疑の中にもい

くらか 与 易 くみしやす

く思つた処へ、明が あんどう

行燈を提げて来たので、ま

すます力づいた宰八は、二人の指図に、思切つて庭へ出たが、もうそれまでに こ 漕ぎ着ければ、露に濡れる分は厭 いと わぬ親仁。

さやさやと むぐら

葎を分けて、おじいどうした、と すりよ 摺寄ると、ああ、

宰八か助けてくれ。この手を引張 ひっぱ つて、と拜むがごとく指出した。

左の腕 かいな を、ぐい、と つか 掴んで、獣 けもの には毛が少ねえ、おとおお正 し

ようじん

真 正銘の仁右衛門だ、よく化けた、とまだそんな事を云いな

がら、肩にかけて引立 ひった てるると、飛石から離れるのが泥田 どろだ を踏むよ

うな足取りで、せいせい呼吸 いき を切つて、しがみつくので、咽喉 のど が

しまる、と呟つぶやきながら、宰八も疾はやく埒らちを明けたさに、委細構わず
 ずるずる引摺ひきずつて縁側に來る間に、明はもう一枚、雨戸を開けて
 待構えて、気分はどう？まあ、こちらへ、と手伝つて引入れた、
 仁右衛門の右の手は、竹槍たけやりを握つていたのである。

これは、と驚くと、仔細しさいござります。水を一口、と云う舌も硬こわ
 ばり、唇は土気色。手首も冷たく、只ひたわな戦たたかきに戦くので、ともか
 く座敷へ連れよう……何しろ危いから、こういうものはと、竹槍
 は明が預る。

引ひそいだ切きつ尖さきの鋭すいのが、法衣ころもの袖かすを掠さらつたから、背後うしろに立
 つた僧は慌あわてて身を開いて、行燈は手前が、とこれが先へ立つ。

さあ負おふされ、と蟹の甲を押向けると、いや、それには及ばぬ、

と云つた仁右衛門が、僧の裾すそを啣くわえた体ていに、膝ひざで摺ずつて縁側えんがわへ這は上いあがつた。

あとへ、竹槍の青光りに艶のあるのを、柄長へいぢやうに取つて、明あきが続つく。

背後うしろで雨戸を閉めかけて、おじい、腰こしが抜けたか、弱い男だ、

とどうやら風向かざむきが可よさそうなので、宰八さいはちが嘲あざけると、うんにや

足の裏うらが血だらけじゃ、歩あるく行あつと痕あとがつく、と這はいなから云つたの

で——イヤその音おびただの夥おびただしさ。がらりと閉め棄すてに、明あきの背せなへ飛とび飛す

縄なまがつた。——真ま先つへ行ま燈つが、坊ぼうさまの裾すそあたり宙あを歩ある行あるいて、

血ちだらけだ、と云う苦虫くちゅうが馬うまの這はい身み、竹槍しりえが後おきを圧おえて、暗くらがり

を蟹かにが通とる。……広縁ひろえんをこの体ていは、さてさて尋常ただごと事ことではない。

やがて座敷で介抱して、ようよう正氣づくつと、仁右衛門は四辺あたりをみまわし、あまたたび口籠くちごもりながら、相済みましねえ、お客様、御出家、宰こなた八此方にはなおの事、四十年来の知己ちかづきが、余り氣心を知らんようで、面目もない次第じゃ。

御主人鶴谷様のこの別宅ひと、近頃ふたよるの怪しさ不思議さ。余りの事に、これは一分別ある処と、三日二夜ふたよる、口も利かずにまじまじと勘考たぐした。はて巧たくんだり！てつきりこいつ大詐欺おおかたりに極まった。汝う等ぬらが謀はかつて、見事に妖物ばけものやしき邸いにしおおせる。棄て置けば狐狸こりの棲すみか処か、さもないまでも乞食の宿、焚火たきびの火沙汰ざたも不用心、給金出してても人は住まず、持余しものになるのを見済まし、立腐れの柱を根こぎに、瓦屋根を踏倒して、股倉またぐらへ搔か込こむ算段、凶星凶星。

しゃ！明神様の託宣——と眼まなこたま玉たまで睨にらんで見れば、どうやら近頃から逗とうりゆう留ゆうした渡りものの書生坊しよせつぼう、悪く優しげな顔色つらつきも、絵草子で見た自来也じらいやだぞ、盗賊の張本ばほんござんなれ。晩方う来うせた旅僧りゆうそうめも、その同類、茶店の婆ばばも怪しいわ。手引した宰八さいはちも抱込か込まれたに相違ちがない。道理こそ化物沙汰かに輪かを掛かける。待まちて待まちて狂きちがい人の真似まね何なにでもない事、嘉吉かきちも一升飲いっしょうのりまされた——巫山ふざけ戯あそばた奴等やつら、どこだと思おもう。秋谷村あきや村には甘え柿あまがきと、苦虫くちゅうあるを知しんねえか、とわざと臆病おくびょうに見せかけて、宵よに遁にげたは真田さなだ幸村ゆきむら、やがてもり返かへして盗賊どろぼうの巢のを乗取のつとる了りよう簡けん。

いつものように黄昏たそがれの軒のきをうろつく、嘉吉かきち奴めを引捉ひつとらえ、確しかと親元おやもとへ預け置あいたは、屋根やねから天蚕てんそう糸いとに鉤かりをかけて、行燈あんどんを釣つら

せぬ分別。

かねて謀はかりごと計しめしあわを合あわせた、同じく晩方遁にげる、と見せた、学校の訓導と、その筋の諜ちようじや者しやを勤むる、狐きつねみせ店の親方を誘うて、この三人、十分に支度をした。

二人は表門へ立向い、仁右衛門はただ一人、怪しきものは突殺そう。狸に化けた人間を打ぶちころ殺すに仔細はない、と竹槍ひっを引そばめて、木戸口から庭づたいに、月あかりを辿たどり辿り、雨戸をあてに近づいて、何か、手品の種がありはせぬか、と透かして屋根の周囲まわりをぐるりと見ると。……

鳥が一羽歴然ありありと屋根に見えた。ああ、あの下辺あたりで、産婦が二人——定命とは思われぬ無残な死にようをしたと思うと、屋根の上に、姿が何やら。

この姿は、葎むぐらを分けて忍び寄つたはじめから、目前めまきに朦朧もうろうと映つたのであつたが、立つて丈長き葉に添うようでもあり、寝て根を潜くぐるようでもあるし、浮き上つて葉尖はさきを渡るようでもあつた。で、大方仁右衛門自分の身体からだと、竹槍との組合せで、月つき明あかりには、そんな影が出来たのだろう、と怪しまなかつたが、その姿が、ふと屋根の上に移つたので。

ト見ると、肩のあたりの、すらすらと優やさしいのが、いかに月に描

き直されたればとて、くわ鍬を担いだ骨組にしては余りにしおらしい、と心着くと柳の腰。

その細腰をこなた此方へ、背を斜にした裾が、脛のあたりへかわら瓦を敷いて、細くしなやかにかいこ搔込んで、蹴出したようなつまさき棲先が、中空なれば遮るものなく、たより便なさそうに、しかしかろ軽く、軒の蜘蛛のい囿の大きなのに、はらりと乗つて、みずぐるま水車に霧が懸つた風情に見える。背筋のなび靡く、えりもと頸許のほの白さは、月に預けて際立たぬ。その月影はおぼろ朧ながら、濃い黒髪は緑を束ねて、森の影が雲かと落ちて、そのおもかげ倂をうらから包んだ、向うむきの、やや中空を仰いだ状で、二の腕の腹をこなた此方へ、雪のごとく白く見せて、しずかびん静に鬢の毛を撫なでていた。

白魚しらおの指さきの尖とがの、ちらちらと髪くぐを潜くぐつて動いたのも、思えば見えよう道理はないのに、てつきり耳が動いたようで。

驚破すわけだもの、獣か、人間か。いずれこの邸うちを踏倒たふしそう屋根住居ずまいしてござる。おのれ、見ろ、と一足退すきつて竹槍たけやりを引ひ扱しごき、鳥を差いた覚えの骨こつで、スーッ！突出つきだした得物の尖とがが、右の袖下くぐを潜くぐるや否や、踏占ふしめた足の裏で、ぐ、ぐ、ぐ、と声を出したものである。

地つちが急に柔かく、ほんのりと暖かに、ふつくりと綿わたを踏んで、下へ沈みそうな心持。他愛たわいなく膝節ひざの崩れるのに驚いて、足を見る、と白粉おしろいの花の上。

と思つたがそれは遠い。このふつくりした白いものは、南無三なむさん宝仰ほうおむ向けに倒れた女の胸、膨らむ乳房ちちの真中まんなかあたり、鳩尾みぞおちを、

土足で踏んでいようでないか。

仁右衛門ぶるぶるとなり、すえまなこ据眼しじつに熟と見た、白い咽喉のんどをの

け様ざまに、苦痛に反らして、黒髪を乱したが、唇を洩もる齒の白さ。

草に鼻筋の通った顔は、忘れもせぬ鶴谷の嫁、ういざん初産しうさんに世を去つ

た御新姐ごしんぞである。

親仁あたまは天窓から氷を浴びた。

恐しさ、怪しさより、勿体なさに、慌てて踏んでいる足を除どけ

ると、我知らず、片足が、またぐツと乗る。

うむ、と呻うめかれて、ハツと開くと、旧もとの足で踏みかける。てんど顛

倒うして慌てるほど、からだ身体のおしに重みがかかる、とその度に、

ぐ、ぐ、と泣いて、口から垂たら々たらと血を吐くのが、のど咽喉かかに懸り、

胸を染め、乳の下を颯さつと流れて、仁右衛門の蹠あしのうらなに生あ暖あたたかう垂れかかる。

あツと腰を抜いて、手を支くと、その黒髪を搔か掴つかんだ。

御免なせえまし、御新姐様、御免なせえまし、と夢中ながら一心に詫びると、踏躡ふみにじられる苦惱の中から、目を開いて、じろじろと見る瞳が動く、口も動いて、莞爾にっこりする、……その唇から血が流れる。

足は膠にかわで附けたよう。

同一処おなじで蠢うごめく処へ、宰八の声が聞えたので、救助たすけを呼ぶさえ呻う吟めいたのであつた。

かくて、手を取つて引立ひつたてられた——宰八が見た飛石は、魅せ

られた仁右衛門の幻の目に、すなわち御新姐の胸であつたのである、足もまだ粘ねばねば々する、手はこの通り血だらけじや、と戦おののいたが、行燈に透かすと夜露に曝さられて白けていた。

「我が折れ何とも、六十の親仁が天窓あたまを下げる。宰八、夜深よふかじやが本宅まで送つてくれ。片時もこの居まわり三町おの間に居りたくない、生命いのちばかりはお助けじや。」

と言つて、誰にするやら仁右衛門はへたへたとお辞儀をした。

そこで、表門へ廻つた二人は、と皆連立みんなつて出て見ると、訓導は式台前の敷石の上に、ぺたんと坐つていた。狐鱧きつねうどんの亭主は見えず。……後で知れたがそれは一散に遁にげた、と言う。

何を見て驚いたか、渠等かれらは頭かぶりを掉ふつて語らない。一人は緋ひの袴かまを穿はいた官女の、目の黒い、耳の尖とがった凄すさまじき女房の、薄うすぐも雲りの月に袖を重ねて、木戸口たたずに佇たんだ姿を見たり、一人は朱の面つらした大猿にして、尾の九ツに裂けた姿に見たり、と誰伝うるとな
く、程経たつて灰ほのかもに洩れ聞える。——

三十八

二人寝には楽たすみだけれども、座敷が広いから、蚊帳は式台向きの二隅ふすまと、障子と、襖ふすまと、両方の鴨居かもいの中途に釣手を掛けて、十畳

敷のその三分の一ぐらいを——大庄屋の夜の調度——浅緑を垂れ、
 紅麻こうあさの裾すそ長く曳ひいて、縁側かたの方に枕を並べた。

ある
 一日、朝から雨が降つて、昼も夜のようであつたその夜中の事
 ——と語り掛けて、明はすやすやと寝入つたのである。

いづれそれも、怪しき事件ことの一つであらう。……あわれ、この
 少わかき人の、聞くがごとくんば連日の疲労つかれもさこそ、今宵は友とし
 て我ここに在るがため、幾分の安心を得て現うつなく寝入つたのであ
 ろう、と小次郎法師が思うにつけても、蚊帳越みまもに瞻みまもらるるは床の
 間を背後うしろにした灰白々とある行燈あんどう。

楽書らくがきの文字もないが、今にも畳を離れそうすそで、裾すそが伸びるか、
 燈ともしびが出るか、蚊帳へ入つて来そうすそでならぬ。

そういえば、掻き立てもしないのに、明の寝顔も、また悪く明るい。

「貴下、寝冷をしては不可ません。」

寝苦しいか、白やかな胸を出して、鳩尾へ踏落しているのを、瘦せた胸に障らないように、密つと引掛けたが何にも知らず、まづ可かつた。——仁右衛門が見た御新姐のように、この手が触つて血を吐きながら、莞爾としたらどうしよう。

そう思うと寝苦しい、何にも見まい、と目を塞ぐ、と塞ぐ後から、睫がぱちぱちと音がしそうに開いてしまうのは、心が冴えて寝られぬのである。

掻巻を引被れば、袵の袖から襟かけて、大な洞穴のよう

に覚えて、足を曳ひいて、何やらずるずると引入れそうで不安に堪えぬ。

すぼりと脱いで、坊主天窓あたまをぬいと出したが、これはまた、ばあ、と云つてニタリと笑いそうで、自分の顔ながら気味の悪さ。

そこで屹きつとなつて、襟を合せて、枕を仕かえて、氣を沈めて、

「衆怨しゅうおん悉退しつたい散さん、」

と仰向あおむけのまま呪じゆすと、いくらか心が静まつたと見えて、旅僧はついで、うとうととしたかと思うと、ぼたり、と何か枕まくらもと許もとへ

来たのがある。

が、雨垂あまだれとも、血を吸膨れた蚊が一つ倒れた音とも、まだ聞

定めないで現うつつでいると、またぼたり……やがて、ぼたぼたと落ち

たるが、今度は確たしかに頬にかかった。

やつと冷たいのが知れて、掌てのひらで撫なでると、冷ひやりとする。身震みゆいして少し起きかけて、旅僧は恐る恐る燈ともの影かげに透すかしたが、幸さいわいに、血ちの点滴したたりではない。

さては雨漏りと思う時は、蚊帳を伝しずくつて雫しずくするばかり、はらはらと降り灌そそぐ。

耳を澄すますと、屋根の上は大雨であるらしい。

浮世にあらぬ飯の宿にも、これほど侘わびしいものはない。けれども、雨漏あまもりにも旅馴たびなれた僧は、押黙おやみつて小止こどまりを待とうと思つたが、

ますます雫しずくは繁あがくなつて、搔卷かきまきの裾あたりは、びしょびしょ、匆は上あがつて繁吹しづきが立ちそう。

屋根で、鵜がちょう鳥が鳴いた事さえあると聞く。家ごと霞川の底に

沈んだのでなからうか。……トタンに額を打って、鼻頭はなづらに浸にじん

だ、大粒なのに、むつくと起き、枕を取って搔遣かいやりながら、立膝
で、じりりと寄って、肩まで捲まくれた寝衣ねまきの袖を引伸ばしながら、

「もし、大分漏りますが、もし葉越さん。」

と呼んだが答えぬ。

目敏めざとそうな人物が、と驚いて手を翳かざすと、薄すすきの穂を揺ゆすぶるように、
すやすやと呼吸いきがある。

「ああ、よく寝られた。」

と熟じつと顔を見ると、明まなの、眦なじりの切れた睫毛まつげの濃い、目の上に、

キラキラとした清い玉は、同一おなじ一雨垂れに濡れたか、あらず。……

来方こしかたは我にもあり、ただ御身おんみは髪黒く、顔白きに、我は頭蒼かしめおく、面つらの黄なるのみ。同一世おなじの孤児みなしごよ、と覚えすほうり落ちた法師自身の同情の涙の、明の夢に届いたのである。

四辺あたりを見ると、この人目覚めぬも道理こそ。雨の雫の、糸のごとく乱れかかるのは、我が身体からだばかりで、明の床には、夜よをあさる蚤のみも居おらぬ。

南無三宝、魔物の唾つばじや。

三十九

例の、その幻の雨とは悟ったものの、見す見すひやりとして濡

るるのは、笠なしに山寺から豆腐買いに里へ遣られた、小僧の時より辛いので、堪りかねて、蚊帳の裾を引被いで出たが、さてどこを居所とも定まらぬ一夜の宿。

消えなんとする旅籠屋の行燈を、時雨の軒に便る心で。

僧は燈火の許に膝行り寄った。

寝衣を見ると、どこも露ほども濡れてはおらぬ。まず頬のあたりから腕を拭こうとしたほどだったのに……もとより寢床に雨垂の音は無い。

その腕を長く、つき反らして擦りながら、

「衆怨悉退散。」

とまた念じて、静と心を沈めると、この功德か、蚊の声が無く

なつて、寂しんとして静まり返る。

また余りの静しずかさに、自分の身体からだが消えてしまいはせぬか、とい
う懸念がし出して、押おしつづ暝ぶった目を夢から覚めたように恍うっとり惚とと、
しかも円つぶらに開けて、真直まっすぐな燈心を視透みすかした時であつた。

ひらり
翻然ひらりと映つて、行あんどう燈とうへ、中から透いて影がさしたのを、女の
手ほどの大おおきな蜘蛛くも、と咄嗟とつさに首を縮すくめたが、あらず、非あらず、柱に
触つて、やがて油あぶら壺つぼの前へこぼれたのは、木この葉であつた、
あおかえで
青あお楓かえでの。

僧は思わず手で拾つた。がそのまさしく木の葉であるや、しか
らずや、確かめようとしたのか、どうか、それは渠かれにも分りはせ
ぬ。

ト続いて、颯さつと影がさして、横よこ繁吹しぶきに乗ったようにさらりと落ちる。

我にもあらず、またもやそれを拾った時、先せんのを、

「一枚、」

と思わず算かぞえた。

「二枚、」

とあとを数え果さず、三枚目のは、貝ほどの槻けやきの葉で、ひらひらと燈ともを掠しびめて来た、影おおきが大きい。

「三枚、」

と口の裡うちで眩つぶやくと、早や四枚目が、ばさばさと行燈の紙さわに障さわつた。

「四枚、五枚、六枚、七枚、」

と数える内に、拾い上げた膝の上は、早や隙間なく落葉に埋もるる。

空を仰ぐと、天井は底がなく、暗夜の深山にある心地。

おお、この森を峠にして、こんな晩、中空を越す通魔が、魔

王に、はたと捧ぐる、関所の通証券とおりがたであろうも知れぬ。膝を払

つて衝と立って、木の葉のはらはらと揺れるに連れて、ぶるぶる

と渠かれは身震いした。

「えへん！」

と揉潰もみつぶされたような掠かすれた咳せきして、何かに目を転じて、心を

移そうとしたが、風呂敷包の、御経を取出す間も遅し。さすがに

心着いたのは、障子に四五枚、かりそめに貼はつた半紙である。

これはここへ来てからの、心覚えの童わらわうた謡たを、明が書留めて
朝ちようせき夕せきに且つ吟じ且つ詠ながむるものだ、と宵に聞いた。

立ったままに寄つて見ると、真まつさき先に目に着いたのが濃い墨で、

落葉一枚、

僧は更に悚然ぞっとした。

落葉一枚、

二枚、三枚、

十とおとかさねて、

落葉の数も、

ついて落いた君の年、

君の年——

振返ると、まだそこに、掃掛けて廃よしたように、蒼あおきが黒く散ちりぢり々である。

懐かしや、花の常夏とこなつ、

霞川に影が流れた。

その倂おもかけや、倂おもかけや——

紙を通して障子の彼方かなたに、ほの白いその倂おもかけが……どうやら透すいて見えるようで、固くなつた耳の底で、天の高さ、地の厚さを、あらん限り、深く、遥はるかに、星の座も、竜宮ともしびおなじの燈も同一遠さ、と思おもう辺あたり、黄金こがねの鈴を振るごとく、ただこえ一声、コロリン、と琴が響いた。

はつと半紙を見ると、瞳へチラリ。

コロリン！

と字が動いたよう。続けて――

琴の音が………

と記してあつた。

四十

客僧は思案して、心を落着け、衣紋えもんを直して、さて、中に仏像があるのので、床の間を借りて差置いた、荷物を今解き始めたが、深更のこの挙動ふるまいは、木曾街道の盜賊ものどりめく。

不浄よけの金欄きんらんの切きれにくるんだ、たけ三寸ばかり、黒塗くろぬりの

小さな御厨子みずしを捧げ出して、袈裟けさを机に折り、その上へ。

元来もとこの座敷は、京ごのみで、一間の床の間に傍かたわらに、高い袋戸

棚が附かたえいて、傍は直ぐに縁側の、戸棚の横が満月形なりに庭に望んだ

丸窓で、嵌込はめこみの戸を開けると、葉山繁山中空へ波をかさねて見え

るのが、今は焼けたが故郷ふるさとの家の、書院の構えにそっくりで、

懐なつかしいばかりでない。これもここで望のぞみの達せらるる兆きざしか、と床し

い、と明が云つて、直ぐにこの戸棚を、卓子テエブルまが擬ないの机に使つて、

旅たび碇すずりも据えてある。椅子がわりに脚榻きやたつを置いて。……

周囲まわりが広いから、水差茶道具の類も乗せて置く。

そこで、この男の旅姿を見た時から、ちやんと心づもりをした

そうで、深切しんせつな宰八爺じじいは、夜の具ものと一所いしょに、机しよつを背負しよつて来てくれたけれども、それは使わな^いいで、床の間の隅ほこりに、埃ほこりは据え^ず差置さいた。心こころに叶かなつて逗とまり留りゆうもしようなら、用もちいて書見しよみをなさ^いまし、と夜食よじきの時に言いつてくれた。

その机しよつを、今いまここへ。

御厨子ごちゆうしを据すえて、さてどこへ置直おきそうと四辺あたりを視みた時とき、蚊帳ぶんぢやうの中なかで、三声みこえばかり、太いたく明あが魘うなされた。が……此方こなたの胸むねが痛いたんだばかりで、揺起ゆきすまでもなく、幸さいわいにまた静しずかになつた。

障子しやうしを開ひらけて、縁側えんがわは自分じぶんも通とほるし、一方いっぽうは庭にわづたいに入いつた口くちで、日頃ひぐらはとにかく、別べつに今夜こんやは何事なにごともない。頻しきりに氣きになるのは、大掃除おほいそじの時ときのために、一枚まいまいはずれる仕掛しかけだという、向うの

天井の隅と、その下に開けた事のない隔ての襖ふすまの合せ目である。

「わが仏守らせたまえ。」

と祈念なし、机を取つて、押おしいただ戴だいて、屹きつと見て、其方そなたへ、

と座を立とうとする。

途端であつた。

「しばらく。」

ずしん、地の底じへ響く声が出た。

明が呼んだか、と思う蚊帳うちの中で、また烈はげしく魘うなされるので、呼吸いきを詰めて、

「……………」

色を変える。

襖の陰で、

「客僧しばらく——唯ただいま今それへ参るものがござる。往来を塞ふさぐまい。押し通るは自在じゃが、仏像ゆえに遠慮をいたす。いや、御身おみに向うて、害を加うる仔細しさいはない。」

ト見ると襖から承塵なげしへかけた、雨じみの魍もうり魍ようと、肩を並べて、その頭かしら、鴨居かもいを越した偉大の人物。眉太く、眼まなこ円つぶらに、鼻隆かたうして口の角けたなるが、頬ほお肉豊じゆたかに、あっぱれの人品なり。生きびらの帷子かたびらに引手のごとき漆紋の着いたるに、白き襟をかさね、同一色おなじの無地の袴はかま、折目高はに穿いたのが、襖一杯にぬつくと立つた。ゆき短みじかな右の手に、畳んだままの扇を取つて、温顔に微笑を

含み、動き出でつ、ともなく客僧の前へのつしと坐ると、気にゆる圧おされた僧は、ひしと茶ちや斑まだらの大牛ひつしに引敷ひつしかれたる心地がした。はつと机つつぶに、突俯つつぶそうとする胸を支えて、

「誰だ。」

と言つた。

「六十余州、罷まかりとお通とおるものじや。」

「何と申す、何人なんびと……」

「到る処の悪左衛門、」

と扇子を構えて、

「唯今、秋谷まかりあに罷まかりあ在ある、すなわち秋谷悪左衛門と申す。」

「悪……」

「悪は善悪の悪でござる。」

「おお、悪……魔、人間を呪のろうものか。」

「いや、人間をよけて通るものじゃ。清き光天にあり、夜よがらす鴉すておの羽はうらも輝き、瀬の鮎あゆの鱗うろこも光る。隈くまなき月を見るにさえ、捨すてお小舟ふねの中にもせず、峰の堂の縁でもせぬ。夜半人跡の絶えたる処は、かえつて茅屋かややの屋根ではないか。

しかるを、わざと人間どもが、迎え見て、損そこなわるるは自業自得じゃ。」

「真日まひな中に天下の往来を通る時も、人が来れば路を避ける。出会いであえば傍わきへ外れ、遣過やりすごして背後うしろを参る。が、しばしば見返る者あれば、煩わづわしさに隠れ終おせぬ、見て驚おどくは其奴そやつの罪じや。

いかに客僧、まだ拙それがし者を疑うたがわるるか。」

と莞爾かんじとして、客僧の坊主頭を、やがて天井から瞰下みおろしつつ、

「かくてもなお、我等がこの宇宙の間に罷まかりあ在あるを怪あやしまるるか。

うむ、疑いに睜みはられたな。睜みひらいたその瞳も、直ちに瞬まく。

およそ天下に、夜よを一目も寝ぬはあつても、瞬またたきを

してあるまい。悪左衛門をはじめ夥間なかも一統、すなわちその人間の

瞬まく間を世界とする——瞬まくという一秒時には、日輪の光によつ

て、御身おみ等が顔かお容かたち、衣服の一切すべて、睫毛まつげまでも写し取らせて、

御身等その生命の終る後、幾百年にも活けるがごとく伝えらるる長い時間のあるを知るか。石と樹と相打つて、火をほとばしらすも瞬く間、またその消ゆるも瞬く間、銃丸の人を貫くも瞬く間だ。すべて一たびただ一人の瞬きする間に、水も流れ、風も吹く、木の葉も青し、日も赤い。天下に何一つ消え失するものは無うして、ただその瞬間、その瞬く者にのみ消え失すると知らば、我等が世にあることを怪むまい。」

と悠然として 打 頷き、

「そこでじゃ、客僧。

たといその者の、自から招く禍とは言え、月のたちまち雲に隠れて、世の暗くなるは怪まず、行燈の火の不意に消ゆるに喚き、

天に星の飛ぶを訝いぶらず、地に瓜うりの躍るに絶叫する者どもが、われら一類が為なす業わざに怯おびかされて、その者、心を破り、氣きを傷きずけ、身そこなを損そえば、おのずから引いて、我等修業さまたげの妨たげとなり、従したがうて罪の障さわりとなつて、実は大おおいに迷惑まごいたす。」

と、やや歎息なげきをするようだったが、更あらためて、また言いつた。

「時に、この邸ていには、当月はじめかたつ方かたから、別に逗と留りゆうの客きやくがある。同一境涯おなじにある御仁ごじんじや。われら附添つけぞくつて眷属けんぞくども一同守護しゆごをいたすに、元來、人足ひとあしの絶えた空屋くうぐを求めて便たよつた処ところを、唯ただいま今眠りいまおる少年せうねんの、身にも命にも替かうる願ねがあつて、身命みんめいを賭か物ものにして、推おして草叢くさむらに足痕あしあとを留とどめた以来、とかく人出入にんしゆりん騒々さわしく、かたがた妨たげげに相成あるから、われら承おつて片端ぺんぱんから追お

つばら
 払うが、弱つたのはこの少年じや。

顔かお容かたち

に似ぬその志の堅固さよ。ただお伽とぎめいた事のみ語つ

て、自からその愚おろかさを恥じて、客僧、御身にも話すまいが、や、
 この方実は、もそつと手酷てひどい試こころみをやつた。

あるいは大磐石を胸に落し、我その上に踏ふみ跨またがつて咽喉のどを緊
 め、五体に七筋の蛇を絡まとわし、牙きばある蜥蜴とかけに噛かませてまで呪のろうた
 が、頑として退かず、悠々と歌を唄うに、我が折れ果てた。

よつて最後の試み、としてたつた今、少年これに人を殺させた——
 すなわち殺された者は、客僧、御身おみじやよ。「
 と、じろじろと見るのである。

覚悟しながら戦おのいて、

「ここは、ここは、ここは、冥土か。」

と目ばかり働く、その顔を見て、でっぷりとした頬に笑を湛え、
くつくつ 忍しのび 笑わら いして、

「いや、別条はない。が、ちようどこの少年の、いましうな 魔ま された
時、客僧、何と、胸が痛かつたろう。」

ズキリと応こたえて、

「おお、」

「すなわち少年が、御身に毒を飲ませたのだ。」

「……………」

「別でない。それぞれその戸袋に載のつた朱泥しゆでいの水差みずさし、それに
汲くんだは井戸の水じゃが、久しい埋うも井れいじゃに因よつて、水の色が

真まつさお蒼さおじや、まるで透通る草の汁よ。

客僧等が茶を参つた、爺じいが汲じんで来た、あれは川水。その白しろに濁ごりがまだしも、と他の者はそれをを用いる、がこの少年は、前さきに猫の死骸の流れたのを見たために、得飲えまずしてこの井戸のを仰ぐ。

今も言う通りだ。殺さぬまでに現責うつせめに苦しめ呪うがゆえ、生命いのちを縮めては相成らぬで、毎夜少年の気着かぬ間に、振袖に緋ひの扱しごき帯おびした、面つらが狗いぬの、召使に持たせて、われら秘蔵こみどの濃濃緑りの酒を、瑠璃色るりいろの瑪瑙めのうの壺つぼから、回生剤きつけとして、その水にしたらして置くが習ならいじや。」

四十二

「少年は味あじおうて、天与の靈泉と舌鼓を打つておる。

我ら、いまし少年の魂に命じて、すなわちその酒を客僧に勧め飲ましむる夢を見させたわ。（ただ一口試みられよ、さわやか爽な涼しい芳かんばしい酒の味がする、）と云うに因つて、客僧、御身おんみはなおさら猶ためら予う、手が出ぬわ。」

とまた微笑ほほえみ、

「毒味までしたれば、と少年は、ぐと飲み飲み、無理に勧める。

さまでは、とうけて恐る恐る干すと、ややあつて、客僧、御身は苦悶くもんし、煩はんらん乱し、七転八倒して黒き血のかたまりを吐くじや。」

客僧は色真蒼である。まつさお

「驚いて少年が介抱する。が、もう叶わぬ、臨終という時、

（われは僧なり、身を殺して仁をなし得れば無上の本懐、君その素志を他に求めて、疾くこの恐しき魔所を遁れられよ。）

と遺言する。これぞ、われらの誂じや。あつらえ

蚊帳の中で、少年の斃されたは、この夢を見た時よ、なあ。

これならば立退くであろう、と思つくと、ああ、埒あかぬ。客僧、御身が仮に落入るのを見る、と涙を流して、共に死のうと決心した。

葛籠に秘め置く、守刀をキラリと引抜くまで、襖の蔭から

見定めて、

(ああ、しばらく、)

と留めたは、さて、殺しては相済まぬ。

これによつて、われら守護する逗留客は、御自分の方から、この邸を開いて、もはや余所へ立退くじやが。

その以前、直々に貴面を得て、客僧に申談じたい儀があると謂わるる。

客は女性でござるに因つて、一応拙者から申入れる。ためにこれへ罷出た。

秋谷悪左衛門取次を致す、

と高らかに云つて、穏和に、

「お逢い下さりようか、いかが、」

と云つた。

僧は思わず、

「は、」と答える。

声も終らず、小山のごとく膝を揺ゆらげ、向け直したと見ると、

「ぐざらつしやい！」

破われがね鐘のごときその大音、哄どつと響いた。目くるめいて、魂遠く

なるほどに、大魔の形ぎようたい体、片隅の暗がりへ吸すいこ込まれたように

すつと退のいた、が遥はるかに小さく、およそ螢の火ばかりになつて、し

かもその衣きぬの色も、袴はかまの色も、顔の色も、頭かしらの毛の総そう髪がみも、鮮あ

麗ざやかになお目に映る。

「御免遊ばせ。」

向うから襖一枚、颯と蒼く色が変わると、雨浸の鬼の絵の輪郭を、乱れたままの輪に残して、ほんのり桃色がその上に浮いて出た。

ト見ると、房々とある艶やかな黒髪を、耳許白く梳つて、櫛巻にすなおに結んだ、顔を俯向けに、撫肩の、細く袖を引合わせて、胸を抱いたが、衣紋白く、空色の長襦袢に、朱鷺色の無地の羅を襲ねて、草の葉に露の玉と散った、浅緑の帯、薄き腰弱々と糸の艶に光を帯びて、乳のあたり、肩のあたり、その明りに、朱鷺色が、浅葱が透き、膚の雪も幽に透く。

黒髪かけて、襟かけて、月の雫がかかったような、裾は捌けず、しつとりと爪尖き軽く、ものの居て腰を捧げて進むごとく、底

の知れない座敷をうしろに、果なき夜の暗さを引いたが、歩行くともなく立寄つて、客僧に近寄る時、いつの間にか襖が開くと、左右に雪洞ほんぼりが二つ並んで、敷居際に差向つて、女の膝ばかりが控えて見える。そのいずれかが狗いぬの顔、と思いをめぐらす暇もない。

僧は前にたたずゝんだのを差覗さしのぞくように一目見て、

「わッ、」

とばかりに平伏ひれふした。実にこそその顔は、爛々たる銀しろがねの眼まなこ一雙ふたごころび、眈まなじりに紫むらの隈くま暗く、頬骨ほこのこけた頤おとが蒼味あざみがかり、浅葱あさぎに窩くぼんだ唇裂くちびるけて、鉄漿かね着けた口、柘榴ざくろの舌、耳の根には針のごとき鋭とき牙きばを嚙かんでいたのである。

四十三

「おお、自分の顔を隠したさ。貴僧あなたを威おどす心ではない、戸外そとへ出ます支度のまま……まあ、お恥かしい。」

と、横へ取つたは白鬼はつきの面。端麗にして威嚴あり、眉美しく、目の優しき、その顔かんばせを差俯さしうつむ向け、しとやかに手を支ついた。

「は、は、はじめまして、」

と、しどろになつて会釈すると、面おもてを上げた寂さみしい頬ほに、唇紅あごう莞爾にっこりして、

「前刻さつき、憚はばかりへいらつしやいます、廊下でお目に懸かりましたよ。」

客僧も、今はなかなかに胴据りぬ。

「貴女はどなたでございます。」

と尋ねたが、その時はほぼその誰なるかを知っているような気がしたのである。

美女は褌を深う居直つて、蚊帳を透して打傾く。

萌黄が迫つて、その衣の色を薄く包んだ。

「この方の、母さんのお知己、明さんとも、お友達……」
と口を結んだが愁を帯びた。

此方は、じりじりと膝を向けて、

「ああ、貴女が、」

「あの、それに就きまして、貴僧にお願いがございますが、どう

ぞお聞き下さいまし。」

とまた蚊帳越うちながに打視うちながめ、

「お最愛いとしい、沢山たんとお寔やつれ遊あそばした。罪むくも報くもない方が、こんなかんなんしんくに艱難かんなんしんく辛苦しんくして、命いのちに懸かけても唄うたが聞ききたいとおおつしやるのも、母おつかさんの恋こひしさゆえ。

その唄うたを聞きこう聞きこうと、お思おもいなさいます心こころから、この頃ころでは身みも世よも忘われて、まあ、私わたしを懐なつかしがって、迷まよって恋こひにおおなりなすすった。

その唄うたは稚おさない時とき、この方なたの母ははさんから、口くち移うつしに教おそわって、私わたしは今いまも、覚しゃえている。

こうまで、お憧こがれななさるもの、ちよちつと一ひと目めお目めにかかかって、

お聞かせ申もおしとうござんすけれど、今顔をお見せ申しますと、お慕いなさいます御心から、前後も忘れて夢見るように、袖からに搦すんで手に縫すがり、胸に額を押当てて、母よ、姉よ、とおつしやいますもの。

どうして貴僧あなた、摺すり抜ぬけられよう、突離つりされよう、振切ふりられましよう、私は引寄せます、抱だ緊きしめます。

と血を分けぬ、男と女は、天にも地にも許おききてぬ掟おきて。

私たちには自由自在——どの道浮世に背いた身体からだが、それでは外ほかに願ねがいのある、私の願ねがいの邪魔になります。よしそれとても、棄す身の私てみ、ただ最い惜おしさ、可愛いとさに、氣の狂いとい、心の乱れるまに随ませまましても、覚悟の上なら私一人、自分の身いとは厭いといはしませぬ。

厭わぬけれど……明さんがそうすると、私たちと同一おなじような身の上になりますもの……

それはもう、この頃のお心では、明さんは本望らしい——本望らしい、」

とさも懸想けそうしたらしく胸を抱いたが、鼻筋白く打背いて、

「あれあれ御覧なさいまし。こう言う中うちにも、明さんの母おつかさんが、花こずえの梢と見紛うばかり、雲間を漏れる高たか楼どのの、虹にじの欄干てすりを乗出して、叱りも睨にらみも遊ばさず、児この可愛さに、鬼とも言わず、私を拝んでいなさいます。お美しい、お優しい、あの御顔を見ましては、恋の血汐ちしおは葉に染めても、秋のあの字も、明さんの名なに憚はばかって声には出ませぬ。

一言も交わさずに、ただ御顔を見たばかりでさえ、最愛いとしさに
 覚悟も弱る。私は夫のござんす身体からだ。他の妻でありながらも、母
 さんをお慕い遊ばす、そのお心の優しさが、身に染む時は、恋と
 なり、不義となり、罪となる。

実の産うみの母御でさえ、一旦この世を去られし上は——幻にも姿
 を見せ、乳ちを吞ませたく添寝もしたい——我が児こ最惜いとむ心さえ、
 天上では恋となる、その忌憚はばかりで、御遠慮遊ばす。

まして私は他人の事。

余計な御苦勞かけるのが御不便ごふびんさ。決して私は明さんに、在所ありか
 を知らせず隠れていたのに、つい膝許ひざもとの稚おいものが、粗相あで手
 毬まりを流したのが悪縁となりました。

彼方も私も身を苦しめ、心を傷めておりましたが、お生命の危
いまでも、ここをおたち遊ばさぬゆえ、私わきへ参ります。

あんまりお心が可傷しい、さまでに思召すその毬唄は、その内
時節が参りますと、自然にお耳へ入りましょう！

それは今、私がこの邸を退きますと、もう隅々まで家中が明る
なる。明さんも思い直して、またここを出て旅行立ちをなさいま
す。

早や今でも沙汰をする、この邸の不思議な事が、界限へ拡が
りますと、——近い処の、別荘にあの、お一方……」

「やまい病の後の保養に来ておいでなさいます、それはそれは美しい、
よそ余所の婦人おんなが、気軽な腰元の勧めるまま、徒つれづれ然の慰みに、あの
 宰八を内証で呼んで、（鶴谷の邸の妖怪変化は、皆私みんなが手伝いの
 人と一所に、憂晴うさはらしにしたいたずら遊戯あそび、聞けば、怪我人も沢
 山んと出来、嘉吉とやら気が違ったのもあるそうなの、つい心ない、気
 の毒みんなな、皆の手当をよくするように。……）
 と白銀黄金しろがねこがねを沢山授ける。

さあ、この事が世に聞えて、ぱつと風説うわさの立たちますため、病人は
 心が引立ひったち、気の狂ったのも安心して治りますが、免のがれられぬ因
 縁で、その令室おくがたの夫というが、旅行たびさきの海から帰って、その

風聞を耳にしますと——これが世にも恐ろしい、嫉妬深い男でござんす。——

その変化沙汰へんげざたのある間、そこに籠こもつた、という旅の少年。……

この明さんと、御自分の令室おくがたが、てつきり不義きわまに極きつた、と

最早その時は言訳立たず。鶴谷の本宅から買い受けて、そしてこの空邸へ、その令室をとじ籠こめましょう。

あなた
貴僧。

その美しい令室おくがたが、人に羞はじ、世に恥じて、一室処ひとまどころを閉切とじきつて、自分を暗夜やみに封じ籠めまます。

そして、日が経たつに従うて、見もせず聞きもせぬけれど、浮名うきなが立たつて濡衣ぬれぎぬ着た、その明さんが何となく、慕わしく、懐かし

く、果は恋しく、憧憬あこがれる。切ない思い、激しい恋は、今、私の心、また明さんの、毬唄聞こうと狂うばかりの、その思おもと同おな一事。ひととせ
 一歳か、一歳か、三歳みとせの後か、明さんは、またも国々めぐを廻り、廻めぐつて、唄は聞かずに、この里へ廻めぐつて来て、空家なつか懐し、と思おもいましょう。

そうなる時には、令室おくがたの、恋の染まった靈魂たましいが、五色しきかがりの手毬となつて、霞川に流れましょう。明さんが、思おもいの丈だけを吐つく息は、冷たき煙と立たちのぼつて、中空の月も隠れましょう。二人ふたりの情なさけの火かが重かさなり、白しろき炎の花となつて、襖障子ふすましようじも燃えましよう。日、月でもなし、星でもなし、灯ともしびでもない明あかりに、やがて顔を合わせましよう。

邸は世界の暗だのに。……この十畳は暗いのに。……

明さんの迷つた目には、煤も香を吐く花かと映り、蜘蛛の巣は
 名香の薫が靡く、と心時めき、この世の一切を一室に縮めて、

そして、海よりもなお広い、金銀珠玉の御殿とも、宮とも見えて、
 おくがた令室を一目見ると、唄の女神と思ひ崇めて、跪き、伏拝む。

長く冷たき黒髪は、玉の緒を揺る琴の糸の肩に懸つて響くよう、
 互の口へ出ぬ声は、膚に波立つ血汐となつて、聞こえぬ耳に調を
 通わす、幽に触る手と手の指は、五ツと五ツと打合つて、水晶の
 玉の擦れる音、戦く裳と、震える膝は、漂う雲に乗る心地。

ああこれこそ、我が母君……と縋り寄れば、乳房に重く、胸に
 軽く、手に柔かく腕に撓く、女は我を忘れて、抱く――

我わがこ兒危いい、目め盲めしいたか。罪つみに落おつる谷底ひとつやの孤こ家つやの灯あかりともたどもど迎むかれよ。と実まことの母君ははきみの大空おほそらから、指ゆびさしたまう星ほしの光ひかりは、電いでんとなつて壁かべに閃ひらめき、分われよ、退のけよ、とおつしやる声こゑは、とどろに棟むねに鳴渡なみわたり、涙なみだは降ふつて雨あめとなる、情なさけの露つゆは樹きに灌そそぎ、石いしに灌そそぎ、草くささえ受うけて、暁あさひの旭あすひの影かげには瑠璃るり、紺こんじよう青せい、紅くれないの雫しずくともなるものを。

罪つみの世よの御二人おににには、ただ可お恐そしく、凄すじまさに、かえつて一層いっしやう、ひしひしと身みを寄よせる。

そのあわれさに堪たえかねて、今いまほども申ましました、兒こを思おもうさえ恋こひとなる、天上てんじやうの規のりを越こえて、掟おきてを破やぶつて、母君ははきみが、雲うみの上うへの高たか楼かどの、玉たまの欄干らんかんにさしかわす、桂かつらの枝えだを引ひ寄よせて、それそれがに縫ぬい

つて御殿の外へ。

空に浮うかんだおからだだが、下界から見る月の中から、この世へ下りる間には、雲が倒さかさまに百千万千、一億万丈の滝となつて、ただどうとうと底知れぬ下界の霄そらへ落ちてゐる。あの、その上を、ただひとすじ
 一条、霞のような御裳おすそでも、撓たわわに揺れる一ひとえだ枝の桂をたよりになあぶなさる危あぶなさ。

おともだちの上じょうろう 藤たちが、ふと一人見着けると、にわか
 天楽の音ねを留とどめて、はらはらと立たちかかつて、上へ桂を繰り上げる。
 引留められて、御姿が、またもとの、月の前へ、薄色のお召物で、
 筭こうがいがキラキラと、星に映つて見えましよう。

座敷で暗やみから不意にそれを。明さんは、手を取合つたは仇あだおんなし婦、

と気が着くと、襖も壁も、大紅蓮。跪居る畳は針の筵。袖には
 蛇、膝には蜥蜴、目の前見る地獄の状に、五体はたちまち氷とな
 っ、慄然として身を退きましよう。が、もうその時は婦人の一
 念、大鉄槌で碎かれても、引寄せた手を離しましようか。
 胸の思は火となつて、上手が書いた金銀ぢらしの錦絵を、炎
 に翳して見るような、面も赫と、胡粉に注いだ臙脂の目許に、紅
 の涙を落すを見れば、またこの恋も棄てられず。恐怖と、恥羞に
 震う身は、人膚の温かさ、唇の燃ゆるさえ、清く涼しい月の前
 の母君の有様に、懐しさが劣らずなつて、振切りもせず、また猶
 予う。

思余つて天上で、せめてこの声きこえよと、下界の唄をお唄い

の、母君の心を推量^{おしはか}つて、多勢の上臈たちも、妙なる声をお合せある——唄はその時間えましよう。明さんが望^{のぞみ}の唄は、その自然の感応で、胸へ響いて、聞えましよう。」

と、神々しいまで面正^{おもて}しく。……

僧は合掌して聞くのであった。

そして、その人、その時、はた明を待つまでもない、この美^{たおや}人の手、一たび我に触れなば、立^{たちどころ}処にその唄を聞き得るであらうと思つた。

四十五

美たおやめ人は更あらためて、

「貴僧あなた、この事を、ただ貴僧の胸ばかりに、よくお留め遊ばしておつしやつてはなりません。これは露ほども明かさずに、今の処、明さんを、よしなに慰めて上げて下さいまし。」

日頃のお苦くるしみに疲れてか、まあ、すやすやとよく寝て、

と、するすると寄つた、姿が崩れて、ハタと両手を畳につくと、麻かおりの薫がはつとして、肩に萌黄もえぎの姿つめたく、薄うすくれない紅が布目を透いて、

「明あきちゃん……」

と崩るるごとく、片頬かたほを横に接つけんとしたが、屹きつと立退たちひいて、

袖を合せた。

僧を見る目に涙が宿つて、

「それではお暇いとまいたしましょう。稚おきない事を、貴僧あなたにはお恥かしいが、明さんに一式のお愛相あいそに、手毬をついて見せましょう、あの

……」

と掛けた声の下。雪洞ほんぼりの真中まんなかを、蝶々のように衝つと抜けて、

きりかむろきりかむろで兎うさぎの顔した、女めの童わらわが、袖のに載せて捧げて来た。手毬

を取つて、美たおやめ女たなそこは、掌たなそこの白しろきが中に、魔界まがいはしかりや、紅梅こうばいの

大おほいなる蒼つぼみと搔撫かいなでながら、袂たもとのさきを白齒しらはで含むと、ふりが、

はらりと襷たすきにかかる。

藤ろうたけた笑えみ、恍惚うつとりして、

「まあ、私ばかり極きまりが悪い、皆さんも来ておつきでないか。」

蚊帳をはらはら取巻いたは、桔梗刈萱、美しや、萩女郎

花、優しや、鈴虫、松虫の——声々に、

(向うの小沢に蛇が立つて、

はちまん

八幡長者のおと女、

よくも立つたり、企んだり、

手には二本の珠を持ち、

足には黄金のくつを穿き……)

壁も襖も、もみじした、座敷はさながら手毬の錦——落ちた木

の葉も、ぱらぱらと、行燈を繞つて操る紅。中を膝つて雪の散

るのは、幾つとも知れぬ女の手と手。その手先が、心なしにちよ

いちよい触ると、僧の手首が自然はたはたと躍上った。

(京へのぼせて狂言させて、

寺へのぼせててならい手習させて、

寺の和尚が道楽和尚で、

高い縁から突落されて、)

と衝と投げ上げて、トンと落して、高くついた。

待てよ。ふるさと古郷の涅槃会には、はだ膚に抱き、たもと袂に捧げて、町方の

娘たち、一人が三ツ二ツ手毬を携え、同じように着飾つて、山寺

へ来て突つき競くらを戯れる習慣がある。わか少い男ははばか憚つて、かねつき鐘撞堂か

らのぞ覗きつあそびつその遊戯に見惚れたが……おおでら巨刹のたそがれ黄昏に、大勢の

娘の姿が、はるか遙に壁に掛かかつた、極彩色の涅槃の絵と、おなじさま同一状に、

一幅の中へ縮まった景色の時、本堂の背後うしろ、位牌堂いはいどうの暗い畳廊

下から、一人水際立つた妖艶うつくしいのが、突きはせず、手鞆を袖に抱いたまま、すらすらと出て、卵塔場を隔てた几帳窓きちようまどの前を通る、と見ると、もう誰の蔭になつたか人数ひとかずに紛れてしまつた。それだ、この人は、いや、その時と寸分違わぬ——

と僧は心に——大方明も鐘撞堂から、この状さまを、今視ながめている夢であろう。何かの拍子に、その鐘が鳴ると目が覚めよう、と思ふ内……

身動みじろぎに、この美たおやめ女びんの鬢おくの後れ毛、さらさらと頬かかに掛かると、その影やらん薄曇りに、目まぶちのあたりに寂さびしくなりぬ。

（筭こうがい落こまくらし小枕落し……）

と綾あやに取る、と根が揺らいで、さつと黒髪が肩に乱るる。

みだれし風とりなり采恥かしや、早これまでと思うらん。落した手毬を、女めわらわの童の、拾つて抱くのも顧みず、よろよると立たちかかった、蚊帳に姿を引寄せられ、褌つまのこぼれた立姿。

屋の棟熟じっと打仰いで、

「あれ、あれ、雲が乱るる。——花の中に、母君の胸が揺ゆぐ。お、最いと惜おしの御子おこに、乳飲まそうと思召すか。それとも、私が拳ふ動るまに、心騒ざぎのせらるるか。客僧あなた方には見えまいが、地じの底すに棲すむものは、昼も星の光を仰ぐ。御姿かたちは、よく見えても、かしこは天宮、ここは地獄、言ことといつては交まわされぬ。

美しき夢見るお方、—

あれ、かしこに母君まし在ますぞや。

愛あい惜じやくの一念のみは、魔界

の塵ちりにも曇りはせねば、我が袖、鏡と御覽ぜよ。今、この瞳ちりに宿れる雫しずくは、母君の御情おんなさけの露を取次ぎ参らする、乳ちしたたりの滴ぞ、と袂たもとを傾け、差寄せて、差さしうつむ俯つむき、はらはらと落涙して、

「まあ、稚児おさなごの昔にかえつて、乳を求めて、……あれ、目を覚す……」

さらば、さらば、御僧おんそう。この人夢の覚めぬ間に、と片手をついて、わかれの会釈。

ト玄関から、庭前にわさきかけて、わやわやざわざわ、物音、人声。目を擦りこす、目を睜みはり、目を拭ぬぐいいる客僧きやくそうに立別れて、やがて静しず々ず——狗いぬの顔した腰元が、ばたばたと前さきへ立ち、炎燃ゆ、と緋ひのちらめく袖口で音なく開けた——雨戸ちりばに鏤ちりばむ星かどいでの首途。十四

日の月の有明に、片頬を見せた風采は、薄雲の下に朝顔の苔の
 解けた風情して、うしろ髪、打揺ぎ、一たび蚊帳を振返る。

「やあ、」

と、蚊帳を払って、明が翻然と飛んで縫った。――

袂を支える旅僧と、押揉む二人の目の前へ、この時ずか、と頭
 われた偉人の姿、靄の中なる林のごとく、黄なる帷子、幕を蔽
 うて、廂へかけて仁王立、大音に、

「通るぞう。」

と一喝した。

「はっ、」

と云うと、奇異なのは、宵に宰八が一杯――汲んで来て、――

縁の端はしぢか近てに置いた手桶おけが、ひよい、と倒さか斛とんぼ斗ひつに引ひくりかえると、ざぶりと水を溢こぼしながら、アノ手でつかつかと歩ある行るき出した。その後を水が走はつて、早しのや東の雲のめの雲白くく、煙へのようさきな潦さつ、庭おの草しろいを流ながるる中に、月が沈しんで舟ふねとなり、舳へを颯さつと乗のり上げて、白お粉しろいの花越たしに、すらすらと漕こいで通とる。大魔おほまの袖そでや帆ふとなりけん、美た女おやめは船ふねの几帳きちようにかくれて、

(ここはどこの細道じゃ、

細道じゃ、

天神様の細道じゃ、

細道じゃ、

少し通して下さんせ……)

最切いとせめて懐なつかしく聞ゆ、とすれば、樹立こたちの茂しげりに哄どつと風、木の葉、
緑の瀬を早み……横雲が、あの、横雲が。

明治四十一年（一九〇八）年一月

青空文庫情報

底本：「泉鏡花集成5」ちくま文庫、筑摩書房

1996（平成8）年2月22日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第十一卷」岩波書店

1941（昭和16）年8月15日第1刷発行

※疑問点の確認にあたっては、底本の親本を参照しました。

※「それとも鼠だが」の「だが」は、底本の親本でもママですが、岩波文庫版では「だか」となっています。

入力：門田裕志

校正：高柳典子

2003年8月28日作成

2006年5月20日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

草迷宮

泉鏡花

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>